

郵筒 なにわ・大阪文化遺産学叢書7

木崎愛吉
旧蔵

本山コレクション 金石文拓本選

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

以為銘曰
試看天下讀書人有幾許其名一鄉一國者又有幾許至其著稱海內者落星是孰非
我之黨與繁文人之相輕何執德之偏也人皆暗於齊讒我獨由之齊安於戲休哉君之言
也設心如斯可不謂賢歟

伊勢 齋藤謙 撰
丹後 野田逸題 表
門人 吳 集 書

安政三年歲次乙卯五月 孝子繁 建

なにわ・大阪文化遺産学叢書7

木崎愛吉
旧蔵

本山コレクション
ヨシキヨ
金石文拓本選

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

表紙図版
篠崎小竹墓碑銘
拓本（部分）

ごあいさつ

関西大学には、毎日新聞社五代目社長本山彦一氏が蒐集した「本山コレクション」が所蔵されています。本山コレクションは、関西大学名誉教授末永雅雄先生（昭和六三年度文化勲章受章者）が、本山氏の指名により、整理・調査にあられたご縁によって、本山氏のご遺族のご厚意で、関西大学に移管されることになったものです。総点数は約一六、〇〇〇点に及び、日本でも有数のコレクションです。

本山コレクションには、明治末年から大正初年にかけて木崎愛吉（好尚）氏が収集した金石文拓本類があります。木崎氏は、大坂農人橋材木町に生まれ、大阪朝日新聞社の記者を経て、大阪の郷土史家として多くの著書を残しています。『撰河泉金石文』・『大日本金石史』・『大坂金石史』などを著し、これらは今なお金石文研究の出発点となっているものです。

金石文は、宿命的に風化や破壊の被害を受けるものです。幸いにこれらの被害に遭わなかったとしても、普段、目にすることができない環境におかれているものも多くあります。こうした事情は、近年の金石文研究の低迷の要因ともなっています。木崎氏が収集したものには、現在では失われてしまったり、剥落が進んだ金石文の拓本があり、われわれに貴重な資料を提供してくれる文化遺産としての価値を有しています。

当センターの歴史資料遺産研究プロジェクトでは、平成一七年度より、関西大学博物館所蔵の木崎愛吉氏収集の拓本調査をすすめ、このたび、そのうちの七〇点を選び、『なにわ・大阪文化遺産学叢書7 木崎愛吉
旧蔵 本山コレクション 金石文拓本選』を刊行することとなりました。本書が、金石文研究の新たな契機となるとともに、自らを「大阪狂」と称し、大阪をこよなく愛した木崎愛吉氏の思いを感じていただける機縁となれば幸いです。

二〇〇八年三月

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

センター長 高橋 隆 博

目次

ごあいさつ

高橋隆博

3

カラー図版

7

単色図版

一般碑石

23

顕功頌徳碑

29

墓誌・墓碑銘類

32

墓碑類

50

板石・石塔婆類

71

石仏造像銘類

78

燈籠類

82

総論

『大日本金石史』刊行にいたる木崎愛吉の軌跡

西本昌弘

91

本山コレクションと木崎愛吉旧蔵拓本

櫻木潤

95

大塩の乱「勇士」としての坂本鉉之助

松永友和

99

—木崎愛吉旧蔵「坂本剛毅碑」拓本の意義—

拓本解説

103

収録拓本一覧

150

凡例

- この図録は、関西大学博物館が所蔵する本山コレクション金石文拓本（日本の部）のうち、七〇点について図版と解説を付したものである。
- 拓本解説には、図版番号、名称、整理番号、員数、年代、解説文、拓本銘文、朱印、添書・裏書、参考文献を付した。
- 拓本の名称および整理番号は、『関西大学考古学等資料室紀要』第三号（関西大学考古学等資料室、一九八六年）の「日本の部 金石文拓本目録」に従ったが、名称を一部改めたものもある。
- 年代は、銘文に記された年次を表記した。年次が書かれていないものは、時代名を付した。なお検討を要する資料については表記しなかった。
- 拓本銘文は、原文の字体を重視したが、正字に改めたものもある。
- 拓本銘文中、改行は拓本資料に従ったが、一行に収まらない場合は追込みとし、改行は「」で示した。
- 判読できない文字は□で示した。文字数が不明のときは「□」とした。なお、他の資料で判読されている場合は、□の右側に「」で文字を付し、推測される場合は「カ」とした。
- 金石文拓本に種子として用いられている梵字は、括弧内に慣用音を記し、右側に（梵字）と付した。
- 拓本資料に捺印がみられないものや、添書・裏書の記載がないものはその項目を省略した。なお、添書・裏書の改行は斜線／で示した。
- 図録の編集は、西本昌弘、櫻木潤、松永友和が担当した。拓本解説は、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所センター研究員・PD・RAおよび関西大学非常勤講師・関西大学大学院生が執筆した。



木崎愛吉（好尚）（1865～1944）

大阪朝日新聞社の第1回通信会議にて（大正元年（1912）11月）

（朝日新聞社所蔵）



拓本に捺された木崎の落款 左から〈好尚手拓金石〉〈好尚所拓〉〈好尚所蔵金石〉（いずれも朱文方印）



『撰河泉金石文』『大日本金石史』『大坂金石史』の初版本（関西大学図書館所蔵）



自著と落款〈木崎愛吉〉（白文方印）（本山コレクション『大日本金石史』第1巻 関西大学図書館所蔵）



(正面)

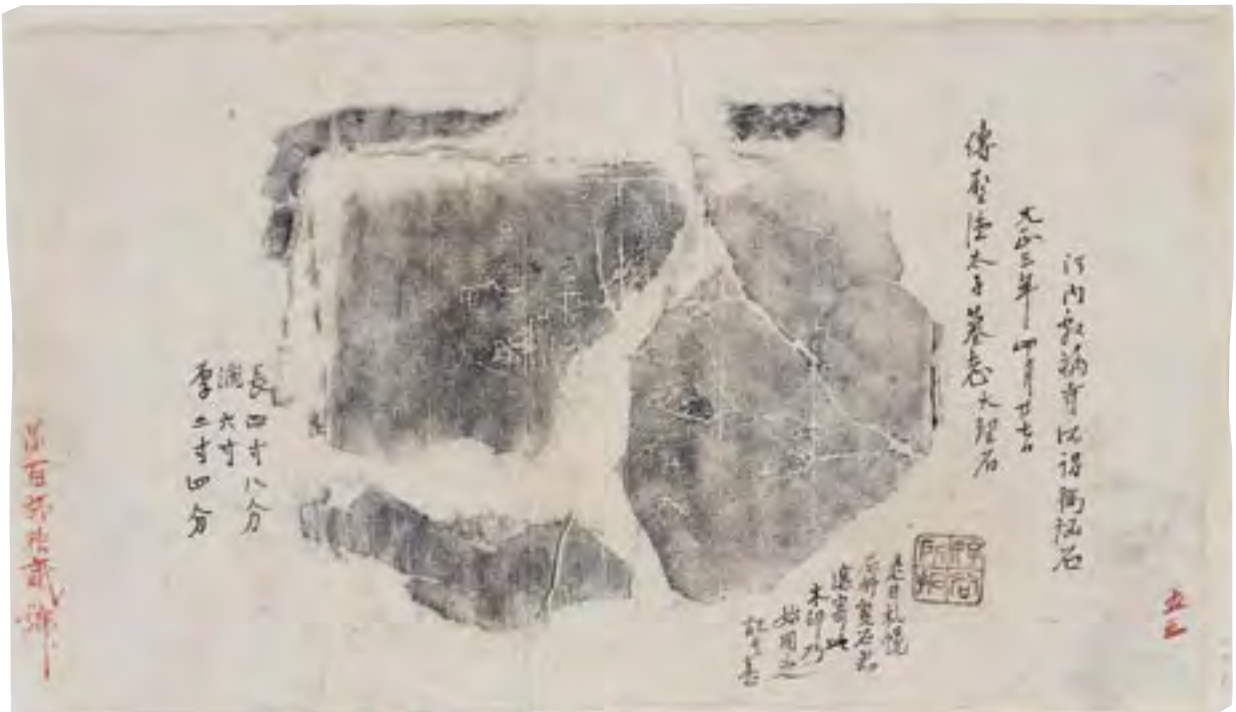


(右側面)



(左側面)





（正面）

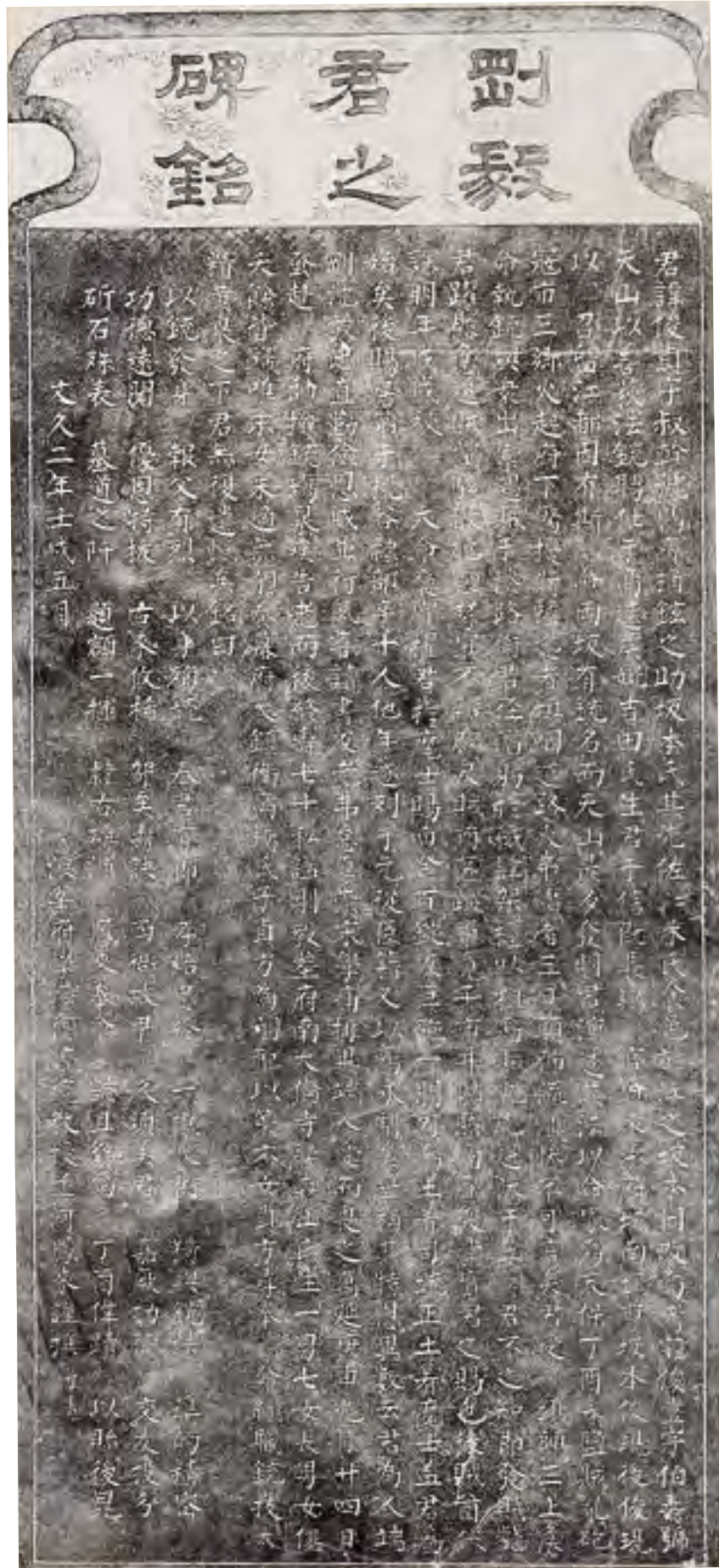


（背面）



（右側面）



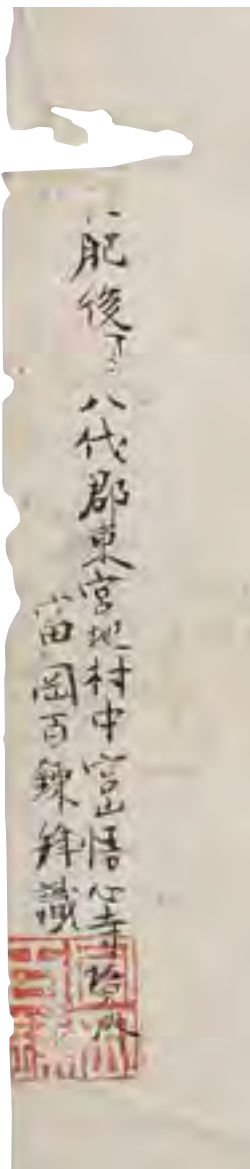


剛毅君之碑銘

君諱俊貞字叔幹號剛毅之助坂本氏其先佐木氏公也... 天山以善法鏡賜住子前延壽地吉田氏生君子信隆長... 以三羽江都因有斯... 冠市三羽火起府下為... 命鏡鏡與泉出... 君路於... 天分... 始矣後賜... 剛毅... 公赴... 天餘... 以鏡... 功德... 斫石... 文久二年壬戌五月



(添書部分)



(右側面)



(正面)



(左側面)





付 宝永五年家臣五十追悼碑



(火袋部)



(右部拡大)



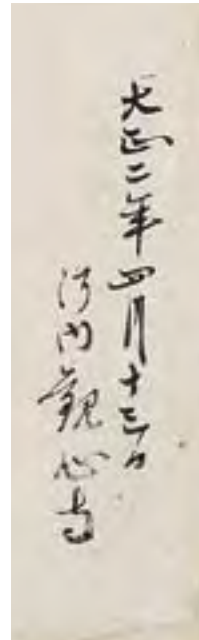
(左部拡大)







(光背銘部分)



(添書部分)









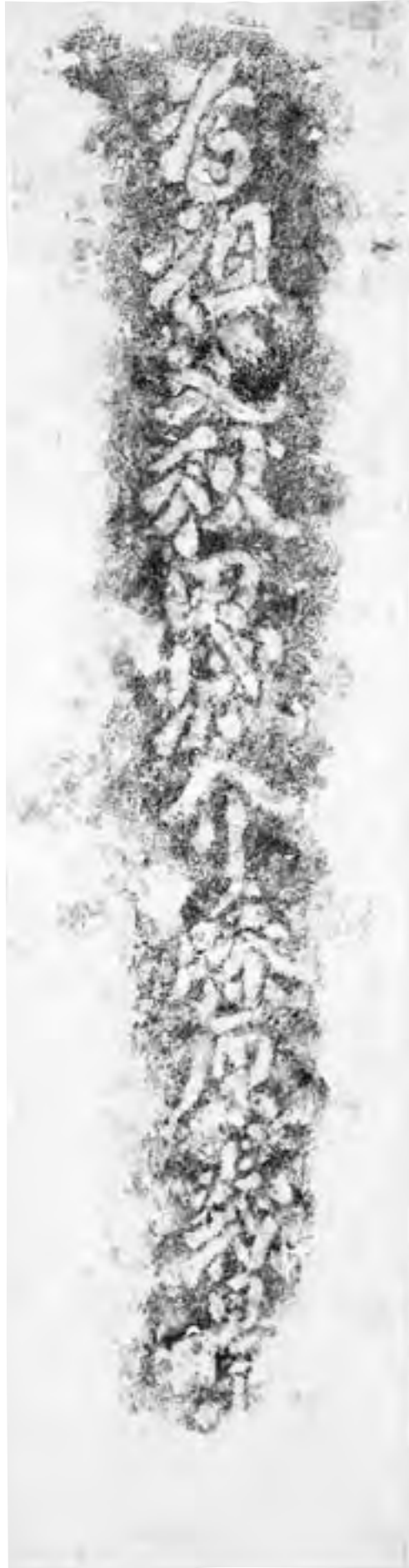




歌唄院宗讚日德信士

中村歌右衛門諱宗讚號芝翫其父歌七加賀人專任食祿
性嗜優戲遂來大坂以優戲為業頗得名譽常崇三寶信妙
法年六十憂無嗣子乃祈于吾閔祖生芝翫父母甚鐘愛之
既成童乃教以優戲穎敏卓悟操觚日進有青藍之譽年十四
不幸喪其父事母孝既而襲父業一時以為魁矣受藝術者幾
百人矣據附之為生產者亦甚衆矣文政癸未十月值父三十
三年之忌乃營冥福今茲新造壽藏碑予奉其幣略以識于碑
陰

維時文政七年甲申四月 本覺山現住日蓮









惟我皇故 王後首者是也 中祖 王智仁首男 那亦故
 首之子也 生於乎 娑陀 昌治天下 天白王之世 奉仕於乎
 羅宮 治天下 天皇之朝 至於 阿自 慈宮 治天下 天白王
 朝 天白王 昭見 知其 仁 有功 勳 初 昭 宮 天 白 王 品 焉 著
 三 須 王 於 阿 自 慈 宮 天 白 王 之 子 昭 見 於 乎 王 日 十 三 月 二 日 卒 於 宮 故
 代 永 年 十 二 月 朔 日 葬 於 岳 山 上 也 其 年 女 理 女 理 於 乎 能 乃 自
 同 墓 也 夫 也 乎 乎
 代 之 子 也 基 年 十 二 月 朔 日





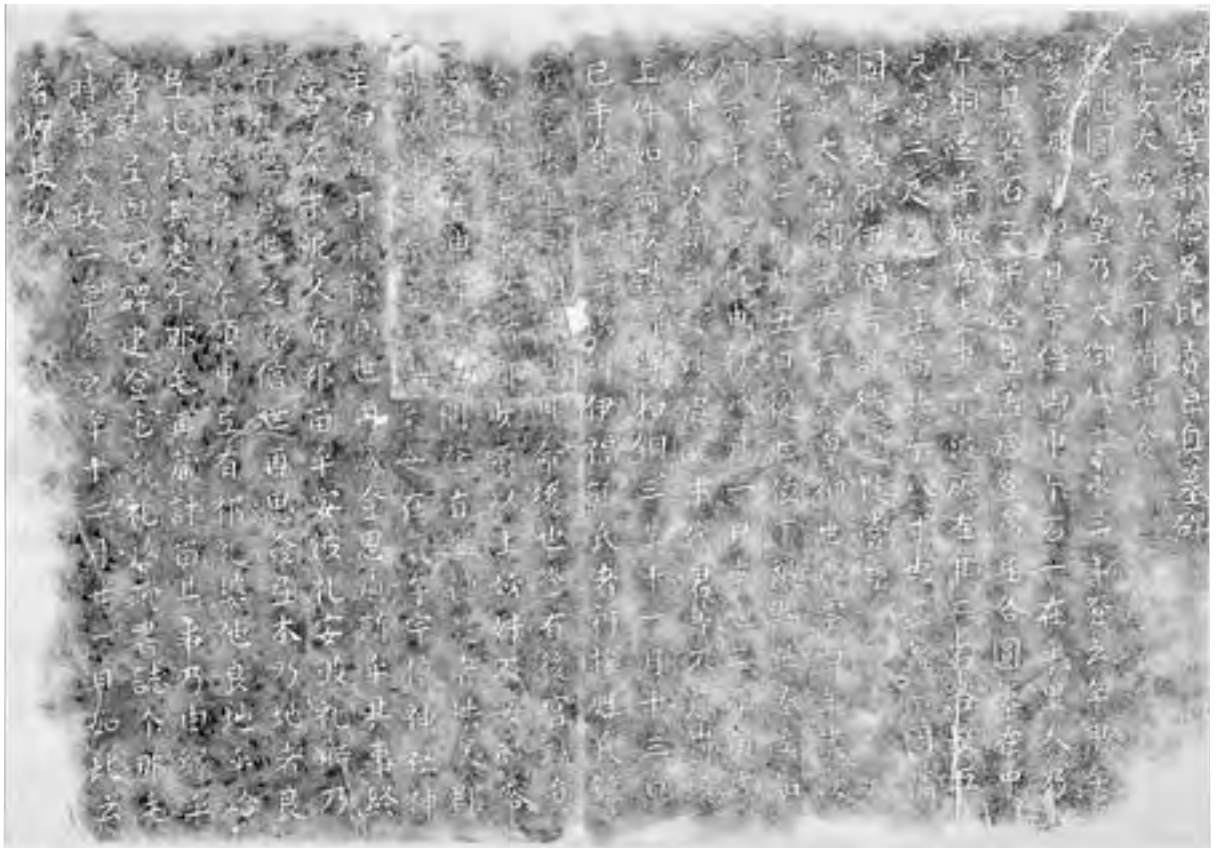
河内縣

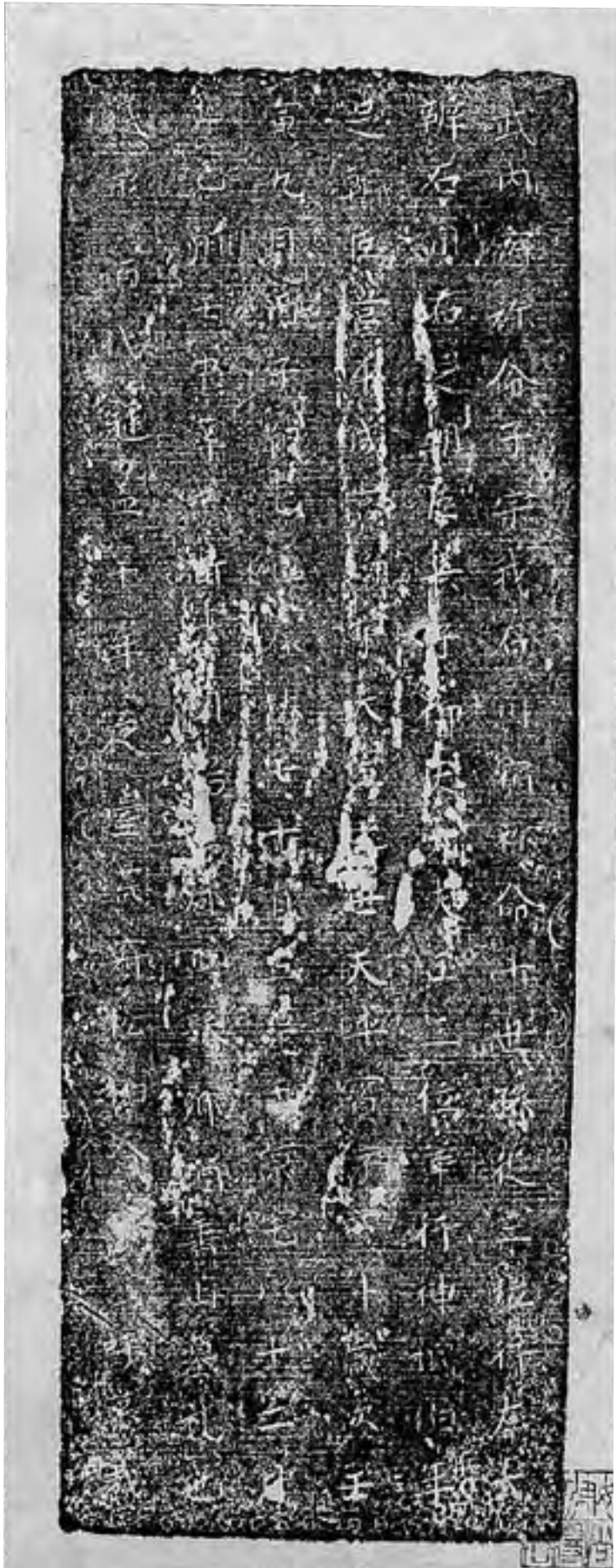
蘇百古誌

己酉年七月十五日

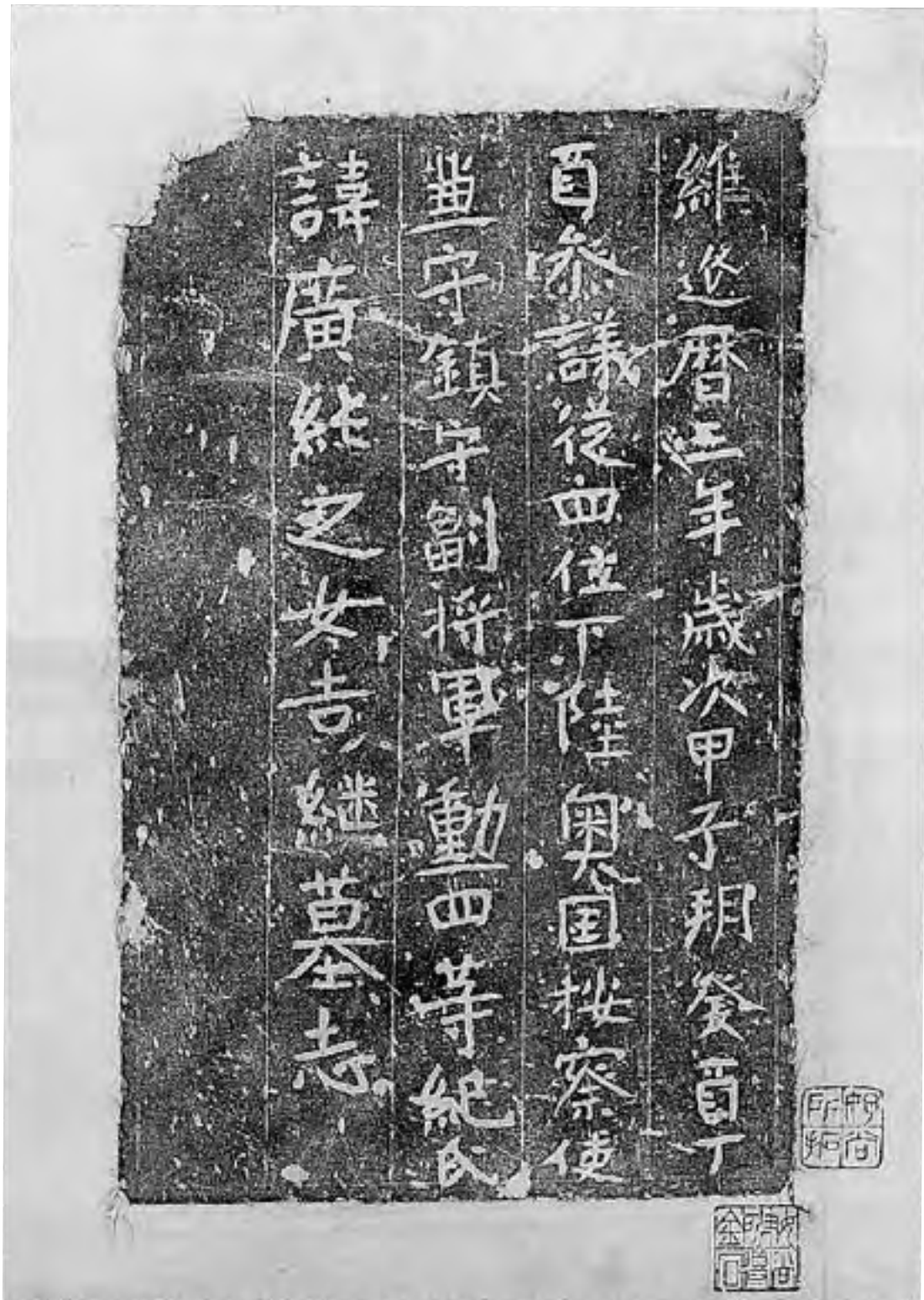


三











(正面)

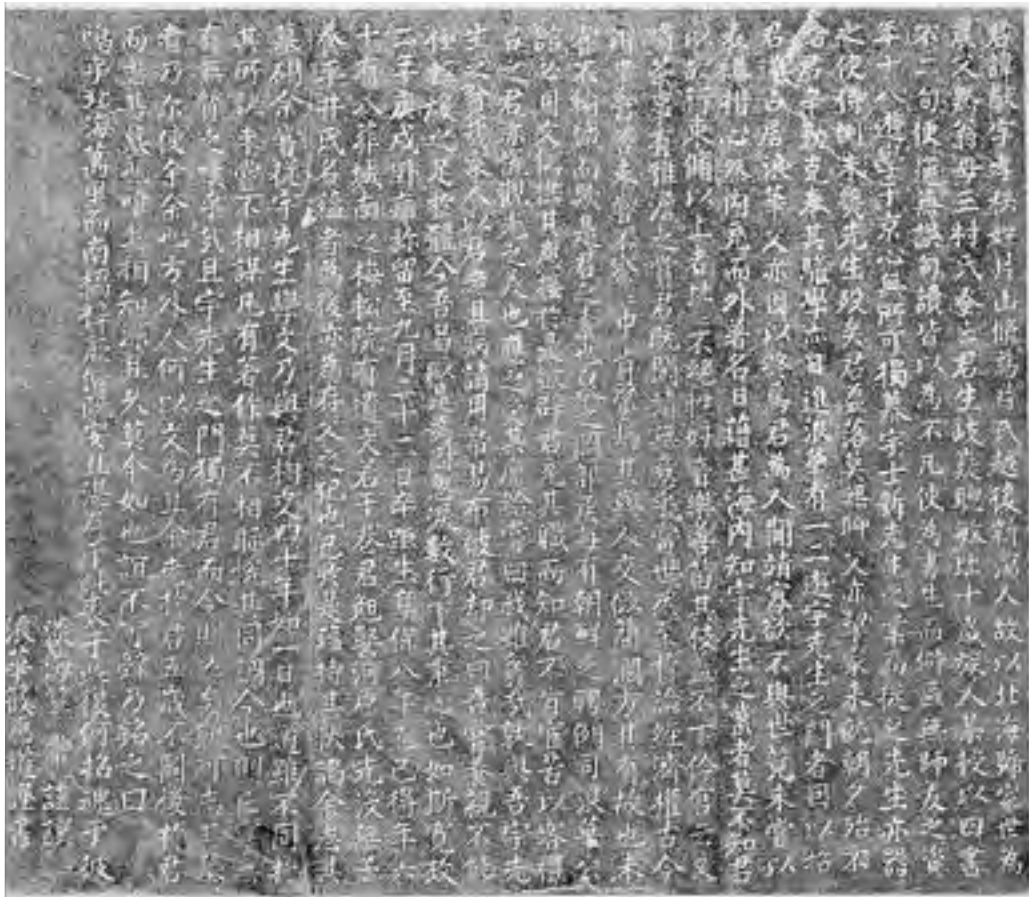


(背面)





(正面)



(左側面・背面・右側面)

(拓本上部)

兼葭翁墓表
 兼葭翁名孔恭字孟簡世木村氏浪連堀江人也浪連以有兼葭之古
 跡因堂彌兼葭於是其人呼翁曰兼葭翁翁實直而忠信博學而多通
 其志寬優而莫與世人不文者就中博窮山海所產之物以為其樂傷
 玩書畫殊妙於画山水尤著有他邦之客訪之則晤言語論終日不倦
 或問文學者或問武術者或問書畫者或問產物於故事於雜於
 俗各莫不答者日以繼夜求以繼日書翰往來無有暇日四方之旅客
 到浪連之地者無不雅俗必先訪兼葭堂如此者凡四五十餘年莫有疲
 倦之色者東師浪連自古名藝園者多出雖名湖海內外通達萬事者
 安在造讀時人傳大都各達一二事耳如翁之考古計今而通達萬事
 者古今最少矣翁向遊崎嶇試唐山之風俗趣後每隨黃蘗山大成社
 師遊若人有問唐山之風俗於禪師者即答云翁能知之不須言吾語
 云蓋雖禪師者唐山之產翁木邦而住于黃蘗然不及翁之不見不
 到而玩考陰察仔細於唐山之風俗是亦可一矣也於此世人以為唐
 山樣風流之祖余夙有忘年之交遂有故客居於僻邑長州常同床而
 卧同枕而語於此呼得能知翁又從通木邦之學其他地理街區
 名山奇勝盡為圖以藏之又能記憶之所不到其地者亦如到而不見
 者亦如見東武家藏有井負流者面熟甚奇雖然世人不知者多矣翁
 獨介其隣家人而求圖實流聞之大喜備馬家世圖以贈云其子通好
 畢以此一葉可知也蓋於翁若不知之者為多端迂廢以莫之若知也

文法四卷唐詩發祥四卷明詩六卷文法七卷州錄錄三卷文法十卷

其地無脫初者數種嘉元元年八月十三日端履子年六十四矣於

兼城北首村三昧要道在氏無子銘曰
良劍云藏 著書云成 劍則入道 書則先坐
疑我錯節 迎刃以解 嗚呼善乎 其之劍矣

嘉元元年八月申改月

門人泐筆和由孝等書

者為子寧效容以世之有一妻有一妻有女子一人和睦善事之可謂
不失雍熙之軌也翁祖為遂藤隱皮守基汝基汝戰死河州道明寺子
吉右衛門基房學醫術誦玄哲玄整遊于京師而仕途衛殿下為醫官
其子玄萬紹其乘為玄萬之弟五助芳雅芳雅子七郎兵衛芳拒芳拒
子父助芳昌芳昌子吉右衛門重周重周繼良華木村重直之家翁者
乃重周子也元文元年丙辰十一月二十八日生享和二年壬戌正月
二十五日終享年六十有七銘曰

其後黃茂不知即為荻知即為茂彼

此雄波与伊勢邦言三州未是同卷

享和二年歲次壬戌夏四月十八日藥立小隱靈齋曾君撰撰并書



付契沖碑

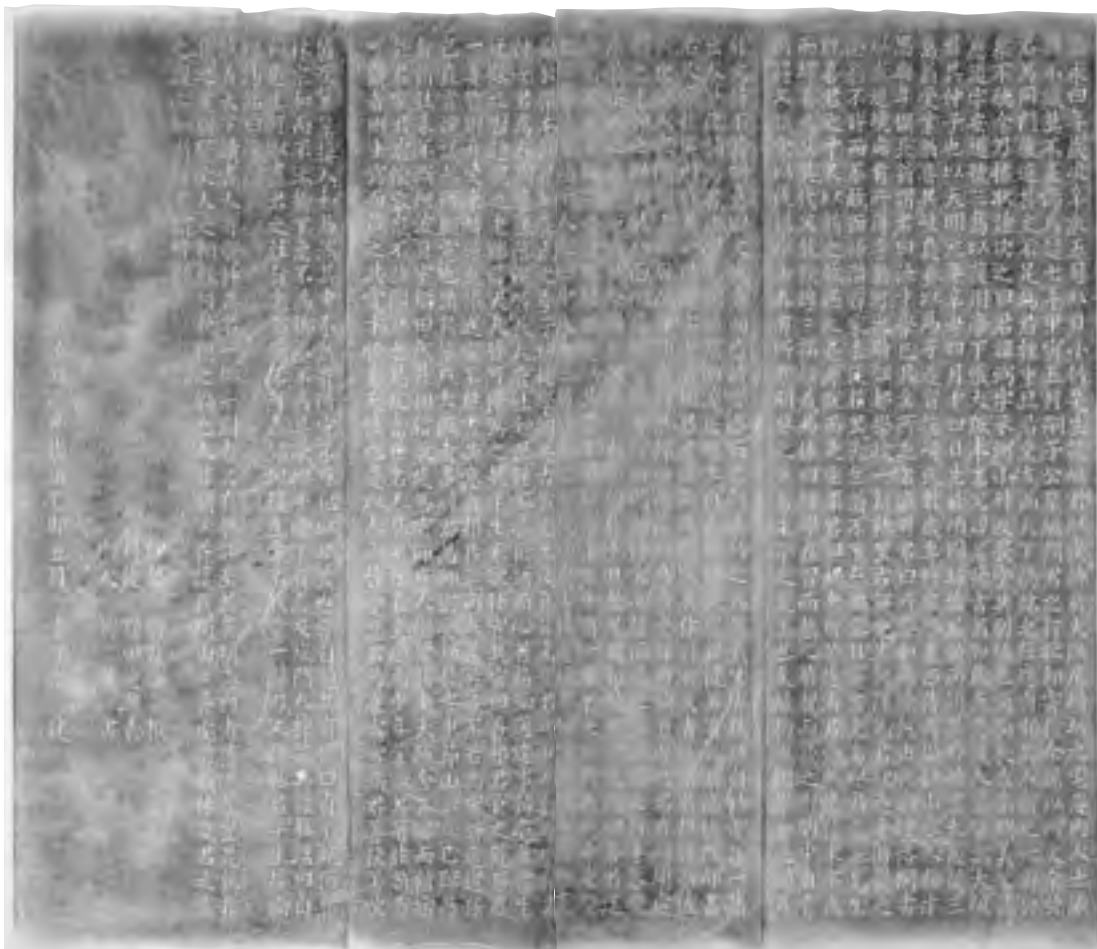




(正面)



(左側面・背面・右側面)



開山和尚茶毘處

師諱道光號鐵眼以寬永庚午年正月朔日
誕於肥之後州益城郡佐伯氏初出家于本
郡教寺後嗣法木菴瑯和尚募刻藏板流布
于世嘗開山八處曰瑞龍曰寶泉曰金禪曰
海藏曰羅漢曰小松曰延命曰三寶也天和
二壬戌年三月二十二日巳時示滅於本寺
乃茶毘于此遂奉遺骨樹塔于寶藏之西隅

(左側面・背面・右側面)

寶曆八年戊寅六月十七日鄉校教授中井君終焉其二子乃執其行狀請余記其墓嗚呼
 命也與君交善無慮四十年而中則索居十數年今而乃得誌其墓嗚呼其善哉哉不可不
 也君諱誠之字無庸號忠誠自號覺春樓之龍野人祖考諱昌倫字泰保叔莊好生考諱昌
 直字考瑞叔莊米貞好生君以善習任平飯田守臨坂東陽兵衛祿二百五十石疾移封龍
 野亦從高野要成時以耿諫不守家居乃米貞考出仕娶那坂氏生五男長名棟之字養元
 叔莊號貞次名信之字伯元次名廣之稱權敬見俱仕于本藩六則君也李名文之字孝權
 辨常奉私誼及爾好生君諱令泰貞君辭標乃樞家累授大坂新街大行及致家道衰廢君
 東西結摺不辭勤勞善與李禮去贊均前非三宅先生俱愛君君乃翁居幼愛以學朋友稱
 多其妻孀勤資給以周之為人豪宕不羈蔑視小節自視矣先生溫厚謹教口無怨言體
 無懈倦氣質變化之說指借恭負君之移赤槐也君亦奉此瓜柱為幹家事播揚之間其
 書屢運恭道上手不釋卷無幾丁恭貞君憂家致踰禮乃與李禮議終喪制除遂如太
 坂復事先生於高坂坊講會學業倍隆君每念大坂之地有故鄉校以敬道于第曾與二
 三友相議奮然自以為功便入關寄諸大嶋三輪二氏二氏乃為之先容於是先生在左
 崎坊講會君乃敬就以為肄業之處享祿十一年再入關是歲四月遷大坂宅于本街六
 月君君聽之乃區講舍之地除其戶役以聘之道師講堂置于舍首請先生開講席生使
 滋達達方之人亦傳道來學者眾濟一成禮讓之風若或君功也李禮廢疾君標扶杖以
 甘告百頭無火而非使知其若乎龍莊有田邊和介者色感惻心事發覺君奉敬倍虔命
 如平安如南都以楡發之和介乃伏誅落髮事君力居多哀說之端以藥食君於薄瘠
 知無不言疾亦以心勞為守國人畏敬焉似或壽九十一以天年終初此大在播以子姓
 夫亡之眾也當忽不樂君乃謝生徒歸省色養每招族人故舊日三設宴以盡其歡

姻孤女五人皆收養于資次以嫁之而其奉身泊如也校舍經父日就傾頹於是土木一新
 室有增舊觀人服其心計獨運處會能理財乎年六十有六遺杖棄校事以屬萬年先生嗣
 子正誼辭奇能萬言無一言及妻子昔日鄉校之營也標以不傳子為約至今廢其言不
 人以為美談君以踐譽為尚是以雖有請試文章及和歌和夫不以為意李禮中君亦敬
 配植村氏生二男長稱善次持德俱歿文行鄉閭以欣羨莫大坂華領寺藏碑銘曰
 維孝百行之基母氏九十撫之均嬰兒子也莊白亦如小兒婚之愛敬之兩耳
 內外普施君見其人非忘其誰

五井純植撰 三宅正誼書

(正面・背面)



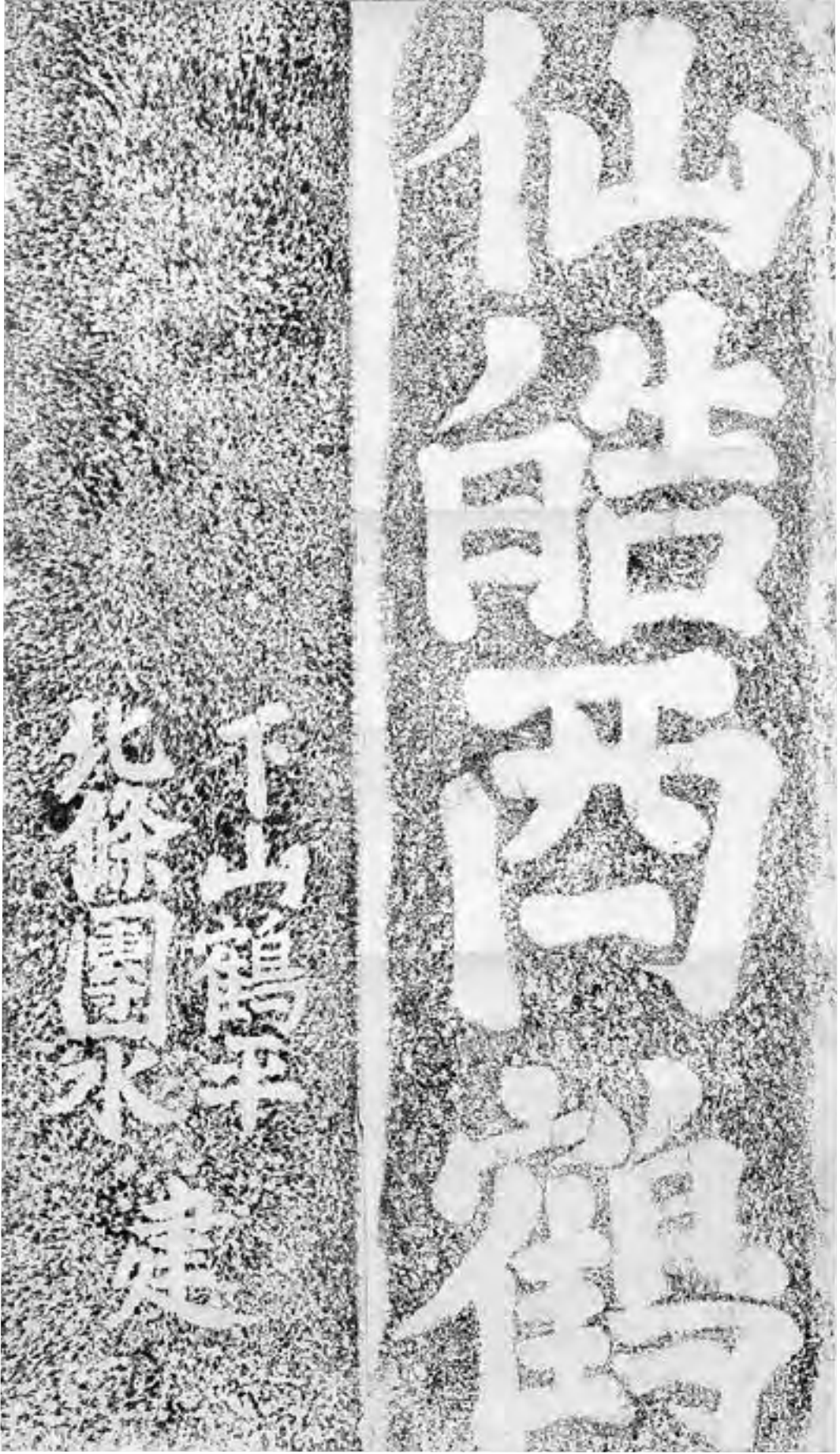
芭蕉翁墓

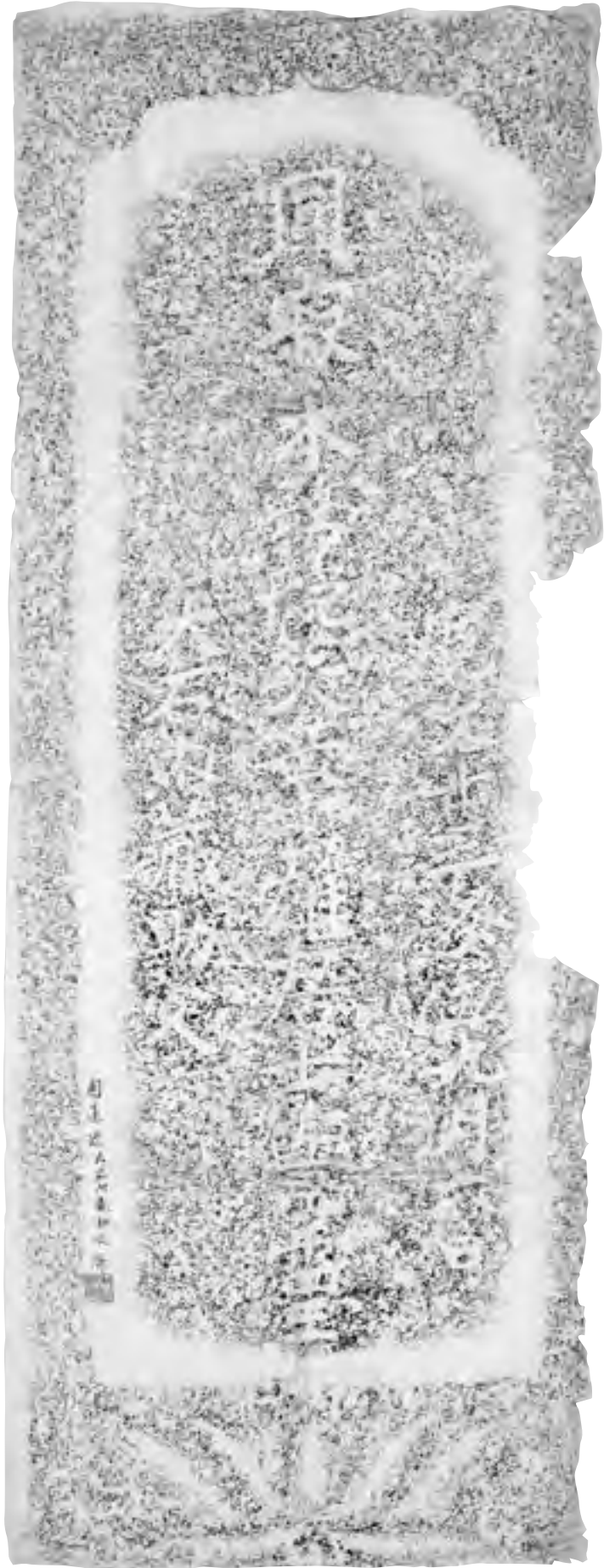
松尾不遠於尾京在東頭芭蕉翁墓于伊賀守于伊勢守于雅淡其類其類于野城公
 之碑其於不繁余嘗親世間九流百象稱師也弟者生有懷其德者最及來其也
 報其恩者其少何于益學其道而未得則不達千里不侍專左右而仰學其德是道所
 求于彼也既得之則棄之如弁髮以取稱師况乎報其恩耶夫稱師者如敬之一體也
 皆之者以道而得之師者不一宜乎稱師此道往而致仕遂讓師而到于兩都及
 難政所到之屢門人弟子皆宜禮致衣食以給其性酒海四壁而立不富無樂然
 之凡其動靜結然心於非可謂此道之盛云清華之巨擘也嘗謂不學曰請師者初欲
 之一體也古者所謂如敬無師師己之性情而吟咏焉而天下之口非一也與師相
 安以故於樹前自美稱和敬於今古唐詩於盛曉然唯領結遂道如何耳願得此道
 解其惑者德高富然而化矣益樹之西東當此道者志莫不為之請壹是皆稱其流亞
 就中野城子侯也繼其緒以借此道于四方當稱之七曰遠辰遠來西肥能更其門人
 而是湯于長崎手自栽碑記德當十七曰忘之屋來筑其其弟子相謀而建碑于其
 祠公茲來其間蘭秀防長以東道雖被諸州門生而彫刻石碑建于大玉寺屋某碑其
 德前之德故在諸州者一在江之夜仲寺一在東都深川長慶寺其在洛之覺林寺者
 翁之門人支秀所建安今野城子所建者甚難波和之所築地也是彼傳師德于久遠
 而不朽謝師恩乎當已以不誼也一日野城子和余門來告曰我既老矣遠翁之五七
 四意不可知茲有此舉今年實翁之謝世四十一一年云且乞碑文余曰吾子之切其
 謝我余非手敢不從爾喜其以謝師恩之志為誌云
 寶曆十一年四月廿五日秋日前曾介著醫官八十老翁牛山香月啓益誌











付 大石良雄・主税墓碑

大石良雄
 忠誠院刃空淨劔居士
 行年四十五歲

大石主税
 超倫院刃上樹劔信士
 行年十六歲

（正面）



（右側面）



(正面)



(右側面)

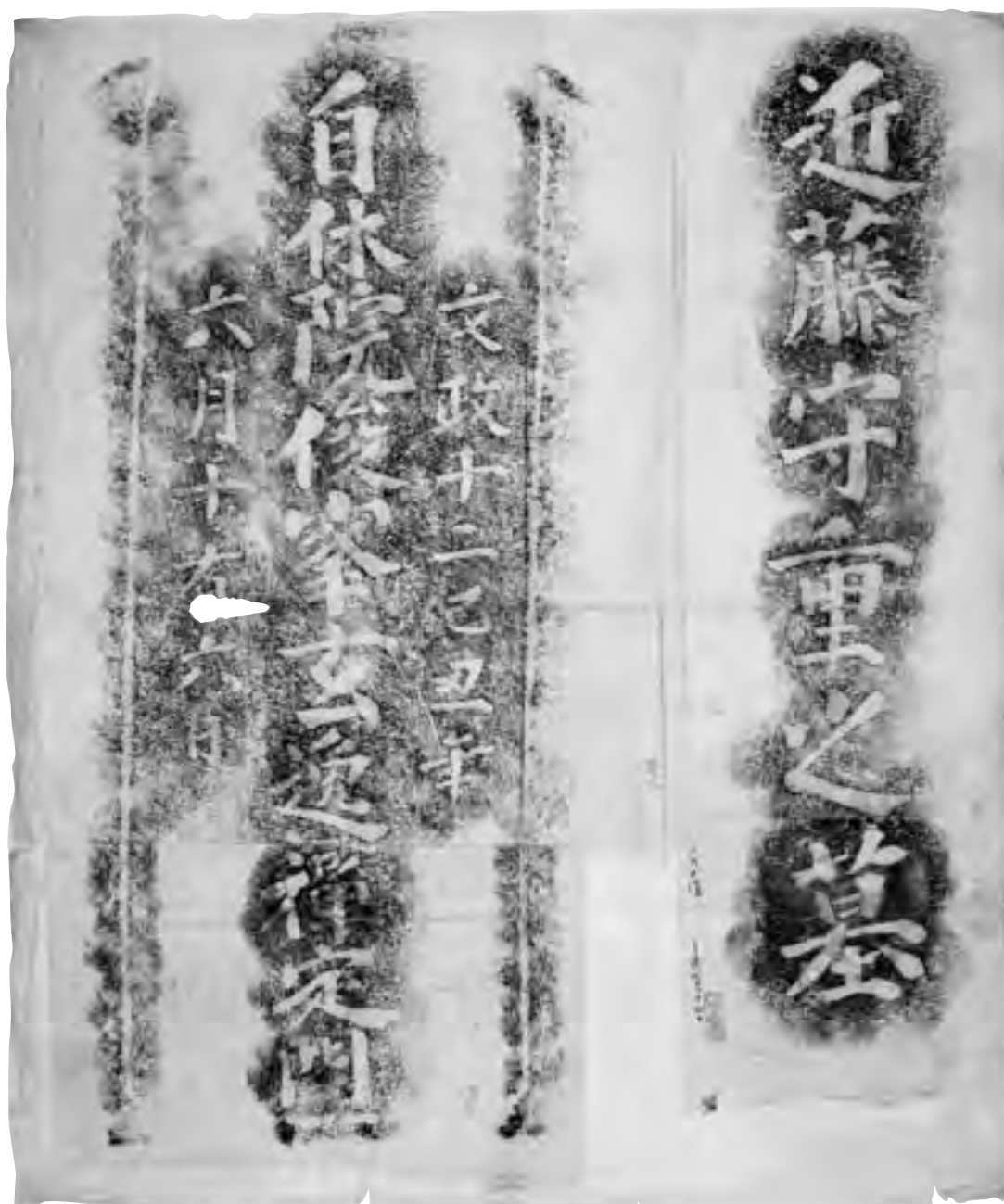


(左側面)





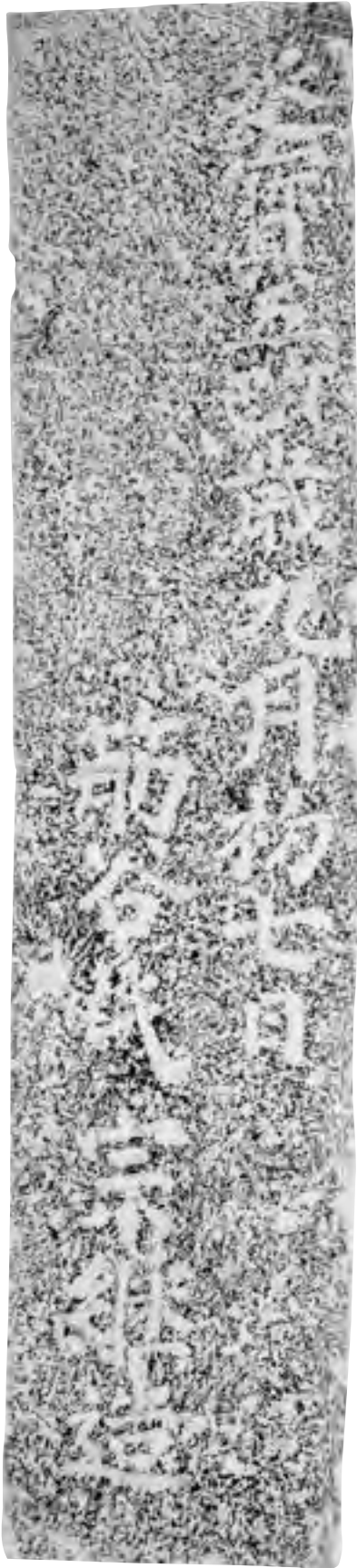
(正面・背面)



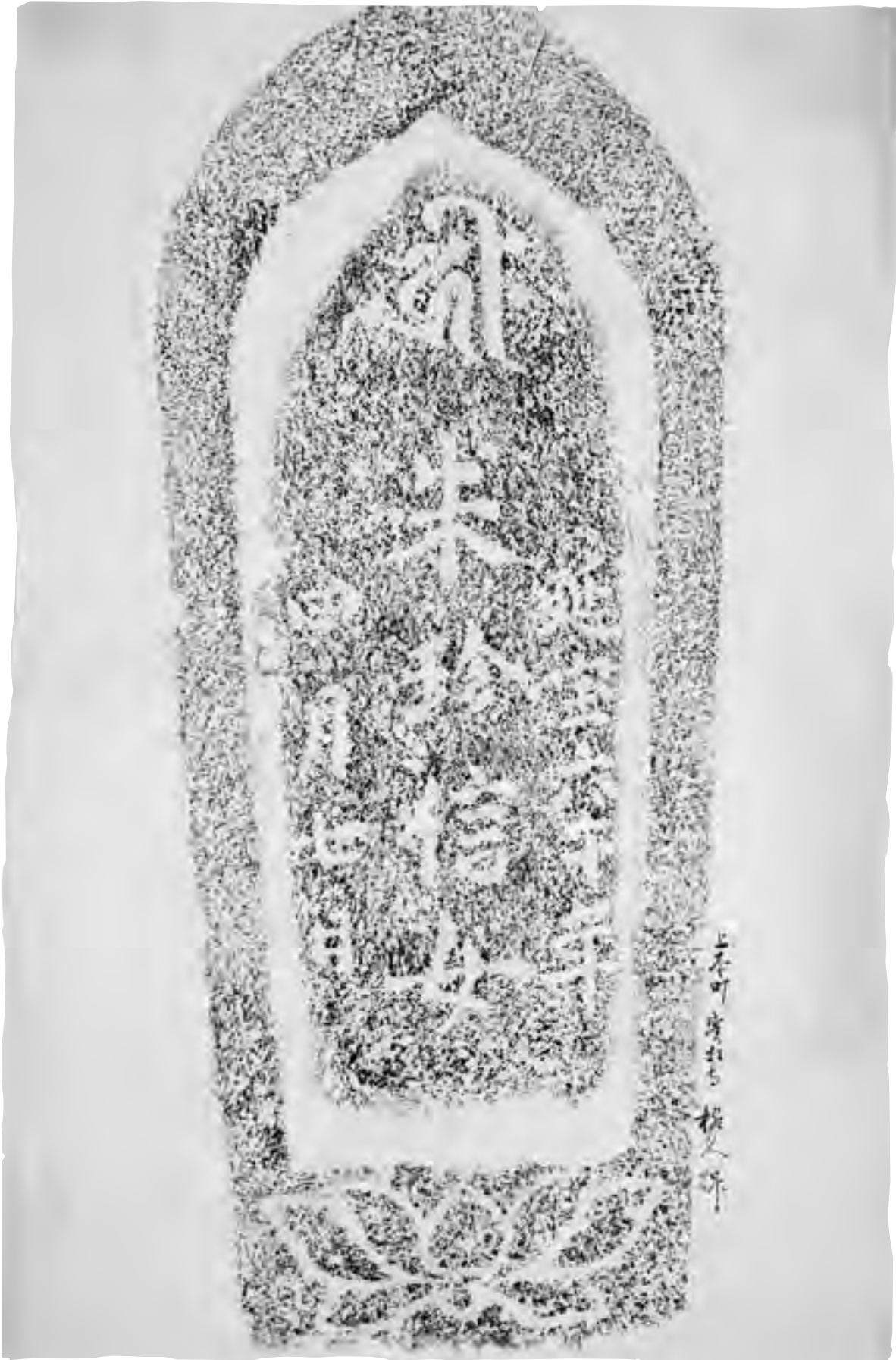
(椀屋墓碑 正面)



(椀屋墓碑 左側面)



(松山墓碑)



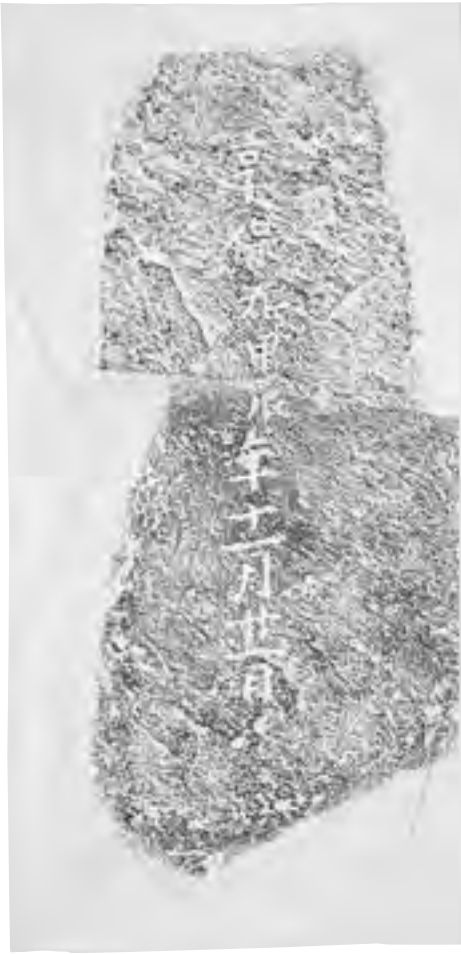
(広濟寺墓碑)



(法妙寺墓碑 正面)

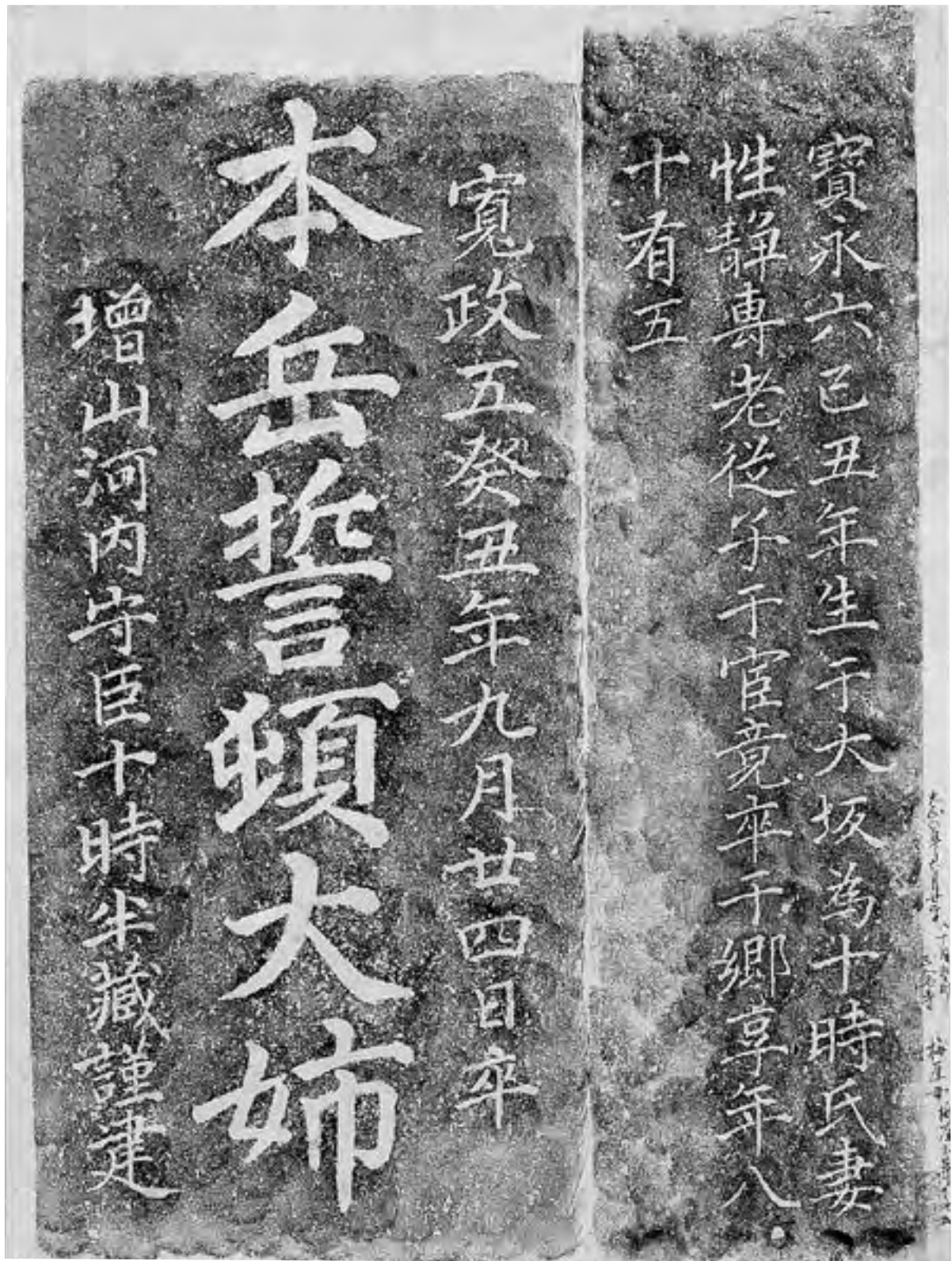


(法妙寺墓碑 背面)



(法妙寺墓碑 台石)





寶永六己丑年生于大坂為十時氏妻
性靜專老後予于官竟卒于郷享年八
十有五

寬政五癸丑年九月廿四日卒

本岳哲言頓大姉

增山河内守臣十時半藏謹建

(芳春墓碑 正面)



(芳春夫人墓碑 正面)



(芳春夫人墓碑 背面)





(宗仲夫妻墓碑 左側面)



(宗仲夫妻墓碑 正面)

(毅齋墓碑 正面)



富永毅齋居士之墓

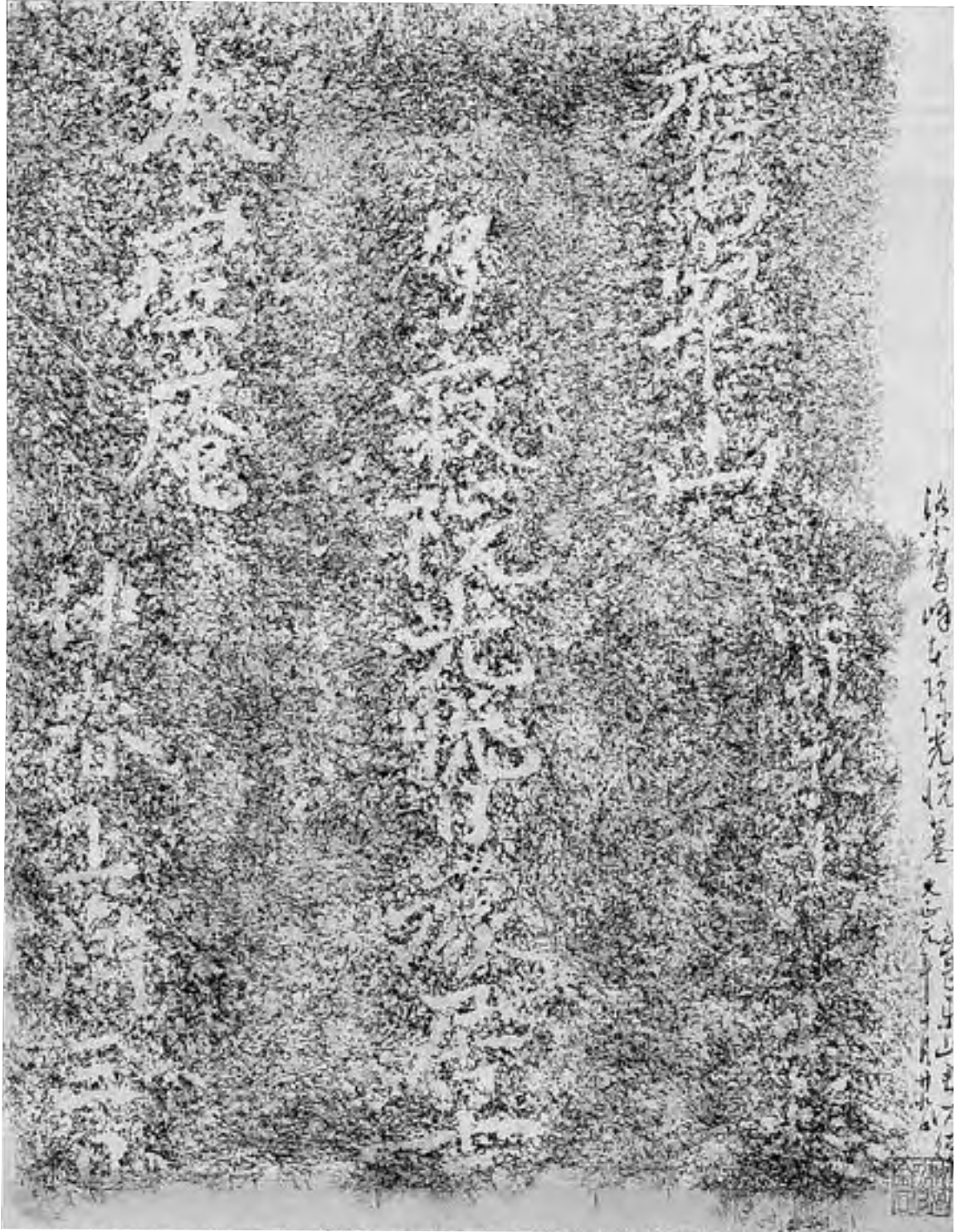
(毅齋墓碑 背面)

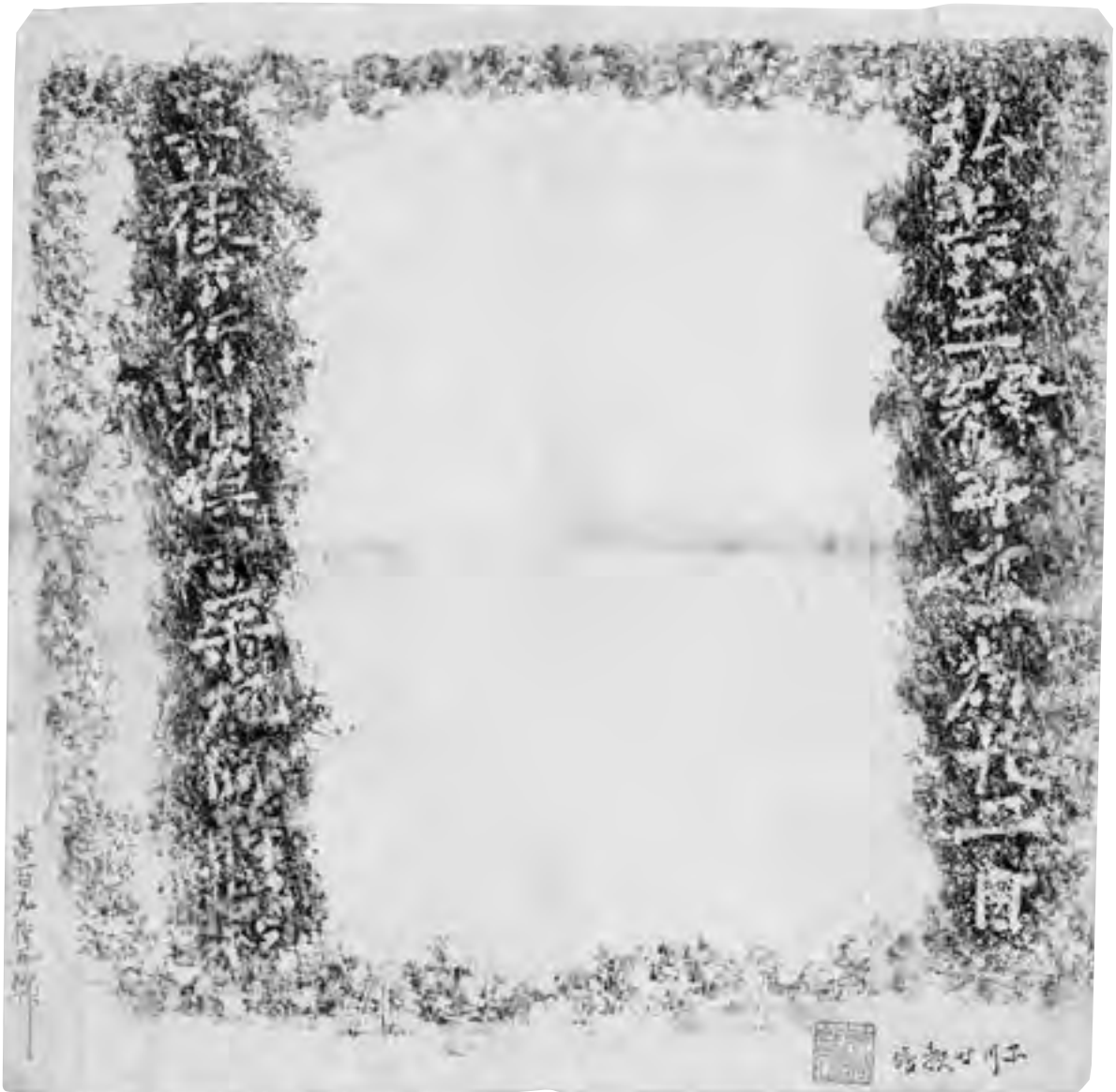


居士姓富永諱信美稱吉左衛門考諱
德通號芳春妣金崎氏娶真多氏生三
男一女寶永五年戊子十月廿七日生
寶曆六年丙子正月十五日終壽四十
九葬于大坂下寺町西照寺

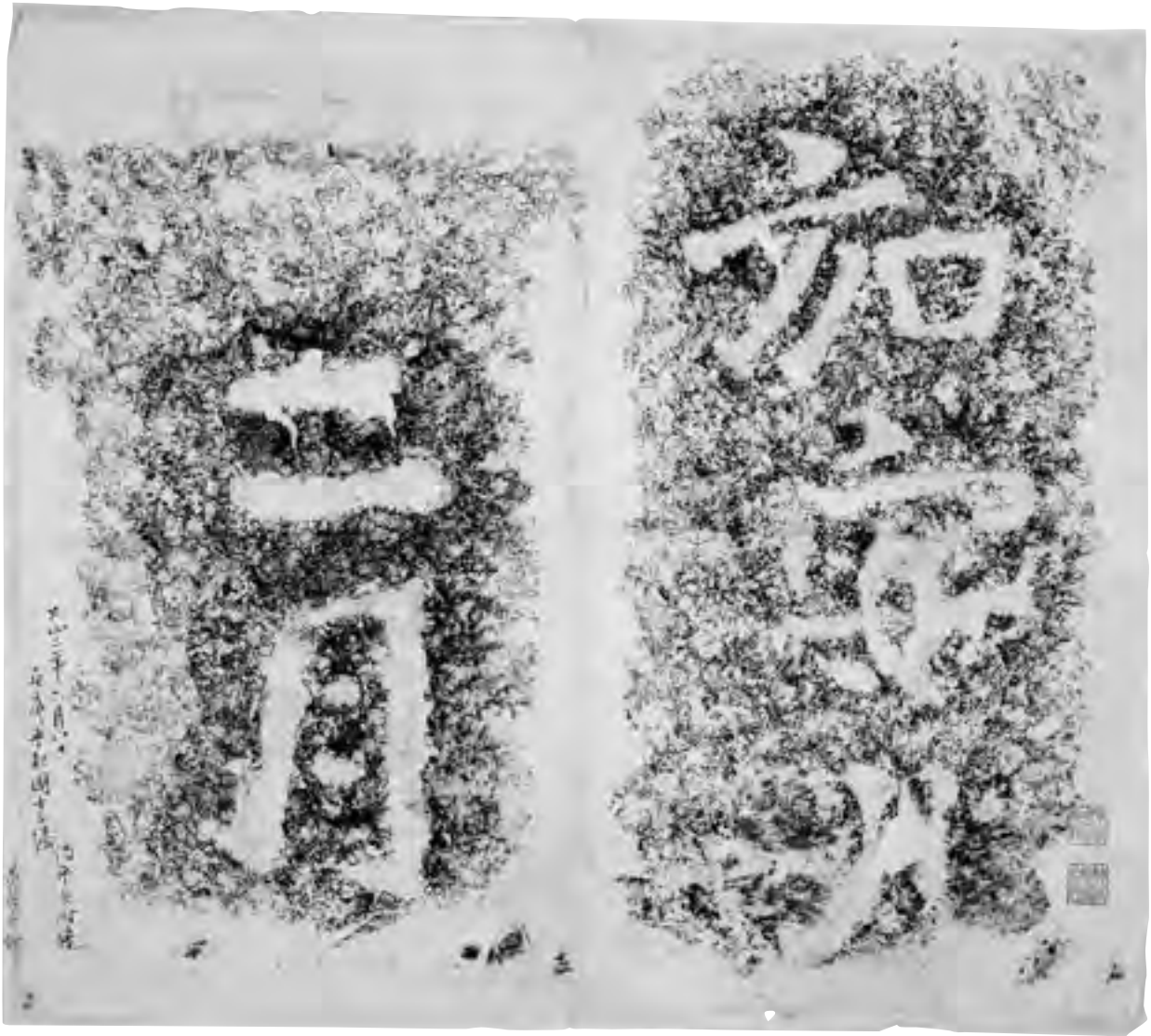


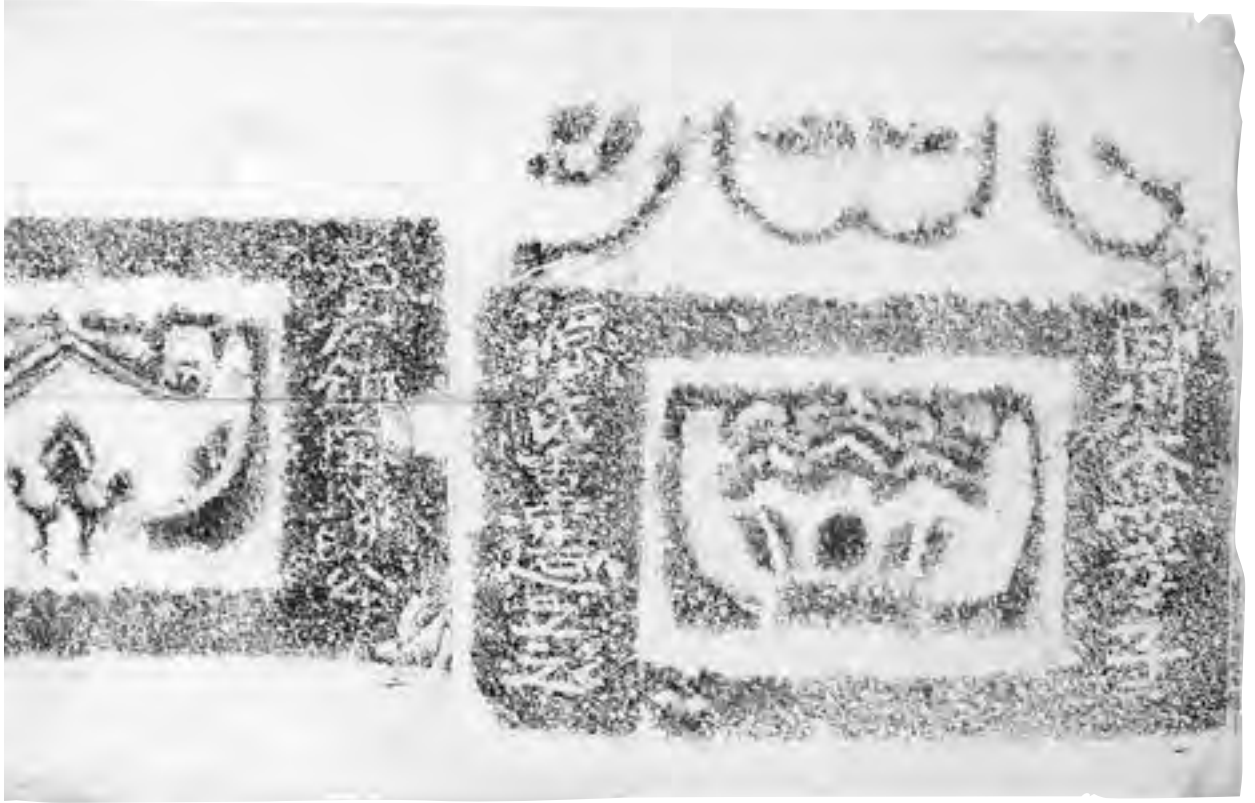


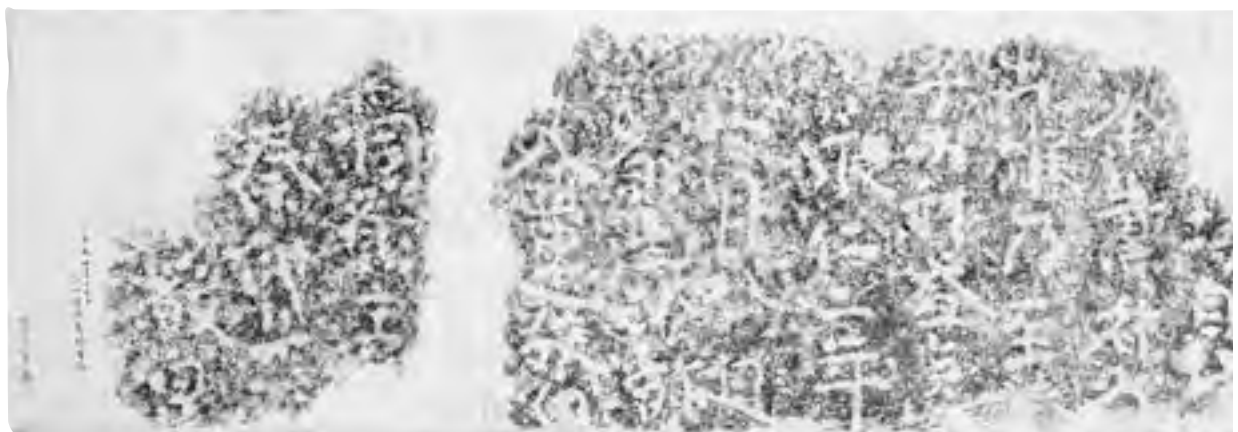
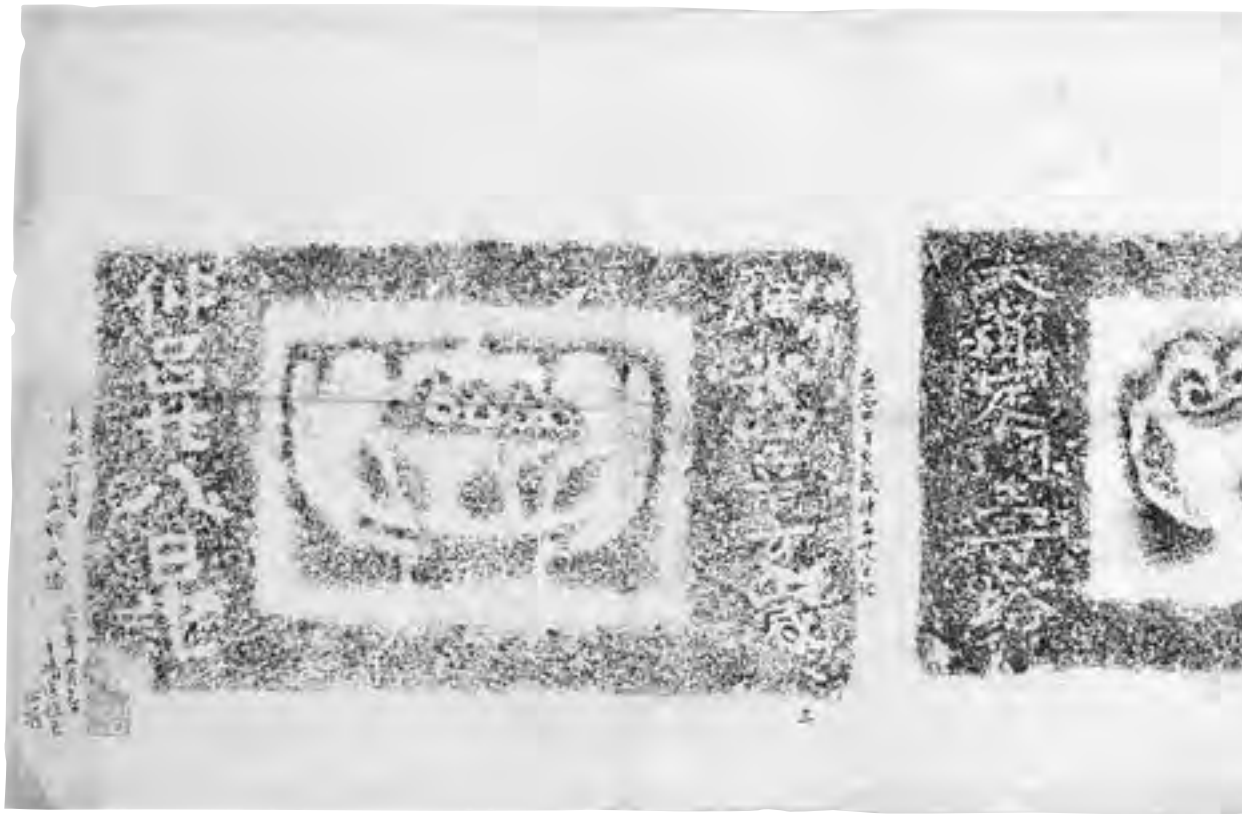


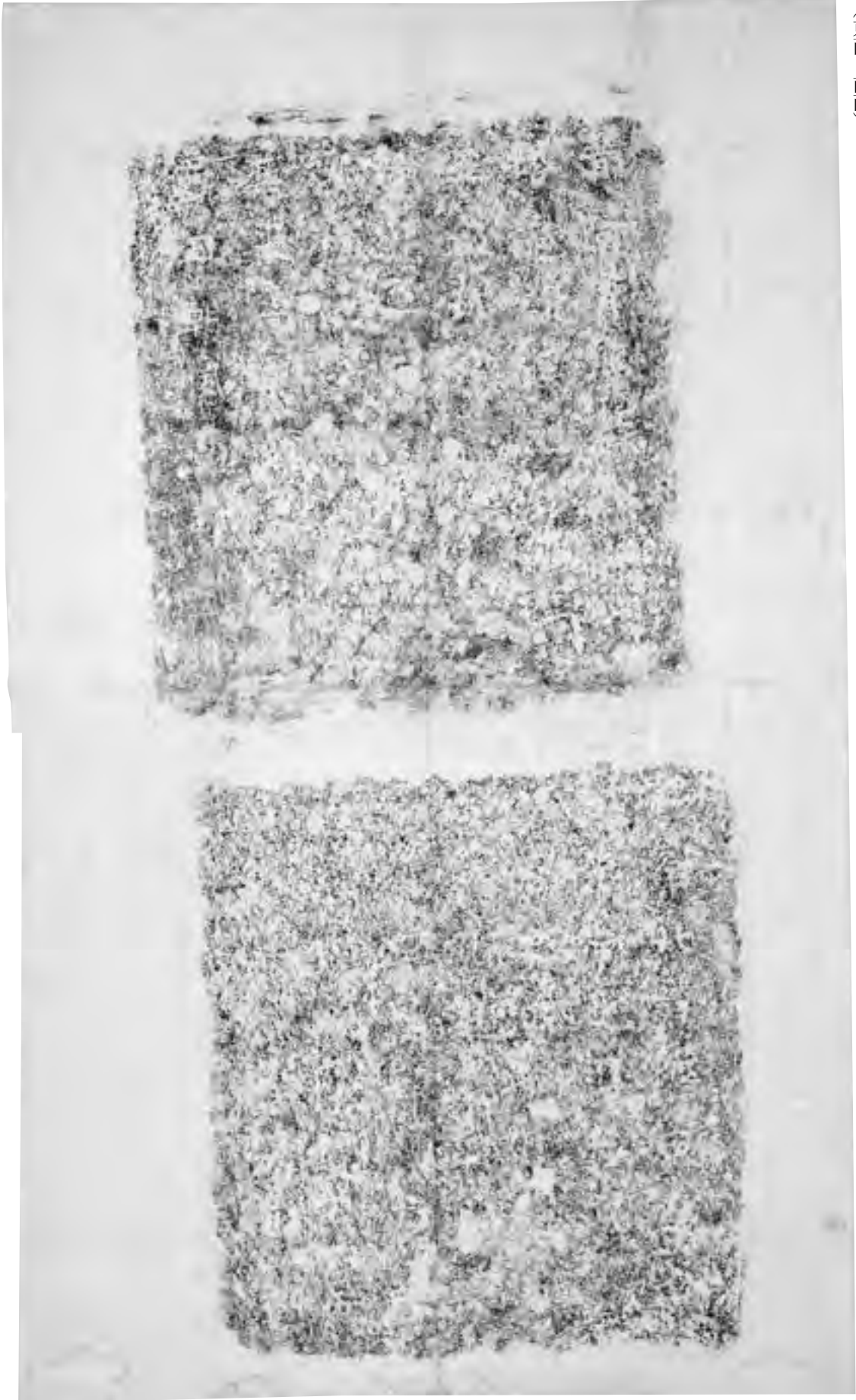




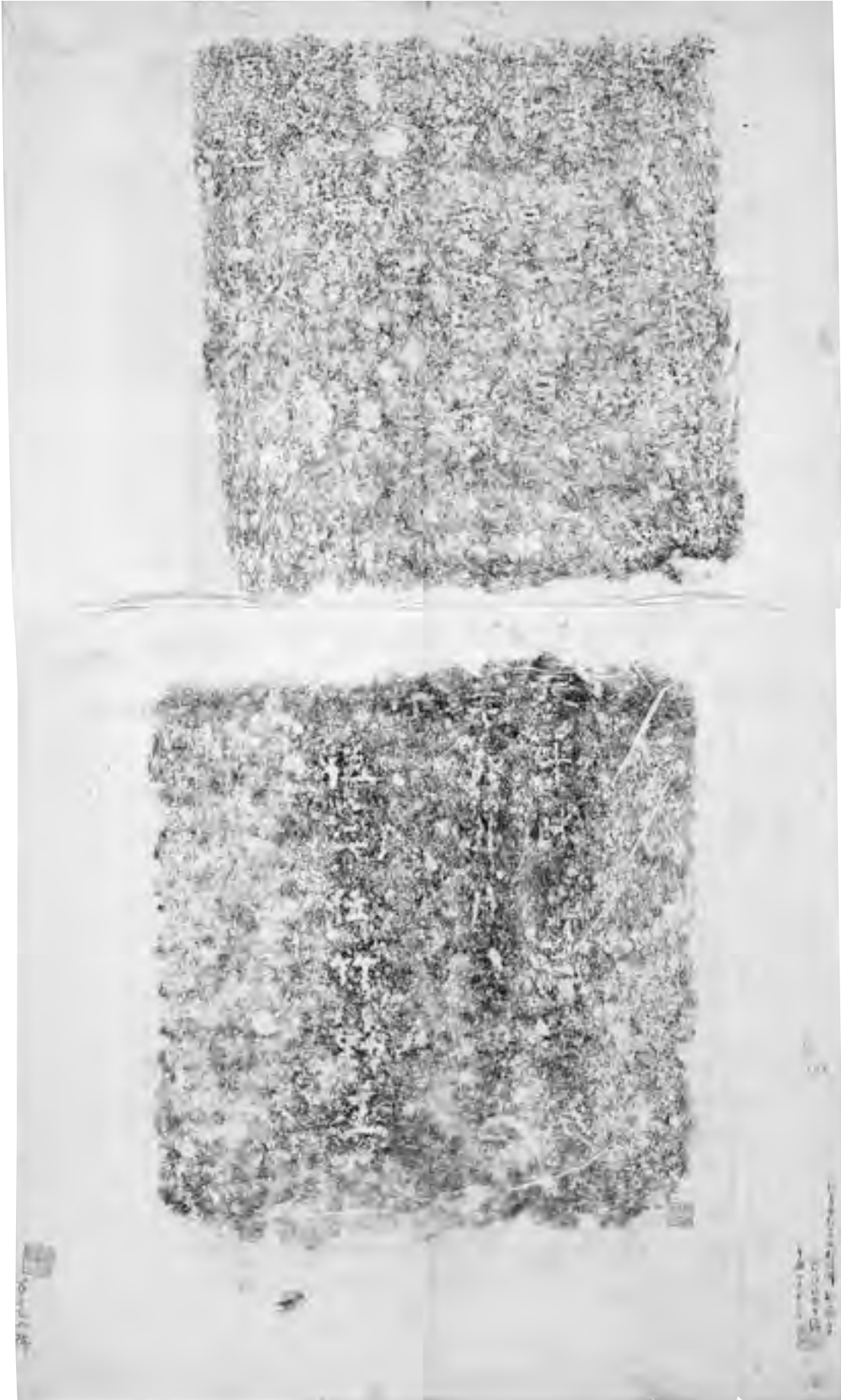








(西面・北面)



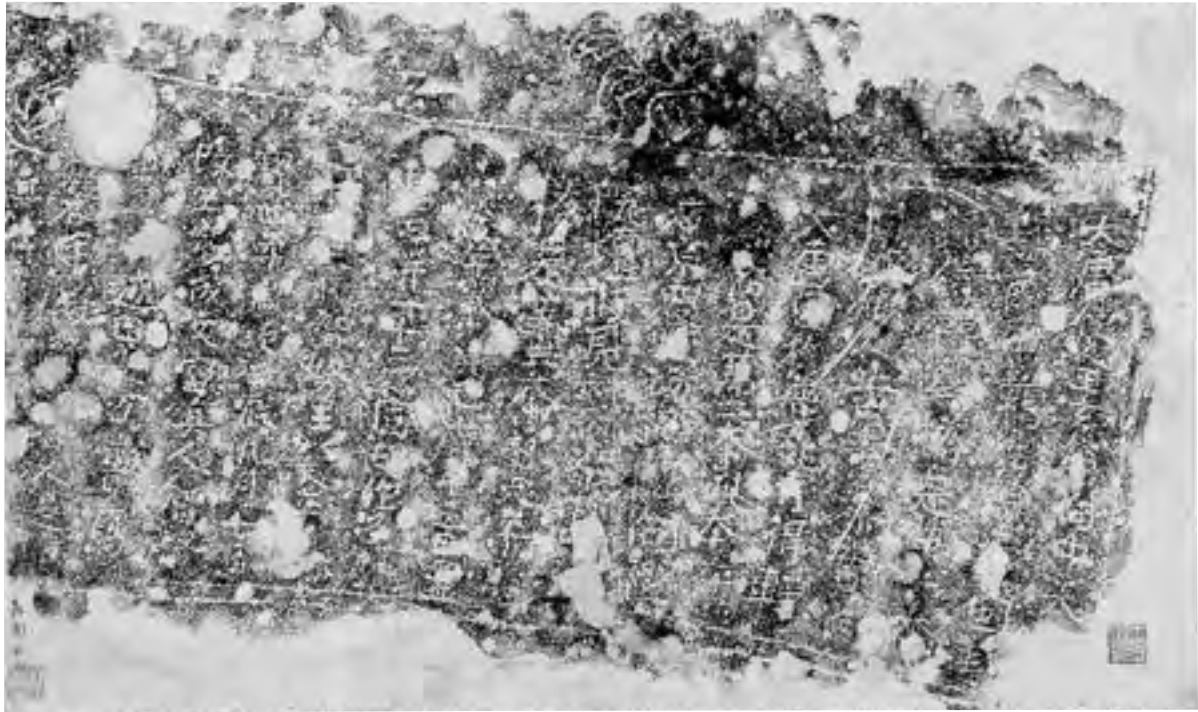
(上面)



(正面)



(正面)



(左側面)

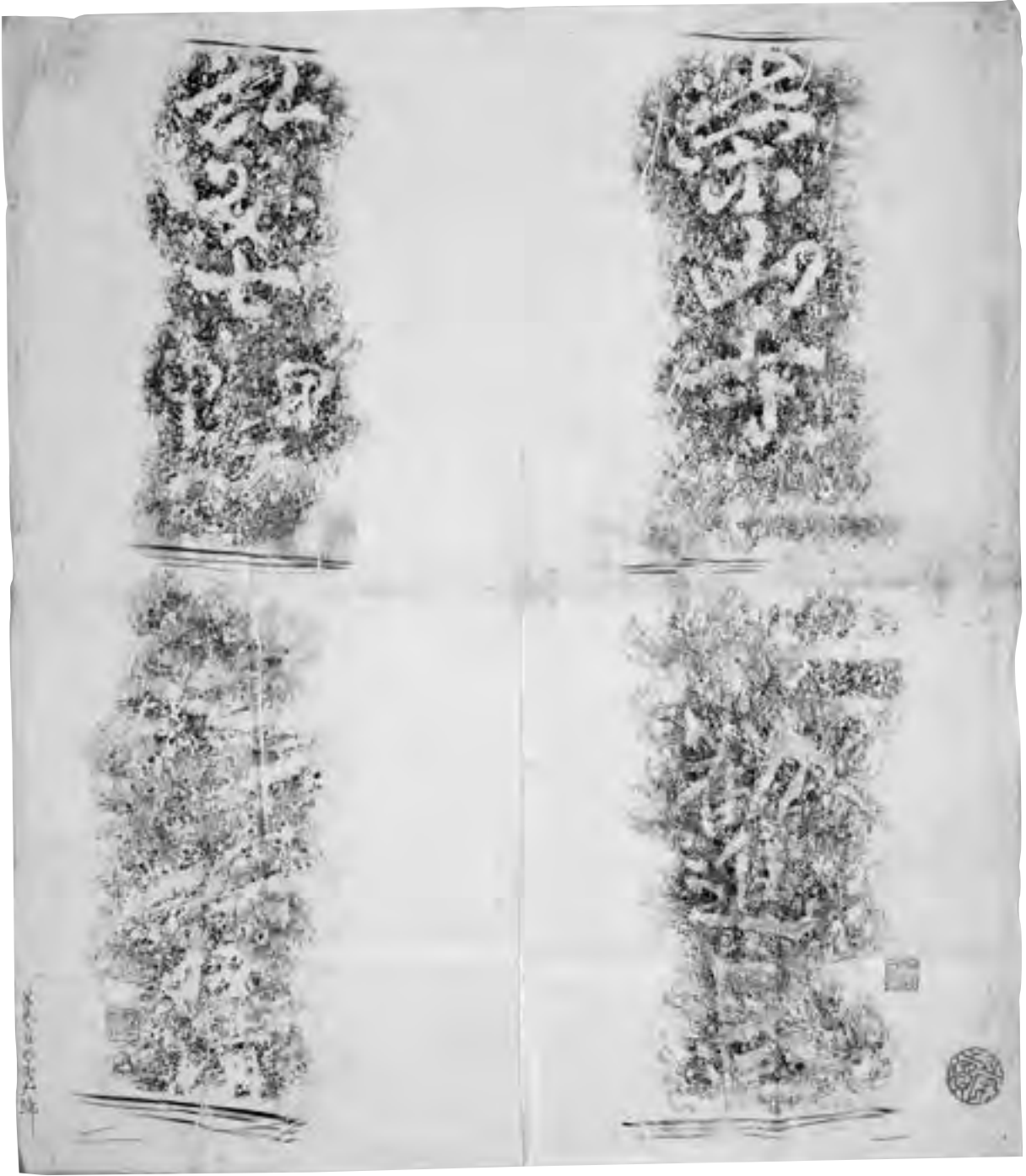


(右側面・背面)

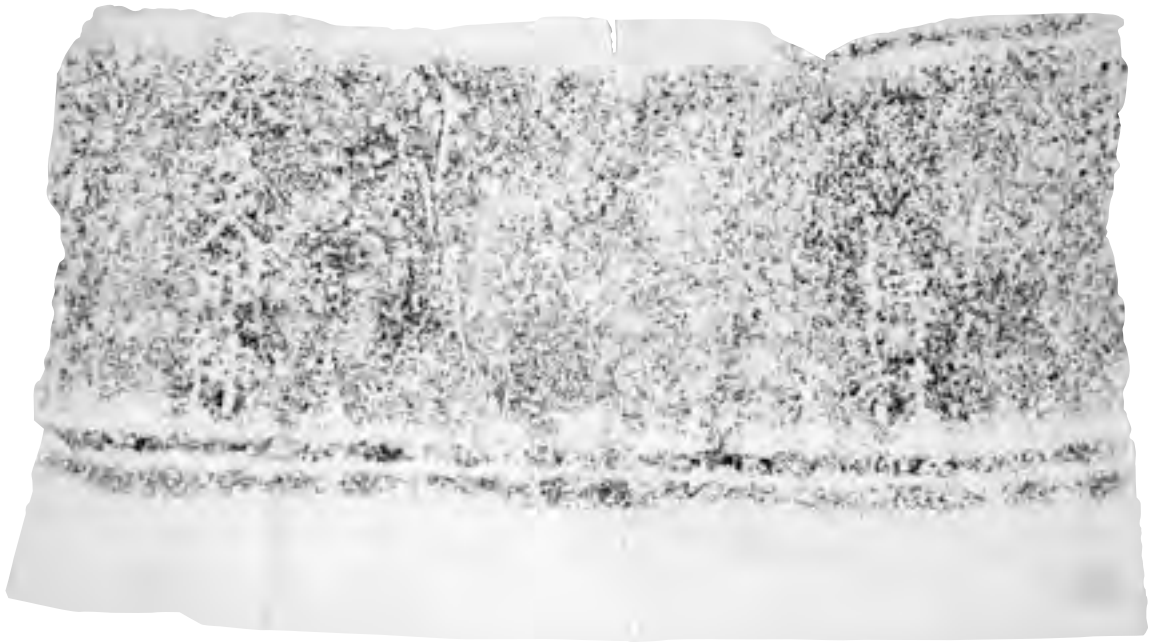




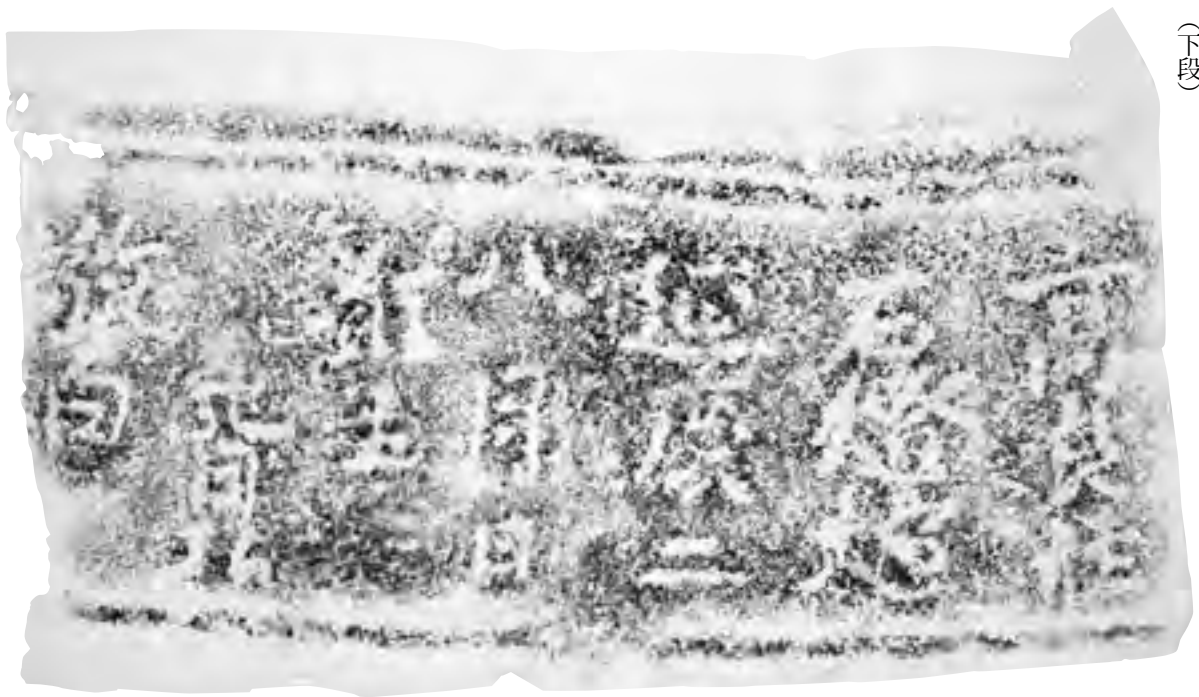




(上段)



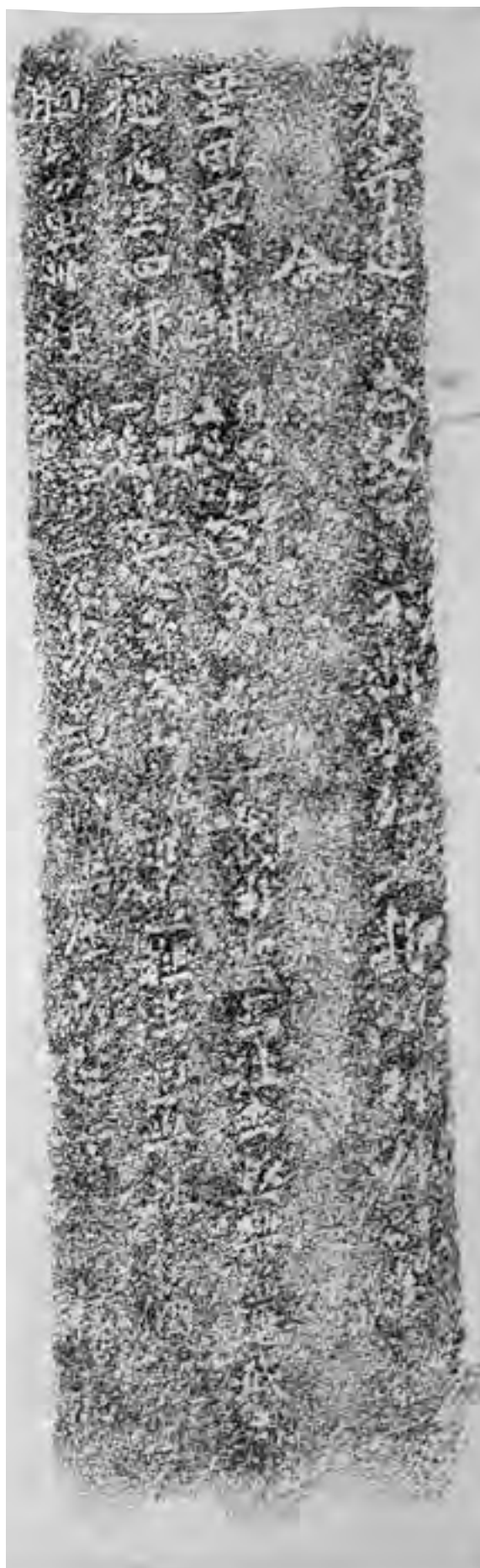
(下段)

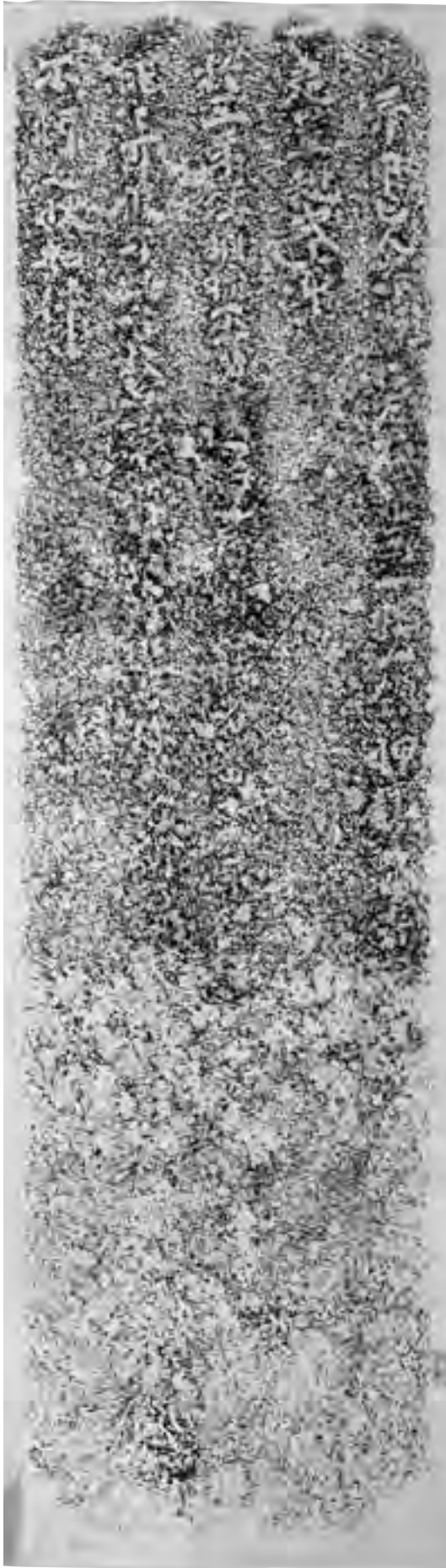




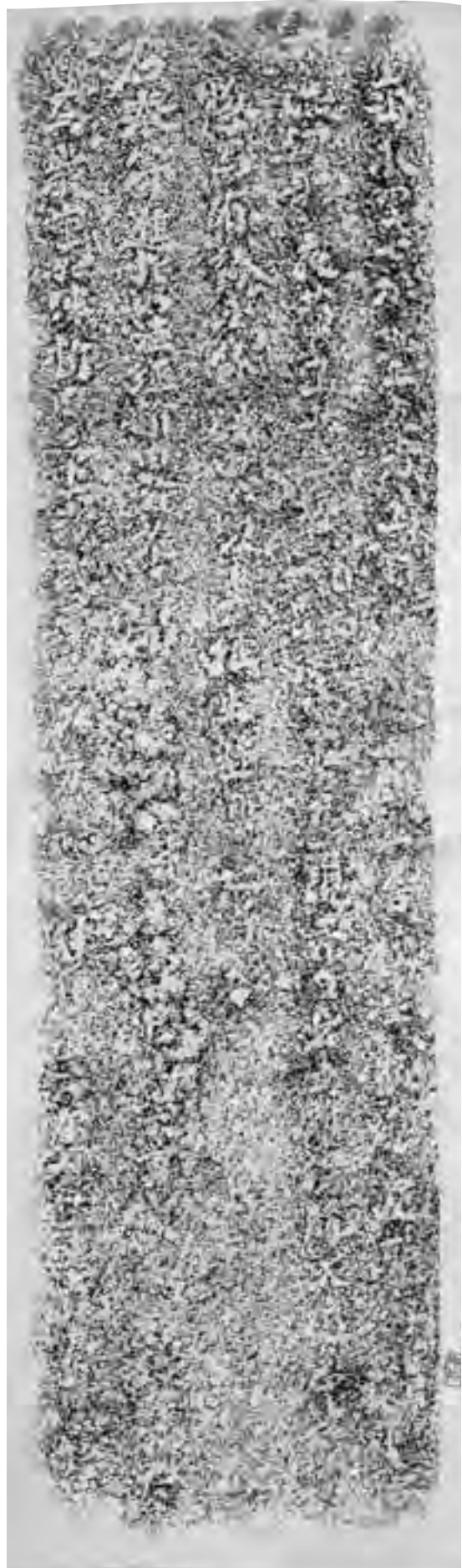


(南面)

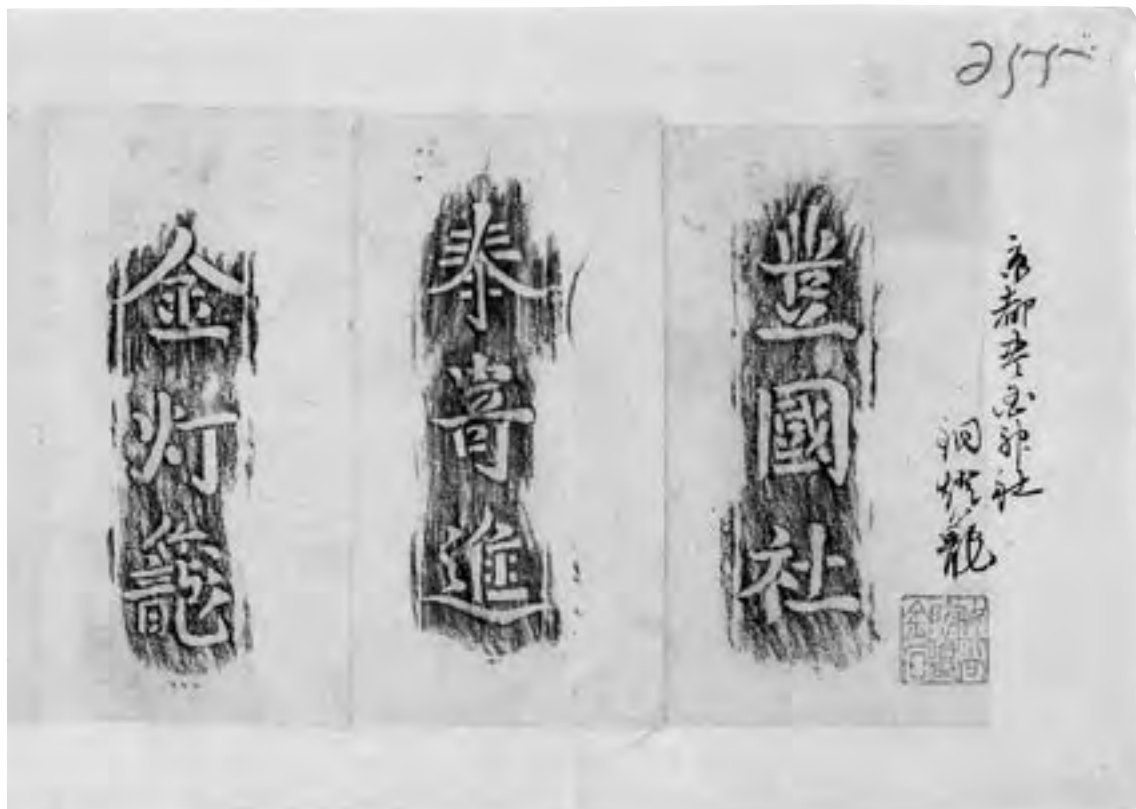
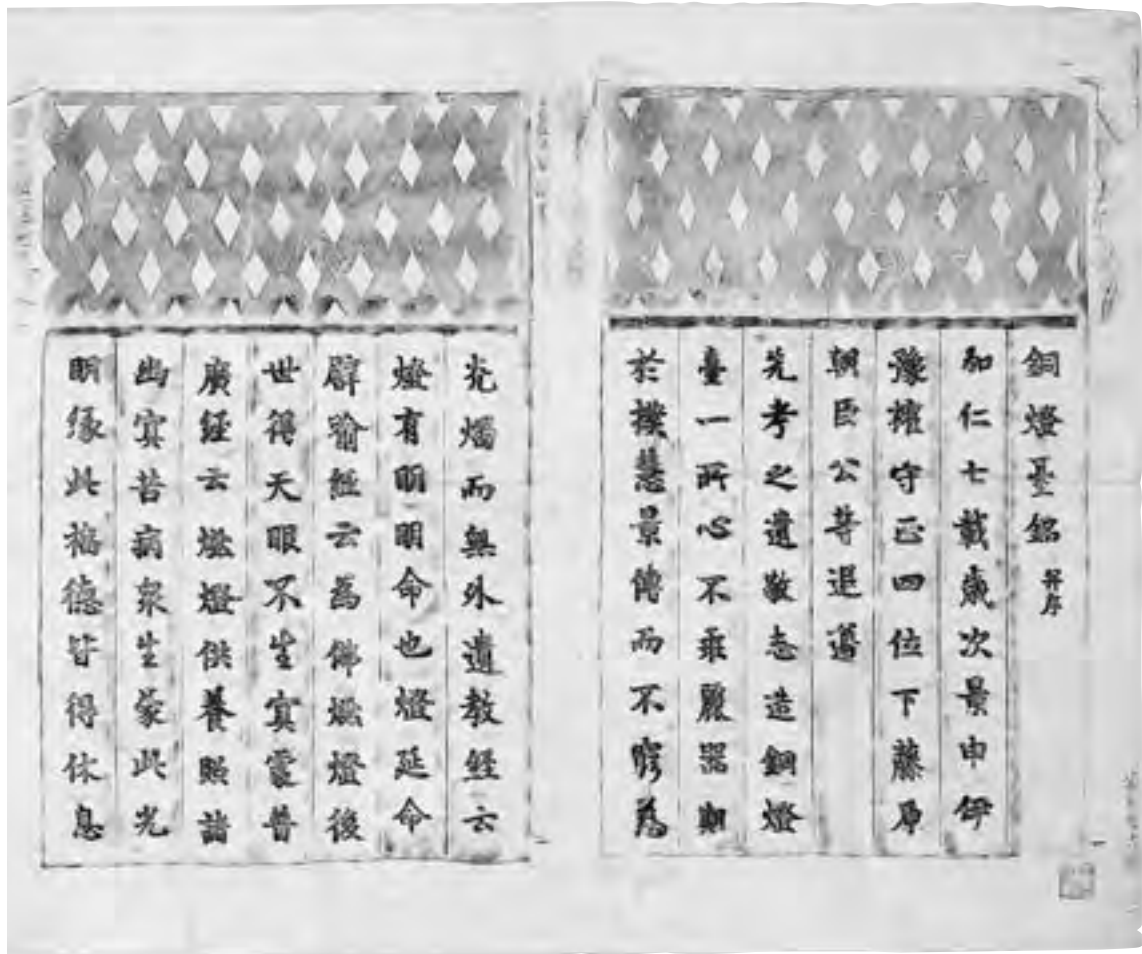




(北面)



(西面)



密則上天下地匝日不
 明向陰入冥匪火不照
 是故以斯功德奉酬
 先靈七覺如遠一念北
 迹庶幾有心有色並起
 於九橫無小無大共翻
 於八苦昔光明菩薩燃

燈說咒善樂如來供油
 上師居今望古豈不美
 哉式滌良自臨厥來者
 云大神降化應物開神
 三樂分據六度成淨百
 非洗滌万善惟新更昇
 切利示以崇觀一兼於福

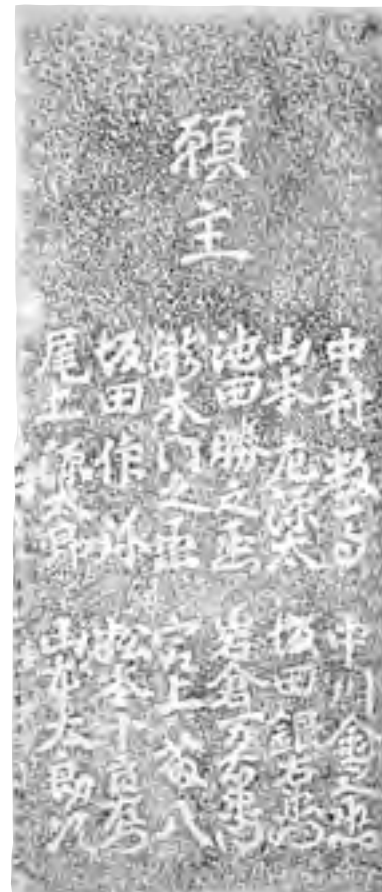
慶長十五年
 七月廿一日
 中井大和守
 橋朝正清

蓮月八日
 蓮月八日
 蓮月八日

(正面)



(背面)



(右側面)



(左側面)



『大日本金石史』刊行にいたる木崎愛吉の軌跡

西本 昌弘

はじめに

関西大学博物館所蔵の本山コレクションの中には日本・中国・朝鮮の金石文拓本二一〇〇余点が含まれている。このうち日本の部に分類される拓本は二一〇一点を数え、その多くに「好尚手拓金石」「好尚所蔵金石」などの朱印が捺されているところから、木崎愛吉(好尚)旧蔵の拓本資料が本山彦一の手に渡ったものとみられている^①。このなかには大阪を中心とする近世名家墓碑銘の拓本も数多く存在する^②。小稿では、大正一〇〜一一年の『大日本金石史』刊行にいたる木崎愛吉の足跡を追いながら、本山コレクションの金石文拓本資料のもつ価値について考えてみたい。

一 青年時代の木崎愛吉

木崎愛吉(一八六五年一月二日〜一九四四年六月二四日)は新聞記者・金石文研究家・近世文学研究家で、大坂南組農人橋材木町にあった町会所(町代の家)に生まれた。家号を大坂屋という。幼い時から町会所の記録(水帳・人別帳など)に親しみ、明治維新後はその家が戸長役場に変わったこともあって、市制や町政に興味をもち、市史に関する記録を渉獵した^③。

明治一五年(一八八二)より同三〇年まで森田節齋門下の五十川訥堂から漢文を学んだ^④。伊賀上野出身の磯野於菟介(秋渚)と親交を結んで、近郊を逍遙し、旅を共にしては文学を論じた^⑤。木崎と磯野の二人は大阪市内の墓碑を片端から見てもまわることを思い立ち、拓本帖を作ったり、「浪華墓跡考」を編んだりした^⑥。「浪華墓跡考」は未定稿であったが、森鷗外が主宰する『しがらみ草紙』に連載され^⑦、その後、明治三三年刊の磯野秋渚『なには草』のなかに、増補改訂の上「浪華墓誌」と改題して収録された^⑧。

二 大阪朝日新聞記者時代の木崎

明治二四年(一八九二)の新春、西村天囚・渡辺霞亭ら大阪朝日新聞社(以下、大朝と略称する)の小説記者を中心に「浪花文学会」が結成された。集まったのは岡野半牧・久松濑江・中川重麗(四明)・藤田軌達(天放)・長野一枝(圭円)・本吉欠伸らで、そのなかに木崎愛吉と磯野於菟介も含まれていた。四月には小説を中心とする機関誌『なには草』が創刊された(明治二六年二月に『浪花文学』と改称)。「浪花文学会」同人の木崎・磯野・中川・本吉らはまもなく大朝に入社して、読み物欄をはじめ小説・随筆に活動を開始し、大朝は小説の面白さでも読者を引きつけるようになった^⑩。木崎の回顧によると、大朝への入社は明治二六年六月二五日のことで、藤田軌達の推薦によるものだったという^⑪。明治二六年は大朝が面目を改めた年で、前内閣官報局長の高橋健三が主筆として迎えられて論説を主宰し、その論策の重厚さと格調の高さによって大朝の声価を高めた。客員として大朝を迎えられた内藤湖南が高橋の論説執筆を助けた^⑫。木崎と内藤の親交は大朝時代にはじまる。

大朝記者の時代に木崎は、『旅懺悔』『返り花』(いずれも大阪、尚文堂、明治三二年)、『天誅組』『曾国藩』(いずれも大阪、吉岡書店、明治三三年)、『家庭の頼山陽』(東京、金港堂書籍、明治三八年)、『頼山陽と其母』(大阪、木崎、明治四四年)、『手紙の頼山陽』(東京、有楽社、明治四五年)などの著書を刊行している^⑬。天誅組の吉村寅太郎、曾国藩・頼山陽など、近世の政治家・文人の人物伝をまとめたものである。のちに木崎は、森鷗外の『渋江抽斎』『伊沢蘭軒』執筆を紹介しながら、

「伝記」は、わたくしの今日の事業の一半である。わたくしは、廿年間の久しき、大阪朝日新聞社の記者時代から、その事業の一部として、「伝記」の筆を染めたのであった。

と論じ、『大日本人辞書』に載せられていないような無名の人物の伝記を掘り起こすことに努力したと述べている^⑭。大正末年以降の木崎が頼山陽や田能村竹田の伝記完成に力を注いだことから分かるように、木崎の本領は近世漢詩文を中心とする江戸時代学芸に関わる人物伝の方面に発揮されたということができよう^⑮。

三 政治的・経済的活動への傾斜

明治の年号が大正に変わり、大正政変や第一護憲運動など大正デモクラシーの嵐が吹き荒れると、大朝記者として木崎もこの世相の中に足を踏み込んでいった。桂太郎内閣が総辞職した大正二年（一九一三）二月一日、東京の騒乱が大阪に飛び火し、土佐堀青年会館で大阪青年倶楽部発会式兼憲法発布記念式大演説会が開かれた。この演説会には大朝の小山保雄・木崎愛吉らも参加し、桂首相攻撃の演説を行っている¹⁶。憲政擁護を主張した大阪青年倶楽部の結成に際しては、木崎は中井隼太・板野友造らとともに尽力し、同年三月には中井・板野らとともに幹事に選出されている¹⁷。

こうした行動の延長線上に木崎の政治活動が想定される。最近翻刻された市島謙吉（春城）の日記『双魚堂日誌』の大正四年条に、次のように木崎愛吉の姿が記録されている¹⁸。市島謙吉は立憲改進黨創設時の黨員で、大隈重信の腹心である¹⁹。衆議院議員をへて、当時は早稲田大学図書館長の職にあった。

大阪の木崎好尚（愛吉）外一人来訪。木崎は同志の候補者なるに、近かく選挙法違反にて有罪の宣告を受けたるに付、更らに控訴二及び、善後を策せんとして、特に相談の為来れる也（二月二四日）。

木崎は市島の同志たる大隈派の候補者であったが、選挙法違反のため罪に問われたというのである。この年三月二五日には第一二回衆議院議員選挙が行われ、大隈重信後援会立候補者が一二名、会推薦の候補者が一三三名当選した。木崎は大隈後援会立のものしくは会推薦の候補者であったであろう。この後、三月一日・二日・三日と連続して木崎より来電のあったことが記されている。

さらに、『双魚堂日誌』大正四年一〇月条には、次のような記事がみえる。大阪旅寓に在り。（中略）木崎好尚より大阪デーリー、ニユース社を起し、英字新聞を起す件二関し、余に賛助員たらんことを求め来たり承諾す（一月一五）。

大阪ニ於て発刊せんとする大阪デーリー、ニウスの件二付、今朝、木崎愛吉、野田省蔵、毛呂正春相携へて来り援助を請ふ旨を話して去る（一〇月二二日）。

デーリーニユースの木崎愛吉、野田蘭蔵来話（一一月二日）。

選挙違反の件から約半年後の一〇月、木崎は大阪デーリーニユース社を起し、英字新聞を発刊する件で、東京の市島謙吉に援助を求めている。市島は木崎のために大隈重信を訪ね（一〇月二四日）、来阪の折には野村徳七を訪ねる（一月一七日）など尽力しており、木崎はその礼として市島に「自拓大村威那卿墓誌銘」を贈っている（一月一八日）。大正四年におけるこの大阪デーリーニユース社設立の成否は不明であるが、木崎自身、大正八年正月頃に「予は昨今『大阪新聞』創刊事務の為に忙殺され²⁰」ていると述べており、数年間にわたってこの案件に関わっていたようである。

以上のように、大朝を退社した大正三年前後から同八年にかけて、木崎は政治的・経済的な活動を精力的に展開した。この時期の木崎の著作には、『大阪遷都論』（木崎、大正七年）、『日本思想』第一冊（思想界の大正維新）を収める。好尚会、大正八年）など、同時代の政治や思想について論じたものがある。明治の政局展開を叙述した『明治外史』を刊行する予定もあったようである²¹。当時の木崎の関心がよくうかがわれる著作であるといえよう。

四 『大日本金石史』の編纂と刊行

木崎が金石文の世界に分け入る機縁となったのは、青年時代に町代出身の学者武内確斎・広瀬筑梁の墓碑を訪ね、篠崎小竹による撰書や頼山陽による題表を目にしたことであつた²²。また、河内枚方の三浦家において、三浦蘭阪の手になる金石文拓本に接したことや、大阪の小山田靖斎の金石文遺稿に触れたことが、ますます金石文に対する興味をかきたてたという²³。木崎は幸田露伴と尾崎紅葉の西鶴墓所参拝に刺激され、明治二二年一〇月二二日に誓願寺の西鶴墓所に詣でた²⁴。「浪華墓跡考」の編纂からも、大阪学芸の先輩たちの墓所を訪ね、その遺芳をしのびんとする気持ちがうかがえる²⁵。大正一〇年頃には木崎が「前後十数年に亘りて蒐集しつゝある」拓本資料は「約一千點に近」く²⁶なつたというが、大朝退社の前後から木崎は、これら金石文資料の取りまとめにかかつていたようである²⁷。『日本金石史』一輯（大正二年）、『日本金石史』二輯（大正三年）、『撰河泉金石文』（大正三年）などが相次いで刊行された。

しかし、この間は前述した政治的活動などによって、木崎の金石文研究は遅々

として進まなかったのではないか。木崎が『考古雑誌』に金石文に関わる小編を続々と発表するようになるのは、大正七、八年以降のことである。

「棟札くさぐさ」(六巻七号、大正五年三月)

「金石文より観たる豊臣秀頼公」(八巻九号、大正七年五月)

「野中寺の金堂弥勒菩薩」(八巻一二号、大正七年八月)

「大阪新町吉田屋の銅鐸」(九巻五号、大正八年一月)

「贅言一則 瓦に就て」(九巻八号、大正八年四月)

「正暦三年の鰐口に就て」(一一巻六号、大正一〇年二月)

「撰河泉棟札年表」(一一巻六号、大正一〇年二月)

「建徳三年の石燈(神八井耳命と河内黒田宮)」(一一巻九号、大正一〇年五月)

大正六年六月には木崎を主筆とする雑誌『史文』が発刊された。このなかには「木崎愛吉」「好尚」「木崎好尚」「長松閣主人」などの名前で、伝記と金石文に関する多くの論考が発表された。金石文関係のものを掲げると次のようになる。

「豊臣秀頼公の名に由りて遺されたる金文」(創刊号)

「乾十郎の建碑に就て」(創刊号)

「寛永廿一年の鰐口」(二号)

「山城国東溪巖面弥勒仏造像記」(三号)

「和歌山万精院の鐘 豊臣秀頼公に関する金文補遺」(四号)

『史文』は同年九月までにわずか四号を出しただけで終刊したが、多忙な中にも金石文研究を継続してゆこうとする意志が表れている。『史文』四号の広告には、「大日本金石文」と「大日本金石年表」の脱稿と近刊が予告されている。木崎はこれまでの金石文研究を集大成する意気込みで仕事を続けていたのである。

しかし、実際に『大日本金石史』本文三巻と附図一卷が刊行されたのは大正一〇(一)一年のことであった。木崎は本書印刷にまつわる苦勞として、①大阪の印刷業者に大部な専門書の引き受け手がなかったこと、②金石文の原稿を写すなど助手として木崎を助けた二女博子が病死したこと、③資力の乏しかったこと、の三点をあげている。とりわけ③の苦勞は深刻だったようで、木崎自身、

わたくしが本書の原稿材料探求の間に於ける「窮約」の実際は、自身以外には想像もしていだげない程の境地に陥り、あらゆる艱苦に打勝ちて、荒き

風波を凌ぎつゝあつたことは、測るにも測られない涙の淵でした。

と振り返っている。²⁸⁾木崎がこれほどの窮地に陥つたのはなぜなのか。その詳細は不明であるが、前述したような政治的・経済的活動の結末と関わりがあるように思われる。

木崎はこの窮地に際して、蔵書の売却、金石文拓本の一括売却、それに友人諸氏の義侠と、かねがねより後援を惜しまない一、二有力者の恩顧によることで、本書の公刊を実現することができたと書いている。²⁹⁾ここに言及される一、二有力者のうちの一人は、櫻木潤氏が指摘するように、大阪毎日新聞社社長であった本山彦一であろう。全国金石文の拓本類を一括して譲り渡した「篤志の人士」が本山彦一であったことは疑いなく、本山が木崎から譲り受けた金石文拓本こそ、現在関西大学博物館に所蔵される本山コレクション金石文拓本資料(日本の部)そのものであると考えられる。

ただし、木崎の後援者は本山以外にも存在した可能性がある。たとえば前述した早稲田大学図書館長の市島謙吉である。市島は越後国蒲原郡の大地主市島家の筆頭分家の出で、病気のため政界を引退した後は、早稲田大学の経営を支える一方で、文化事業家・随筆家としても活躍した。市島が大阪デリーニューズの創刊に関わって木崎を支援したことは前述したが、頼山陽の研究など学問的関心の共通点もあり、市島が『随筆頼山陽』を刊行したときには、木崎が収集した材料を提供し、序も書いている。³¹⁾その序において木崎は、「余雖非其人、其於頼翁、宿因匪淺、居恒私淑」と述べている。早稲田大学図書館には、『四時幽賞』上下、『漫遊記』巻一(巻五)など、「好尚堂図書記」の蔵書印をもつ古典籍が所蔵されている。これらの書物は木崎から市島の手へ渡ったものである可能性が高い。市島と木崎の関わりについては今後さらに追跡する必要があるだろう。

おわりに

木崎愛吉が編纂した『大日本金石史』は、大正一三年度の帝国学士院賞桂公爵記念賞を受賞した。黒板勝美はこの大著を評して、「凡そ五百頁ほどのものが三冊合せて一千五百頁の大著、かく専門的の、而も限られたる専門的の著述にこれだけ膨大な編著は近來稀に見るところで、(中略)しかも通俗な好尚君一流の

文体で面白く、こんな片寄った考證的の記述も読者をして少しも飽かしめないところ、まづこの書の価値を認めしめ、「(下略)」と述べている。⁽³²⁾本書が金石文研究のレベルを一躍高めた労作であったことは疑いないところであろう。

従来は木崎が大朝を退社して以来、金石文研究に没頭したと考えられていたが、小稿で紹介したような政治的・経済的活動の一時期をささみ、想像もつかない「窮約」のなかから、『大日本金石史』が生み出されたことは驚嘆に価する。木崎は大正十一年に『大坂金石史』を刊行して以来、金石文の本格的な研究からは遠ざかったが、拓本資料が手元になかったことに加えて、木崎の主たる関心が近世学芸に関わる人物伝にあったことが、その要因として考えられる。

その意味で、本山コレクション金石文拓本資料の有効利用は後世の我々に託された課題であるといえる。大阪を中心とする金石文拓本の網羅的集成およびその研究は木崎以降ほとんど行われていない。一方で、長年の風雨にさらされ、碑面などの破壊・損傷は進行している。本山コレクション金石文拓本資料の価値は想像以上に大きく、その分析・検討を進めることで、関西における埋もれた歴史資料を掘り起こすことが可能になるであろう。

注

- (1) 角田芳昭「金石文拓本について」(『阡陵』五、一九八二年)、同「資料紹介『金石文拓本資料』」(『関西大学考古学等資料室紀要』三、一九八六年)。
- (2) 肥田皓三「木崎好尚手拓の近世名家墓碑銘」(『阡陵』一〇、一九八四年。のち『上方学芸史叢放』青裳堂書店、一九八八年に再録)。
- (3) 木崎愛吉「序説」(『大日本金石史』五、歴史図書社、一九七二年)。
- (4) 内藤湖南「序文」(木崎愛吉「家庭の頼山陽」金港堂書籍、一九〇五年)、木崎愛吉「頼三樹伝」(今日の問題社、一九四三年再版) 奥付の著者略歴。
- (5) 磯野秋渚「はしがき」(木崎愛吉「旅懺悔」尚文堂、一九九九年)。磯野については、肥田皓三「大正の大阪文学」(『上方風雅帖』人文書院、一九八六年)、斎田作楽「解説」(磯野秋渚『なには草』太平書屋、一九九六年復刻版) を参照。
- (6) 木崎愛吉「序説」(『大日本金石史』五、前掲)。
- (7) 『しがらみ草紙』一一号(一九九〇年八月) から同一五号(一九九〇年二月) までと同一八号(一九九一年三月) の計六回。

- (8) 磯野秋渚『なには草』(太平書屋、一九九六年復刻版)。
- (9) 『朝日新聞社史』明治編(朝日新聞社、一九九〇年) 二九〇頁。
- (10) 木崎好尚「朝日新聞と私」(『史文』四、一九一七年) 三九頁。
- (11) 木崎好尚「朝日新聞と私」(前掲) 三六頁。
- (12) 『朝日新聞社史』明治編(前掲) 二八二～二八四頁。
- (13) 関西大学図書館編『関西大学所蔵大阪文芸資料目録』(一九九〇年)。
- (14) 木崎愛吉「鶴外博士の『淡江抽斎』『伊沢蘭軒』と自家の事業と」(『史文』四、一九二七年) 三一頁。
- (15) 肥田皓三注(2) 論文一〇二頁。
- (16) 『朝日新聞社史』大正・昭和戦前編(朝日新聞社、一九九一年) 一三頁。
- (17) 『新修大阪市史』第六卷(大阪市、一九九四年) 七〇二～七〇八頁。
- (18) 春城日誌研究会「翻刻『春城日誌』(二四)」(『早稲田大学図書館紀要』五四、二〇〇七年)。
- (19) 林茂「政党的組織活動―市島謙吉をめぐって―」(『近代日本の政治指導』東京大学出版会、一九六五年)、春城日誌研究会「翻刻解説『春城日誌』(一)」(『早稲田大学図書館紀要』二六、一九八六年)。
- (20) 木崎愛吉「大阪新町吉田屋の銅鐸」(『考古学雑誌』九一五、一九一九年一月) 六八頁。
- (21) 『史文』第三号(大正六年八月) および第四号(大正六年九月) の広告。
- (22) 木崎愛吉「序説」(『大日本金石史』五、前掲)。
- (23) 木崎愛吉「この小篇の末に」(『大日本金石史』三、歴史図書社、一九七二年)。
- (24) 木崎好尚「西鶴の墓」(『読売新聞』明治三十二年二月一四日)、好尚堂主人「浪華つと」(『しがらみ草紙』一一号、一九九〇年)。
- (25) 肥田皓三注(2) 論文一〇三頁。
- (26) 木崎愛吉「總結下」(『大日本金石史』三、前掲) 四二九・四三一頁。
- (27) 木崎愛吉「この小篇の末に」(『大日本金石史』三、前掲) 三〇五頁。
- (28) 同上七頁。
- (29) 木崎愛吉「後説」(『大日本金石史』五、前掲) 五九九～六〇〇頁、同「總結下」(『大日本金石史』三、前掲) 四二九～四三〇頁。
- (30) 櫻木潤「関西大学博物館所蔵本山コレクション「日本の部」拓本目録」(『関西大学なになは草』大阪文化遺産学センター二〇〇五、二〇〇六年)。
- (31) 市島謙吉「隨筆頼山陽」(中央公論社、一九四二年)「序」「はしがき」。
- (32) 『史学雑誌』三三一一(一九三三年) 七九～八〇頁。

本山コレクションと木崎愛吉旧蔵拓本

櫻木 潤

はじめに

関西大学には、毎日新聞社五代目社長本山彦一の蒐集品である「本山コレクション」が所蔵されている。博物館には、考古資料・歴史資料約一万五〇〇〇点、図書館には、蔵書約一〇〇〇〇点が収められる¹⁾。

本山彦一は、明治から昭和にかけての経済界・新聞界における目覚ましい活躍によって有名であるが、その一方で学術的な貢献も数多い。本山コレクションは、彼の学術的な活動のなかで蒐集されたものである。小稿では、本山彦一の学術的な活動と本山コレクション、木崎愛吉旧蔵の拓本が本山コレクションに加わった背景などについて述べておきたい。

一 本山彦一の学術的活動

本山彦一（一八五三～一九三二）は、熊本藩の足軽の子として生まれた²⁾。藩校時習館に学び、明治四年（一八七二）に藩校が廃止され、上京。箕作秋坪の三叉学舎に入門し、その後、福沢諭吉に師事する。租税寮八等属を経て、兵庫県庁に入り、勸業課長・学務課長を兼務した。明治一五年に大阪新報社社長に転じ、翌年、福沢の招きにより時事新報に入社する。会計局長として経営に手腕を奮い、明治一九年、藤田伝三郎に見出されて、時事新報を退職し、大阪藤田組支配人に就任する。井上馨の息のかかった藤田組への入社に、福沢は当初賛成しなかったという。岡山県の児島湾開墾事業などを手がけ、明治三年に大阪毎日新聞社（以下、大毎と略称する）相談役を兼務する。藤田組総支配人として数々の事業を推進する一方で、業務担当社員として、三代目社長に就任した原敬（のちの首相）とともに経営不振の大毎の立て直しにあたった。明治三六年、五代目社長に就任。以後は、大毎の経営に本格的に乗り出し、当時圧倒的な発行部数を誇る大阪朝日新聞に並ぶまでに大毎を躍進させた。

「新聞界の巨人³⁾」としての本山の活動や、彼の社会福祉活動については、これまでさまざまに論じられている⁴⁾。ここでは、本山コレクションの形成に関わる本山の学術的な活動についてみておきたい。

本山の学術的な関心は、考古学・民俗学・人類学・生物学・自然地理学・気象学・地質学など多岐に渡っている。自然科学分野においては、大正二年（一九一三）から五年間にわたる日本還海の海流調査や、気象観測所の建設（大正八年に伊吹山、同九年に立山、同一二年に雲仙岳絹笠山頂）、大正八年の伊吹山での新種蛭の発見（のちに「本山蛭」と命名）などの活動が知られるが、本山自身が「史学と考古学とに至りては、余の最も嗜好するところ」と語ったように⁵⁾、歴史学、特に考古学においては、「考古学界の最大のパトロン」として、多くの発掘調査を後援している⁶⁾。

本山の考古学への関心は、明治一〇年（一八七七）のモースによる大森貝塚の発掘に遡る。大森貝塚が石器時代の遺跡であるとの新聞報道を目にした本山は、「ソナコトガ、ドウシテ解ルモノカト、実ハ嘲リ居タル程」であったが⁷⁾、その頃から考古学へ傾倒したようである。大毎社長就任前後には、人類学会会員となり、それまで盛んに蒐集していた刀剣や甲冑の愛玩よりも、遺跡視察や発掘に夢中になった。大正元年の宮崎県西都原古墳群への視察の際に、浜田耕作らと知り合い、大正四年頃には鳥居龍蔵や喜田貞吉らとたびたび遺跡探検に出かけている。本山が後援した発掘調査のなかでも特に有名なものは、大阪府河内国府遺跡（大正六～八年、三回）・山口県長門鑄銭司跡（大正一一年）・佐賀県肥前古陶窯跡（昭和四～六年、三回で三八箇所）のいわゆる「三大発掘」と、岡山県津雲貝塚（大正四～九年）が挙げられる。これらの発掘に際しては、「本山発掘隊」や「大毎考古隊」と呼ばれる調査隊を大毎が自前で組織し、発掘調査にあたった。また、発掘調査には取材記者を同行させ、調査の経過を逐次、大毎紙上に掲載したのであった。河内国府遺跡の発掘調査では、のちに京都支局長となる岩井武俊を同行させ、三部六〇回にわたる連載記事を掲載している。

本山の学術的活動における貢献は、どのような分野に対しても支援をする代わりに、研究成果を寄稿するように依頼し、それらを大毎紙上に掲載したことである。これによって、当時、一部の研究者だけのものであった学問を広く人々に普

及させ、あわせて大毎の販売部数の増加につなげたのである。そして、注目すべき貢献が、発掘調査などで得られた遺物を蒐集し、公開したことである。本山の学術的活動などを通して蒐集されたものが「本山コレクション」なのである。

二 本山コレクション

現在、本山コレクションは、関西大学に所蔵され、総数は約一万六〇〇〇点にのぼる。博物館には、考古・歴史・民俗・美術工芸など約一万五〇〇〇点（うち重要文化財一六点）が、図書館には、日本史・有職故実などの蔵書類約一〇〇〇点が収められている。

博物館に所蔵されるのは、大阪府河内国府遺跡出土の石製玦状耳飾、青森県亀ヶ岡遺跡出土の土偶、茨城県椎塚貝塚出土の縄文土器、岡山県津雲貝塚出土の土器や貝輪一对、伝奈良県天理市出土の石枕、山口県長門鑄銭司跡出土の和同開珎の鑄型などの考古遺物のほか、書画や甲冑、武器、刀剣などに及ぶ。また、地域的にも、日本だけでなく、北アメリカ・ヨーロッパ・千島列島から中国、朝鮮半島などの資料を含み、質・量ともに日本でも有数のコレクションである。

本山コレクションには、多数の石器類が含まれているが、それらは、神田孝平（一八三〇～一八九八）の蒐集品である「神田コレクション」を譲り受けたものである。神田孝平は、幕府の蕃書調所教授、開成所教授を経て、明治政府では、兵庫県令、文部少輔、元老院議官を歴任した。一方で、福沢諭吉らと明六社創設に加わり、文部少輔時代には、福沢らを迎えて東京学士会院（現在の日本学士院）の設立に尽力する⁹。東京人類学会の初代会長でもある。神田コレクションには、椎塚貝塚や亀ヶ岡遺跡などから出土した縄文土器、奈良県天理市出土の石枕などが知られ、神田は自身の蒐集品をもとに、明治十九年（一八八六）に『日本大古石器考』を著している（同書は、日本語版に先立って英語版が明治十七年に刊行されている）。

昭和五年（一九三〇）、本山は、神田コレクション約一三〇〇点を譲り受け、コレクションを一気に充実させた。これを契機として、蒐集品の整理に着手し、その嘱託として、浜田耕作（一八八一～一九三八）を通じて、本山が指名したのが、末永雅雄（一八九七～一九九二）である。後年、末永は、その際のエピソード

について、次のように述懐している¹⁰。

昭和五年末か六年の春のころと記憶するが、ある日研究室で濱田先生が「本山コレクションの整理に君をよこして欲しいと連絡があったが行くか」とのお言葉を頂いたので私は「先生のお許しがあれば参りましょう」と申し上げた。先生は「本山からは君を指名して来ているからもし行かないとしても代人を出せないで行くように」と許可が出た。それですぐ先生から本山氏に連絡して頂いて浜寺の本山考古室へ随時整理に行くこととしたが、そのはじめに先生から訓示を受けた。（中略）その第一点は、ああしたところへ行くといわれわれ学者を出入商人のような取扱いをすることが多い。そのときは仕事半ばでもすぐ捨てて帰って来い。（中略）第二点は、決して報酬を要求するな。教室には仕事のたびに報酬を要求するものが居るのでまことに僕は心苦しく思っている。学者はこの点を心掛くべきだ。第三点は、いま教室へ小林行雄君が来ている。（中略）本山の資料整理を機会に君の私設助手として四～五年彼の能力を見て教室助手にしようじゃないか、それでよく観察をして置くようにという三点であった。

本山は、昭和七年に大阪府堺市浜寺の自宅隣接地に建設した富民協会農業博物館の一部を「本山考古室」と名付けて、コレクションを陳列・公開した。その一方で、末永は、小林とともにコレクションの整理を進め、終了後には図録と解説を刊行する計画を立て、まずは主要資料をまとめることとしたが、昭和七年に本山が死去し、その一周忌に際して『本山考古室図録』を刊行することとなった¹¹。また、三周忌には『富民協会農業博物館本山考古室要録』を刊行し、本山コレクションの考古資料は広く知られるようになったのである。第二次世界大戦後、本山家に所蔵されていたコレクションは、散逸やさまざまな研究機関からの譲渡の依頼があった。本山の息子二世本山彦一が、昭和二五年に関西大学教授に就任していた末永に相談したところ、創設間もない考古学研究室の充実を目指していた末永は、関西大学に移管することを要請し、「父が貴方を信頼して整理した資料であるから貴方の意見で処理して下さい結構です」との快諾を得て、その後の末永の尽力により、本山コレクションは、関西大学に所蔵されることとなったのである。

三 本山コレクションと木崎愛吉旧蔵拓本

末永によって整理され、目録類が出版された考古資料に比べて、本山コレクションに二〇〇〇点に及ぶ金石文拓本が存在することは、あまり知られていない。『関西大学考古学等資料室紀要』第三号において、目録として紹介されているのは、「日本の部」(碑石、墓碑銘類、墓碑類、板石・石塔婆類・石佛造像銘類、燈籠類、鐘類、金口・擬宝珠・金具類、鏡類、銅鉄諸器銘類) 一二〇一点・「中国の部Ⅰ」(碑石類、碑銘類、刻石類、銘版類) 一七九点・「中国の部Ⅱ」(龍門石刻録) 七四四点・「朝鮮の部」(墓誌類) 六六点で、計二二三〇点である。また、『史泉』第五三号には、梵鐘銘の拓本一九九点の目録が紹介されており、本山コレクションの金石文拓本の総数は、二三二九点にのぼる。これらは、一九七〇年代後半から八〇年代にかけて、関西大学教授の壺井義正氏や、考古学等資料室の角田芳昭氏によって整理・分類がなされ、一九九〇年代には、傷みの激しい拓本が毎年数点ずつ表装されている。¹³「日本の部」拓本の表装分については、二〇〇五年に、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターで調査し、その目録を作成した。¹⁴「日本の部」拓本で未表装のものについては、現在、センターにおいて整理・調査を進めている。

本山コレクションの金石文拓本の「日本の部」に分類されるもの多くには、「好尚所拓金石」・「好尚所蔵金石」などの朱印が捺されている。これらを『大日本金石史』附図に収録されている拓本にみえる印影と照らし合わせると、それらが同一のものであり、本山コレクションの「日本の部」金石文拓本が、大正年間『撰河泉金石文』・『大日本金石史』・『大坂金石史』を著した木崎愛吉(好尚)(二八六五―一九四四)旧蔵のものであることがわかる。

木崎愛吉旧蔵の金石文拓本が、本山コレクションに加わった背景については、かつて考察したことがある。¹⁵大正一〇年(一九二一)に、『大日本金石史』を、翌年に『大坂金石史』を出版するにあたって、木崎は相当な資金難であったらしい。彼は、急に必要としない蔵書を売却して資金を捻出しようとしたが、それでも足らず、研究に用いた全国の金石文の拓本類を手放す決意をする。そこへ、すべてを一まとめにして譲り受けたいとする「篤志の人士」を紹介され、いつでも借覽できるといふ好条件で、その人物に売却したのであった。¹⁶木崎は、この「篤

志の人士」の名前を明らかにしていないが、この人物が本山彦一であったと考えられる。本山は、先に述べたように、さまざまな学問分野に対して後援しているが、個人に対しても援助を惜しまず、東京帝国大学法学部の「明治新聞雑誌文庫設立にあたって」も、宮武外骨が収集した明治時代の新聞・雑誌を一括購入し、同文庫に寄付するという木崎の場合に通じる方法をとっている。¹⁷また、関西大学図書館の本山コレクションには、『大日本金石史』第一巻・第三巻が所蔵されている。第一巻には、木崎の自筆とみられる「呈 本山人」と、「木崎愛吉」の朱印が捺されており(本書八頁参照)、これらが木崎から本山に贈られたものであることがわかる。本文中には、本山の筆と思われる細かな朱書きや墨書きがある。なかには、木崎の翻刻に対して修正を加えている箇所もある。図書館所蔵の本山コレクションには、金石文に関する蔵書も多く、本山はそれらを参照したこともあっただろうが、木崎から譲り受けた現物の拓本を手元に置きながら書き込みを加えたとも考えられることができるのである。

木崎を本山に結びつけた人物としては、先に述べた岩井武俊が注目される。彼は、内藤湖南に師事し、考古学や金石文研究への造詣が深く、研究成果を学術雑誌に発表している。木崎とも近い間柄にあったようで、木崎は岩井に『大日本金石史』を贈り、岩井も二度にわたって木崎に疑問点を書簡で送っている。¹⁸

木崎は、自身が収集した拓本を譲り渡した人物について名前を明らかにしていないが、以上の推測に大過なければ、大阪朝日新聞社に勤めた経歴のある木崎が、本山・岩井という大毎の人脈に窮地を救われたことに対する木崎の心情の表れではないかと思えるのである。

おわりに

関西大学に所蔵される本山コレクションのうち、歴史資料や民俗資料などは、これまでほとんど調査・研究がなされていないといつてよい。木崎愛吉旧蔵の金石文拓本は、木崎が明治から大正にかけて収集したものであり、なかには現在失われてしまった金石文の拓本も多く含まれていることから、本山コレクションの他の資料も、現在では貴重なものを数多く含んでいることが予想され、その全容の解明と調査・研究は、コレクションがもつ学際的な価値とあいまって、今後の

重要な課題である。木崎愛吉旧蔵の金石文拓本についても、角田芳昭氏が作成した目録はいずれも簡潔なものであり、関西大学なわ・大阪文化遺産学研究会センターで作成した表装分一二六点の目録も「日本の部」の一割に満たない。本叢書では、「日本の部」の中から七〇点を選び、図版と個別解説を付したが、今後、こうした地道な調査・研究を進めることで、その全体像が明らかとなり、貴重な資料を提供することができると思われる。関西大学以外にも、東京大学日本史研究所蔵の黒板勝美収集の金石文拓本や、国立歴史民俗博物館蔵の聆涛閣集古帖などの拓本資料、早稲田大学会津八一記念博物館蔵の会津八一や加藤諱収集の拓本など、木崎とほぼ同時代、あるいはそれ以前に収集された金石文拓本コレクションが知られるが、木崎旧蔵拓本の調査・研究によって、それらのコレクションとの比較や関連性を明らかにするとともに、明治末期から昭和初期にブームとなった「掃苔文化」の実態を知る手がかりともなり得る。

また、図書館所蔵の本山の蔵書類には、多くの写本類が含まれているが、それらについてもほとんど調査・研究はなされておらず、今後の調査・研究が待たれる。木崎進呈の『大日本金石史』にみられたような本山の書き込みがある蔵書も他に含まれている可能性が高く、これらを通して、本山彦一の人物像やその周辺の人々についても明らかにすることができるであろう。

関西大学に所蔵される本山コレクションは、それ自体が貴重な資料であるとともに、明治から昭和初期における学問やそれに連なる人々の系譜を考える上でも貴重な素材をわれわれに提供してくれるといえるのである。

注

- (1) 博物館所蔵の考古資料などは、『博物館資料図録』（関西大学博物館、一九九八年）に紹介されており、図書館所蔵の蔵書類は、図書館のホームページ（<http://www.kansai-u.ac.jp/library/library/collection/>）から検索できる。
- (2) 本山彦一については、故本山社長伝記編纂委員会編『松蔭本山彦一翁』（大阪毎日新聞社、一九三七年）に拠った。
- (3) 徳富蘇峰による本山への追悼文（注（2）、六〇二頁）。
- (4) 岡崎鴻吉「大毎と本山彦一翁の日記」（『新聞研究』一二、一九五〇年）、金戸嘉吉「本

- 山彦一の新聞商品思想」（『井上教授古稀記念 新聞学論集』、関西大学新聞学会、一九六〇年）、「本山彦一、五代社長に」（『毎日新聞』130年史刊行委員会『毎日』の3世紀―新聞が見つめた激流130年（上巻）』、毎日新聞社、二〇〇二年、三一七―三三三頁）、小笠原慶彰「大毎慈善團と本山彦一―企業の社会的責任について思うこと―」（『京都光華女子大学研究紀要』四二、二〇〇四年）など。
- (5) 大正二年五月一七日の別荘落成披露会での本山挨拶（注（2）、五二七頁）。
- (6) 本山の考古学趣味については、注（2）、五二七―五四七頁や、「考古学の揺りかご」本山発掘隊」（注（4）『毎日』の3世紀、六三二―六四二頁）。
- (7) 大正九年中の本山の手控え（注（2）、五二九頁）。
- (8) 山口卓也「関西大学博物館の本山コレクション」（『北海道立北方民族博物館友の会季刊誌』六〇、二〇〇六年）。
- (9) 角田芳昭「関西大学考古学等資料とその恩人たち」（『関西大学考古学等資料室紀要』一、一九八四年）、同「東京学士会院 会員神田孝平」（『同』三、一九八六年）。
- (10) 末永雅雄「常歩無限 関西大学考古学廿年の歩み」（関西大学教育後援会、一九八六年、六五―六六頁）。
- (11) 末永雅雄「序」（同氏編著『富民協会農業博物館 本山考古室目録』、一九三四年、三頁）。
- (12) 注（10）、六七頁。
- (13) 角田芳昭「金石文拓本について―表装が完了した著名金石文―」（『関西大学考古学等資料室紀要』九、一九九二年）。
- (14) 櫻木潤「関西大学博物館所蔵本山コレクション「日本の部」拓本目録」（『関西大学なわ・大阪文化遺産学研究会センター』二〇〇五、二〇〇六年）。
- (15) 櫻木、注（14）、九―一〇頁。
- (16) 木崎愛吉「後説」（『大日本金石史』五、歴史図書社、一九七二年、五九八―六〇〇頁）。
- (17) 「本山彦一と明治文庫 宮武外骨に資金援助」（注（6）、八三六―八三七頁）。
- (18) 木崎愛吉「岩井武俊氏より」（『大日本金石史』三、四六五―四六九頁）。

大塩の乱「勇士」としての坂本鉉之助

— 木崎愛吉旧蔵「坂本剛毅碑」拓本の意義 —

松永 友和

はじめに

関西大学博物館所蔵の本山コレクション金石文拓本（日本の部）の点数は、二〇〇一点に及ぶ。この拓本コレクションは、新聞記者・金石文研究家・近世文学研究家の木崎愛吉（一八六五～一九四四）がもともと収集したもので、のちに大阪毎日新聞社五代目社長の本山彦一（一八五三～一九三三）が譲り受けたものである。ここでは、本叢書に収録されている「坂本剛毅碑」拓本（図版番号27、本書一三頁参照）をとりあげ、論じていくことにする。坂本剛毅は坂本鉉之助（一七九一～一八六〇）の私諱であり、大塩の乱を鎮圧し、さらに『咬菜秘記』を記した人物としてよく知られている¹⁾。

坂本鉉之助は、名は俊貞、字は叔幹、鼎齋、咬菜軒と号した。寛政三年に信濃国高遠藩の砲術家、坂本天山（一七四五～一八〇三）の子として生まれ、同九年に宗家にあたる大坂玉造口定番与力坂本俊現（一七五九～一八四〇）へ養子に入り、のちに定番与力家を継いだ。天保八年（一八三七）二月の大塩の乱では、幕府によって大塩勢鎮庄の第一の功績者とされた。文久二年（一八六二）、大倫寺（曹洞宗、大阪市中央区中寺町）に建立された「坂本剛毅碑」は、坂本本人と家族の墓石とともに現在も境内に残されている。

小稿では、まず「坂本剛毅碑」拓本の歴史資料としての意義を指摘する。その上で碑銘の内容を確認し、続いて碑建立の背景や木崎愛吉が抱いた坂本像について探求していく。

一 「坂本剛毅碑」拓本の意義

坂本剛毅碑銘によると、碑は文久二年（一八六二）に建立されたことがわかる。しかし、年月を経るにしたがって碑は損傷し、近年になって碑は新調されている。

つまり、建立時の碑はすでに失われているのである。

碑銘については、鎌田春雄の『近畿墓跡考』²⁾や木村敬二郎編・船越政一郎編纂校訂『稿本大阪訪碑録』³⁾、政野敦子「大塩ゆかりの史蹟を訪ねる」⁴⁾などでとりあげられ、翻刻もなされているが、各々によって若干の文字の異同がある。新しく建立された碑も、坂本鉉之助の実父俊登を俊登とするなど、一部に文字の異同が確認できる。碑の寸法についても新旧で異なっており、旧碑が、高さ一三七cm、幅六二cm、厚さ二六cm⁵⁾であったのに対して、新碑は、高さ一二七cm、幅七七cm、厚さ三三cmである。よって、現時点において、旧碑の状態を忠実に伝えるのは、「坂本剛毅碑」拓本のみということになる。拓本の歴史資料としての意義が認められる。

次に、「坂本剛毅碑」拓本がとられた年代に関して、現在、軸装された拓本にはそれを示す情報は確認できない。ただし、拓本をみると、碑銘は一文字も損傷することなく、ほぼ完全な状態で手拓されている。

もともと拓本を所蔵していた木崎愛吉は、明治後期から大正期にかけて様ざまな拓本を手拓した。「坂本剛毅碑」拓本も木崎によって、他の拓本と同様、明治・大正期に手拓されたものであろう。拓本の裏面には、「大阪市高津町／大倫寺／坂本剛毅碑／（大塩乱ノ勇士）」と記されており、おそらく木崎が認めたものと考えられる。

二 坂本剛毅碑銘について

次に、碑の建立の背景を探るべく、まず碑銘に注目したい。総文字数五八六字の碑銘の内容は、坂本鉉之助の前半生、大塩の乱の状況、坂本の後半生、碑銘の四つに分類できる。さらに細かく分けると次の九つに分けられる。①坂本鉉之助の諱や字、坂本家の先祖について、②実父天山や養父俊現について、③大塩の乱における大坂三郷の状況、④大塩の乱鎮庄のときの様子、⑤鎮庄の褒賞について、⑥坂本鉉之助の人となり、⑦臨終について、⑧鉉之助の家族、⑨碑作成の経緯について、である。坂本の前半生については①②、大塩の乱の状況については③④⑤、後半生が⑥⑦⑧、碑銘が⑨に、それぞれ相当する。銘文の要約を記すと以下のようになる。

【前半生】

- ①坂本鉉之助の諱は俊貞、字は叔幹、号は鼎齋、通称鉉之助といった。先祖は佐々木氏、近江坂本に知行をもったことから姓を坂本に改める。
- ②亡き父坂本天山の諱は俊貞、伯壽と号した。天山は荻野流砲術家で高遠藩士。亡き母は吉田氏で、鉉之助を信州において生んだ。その後、坂本鉉之助は大坂定番玉造口与力坂本俊現の後を継いだ。

【大塩の乱の状況】

- ③天保七年の大塩の乱によつて、大坂三郷は荒廢し出火した。市中は混乱し、逃げ惑う人びとでごった返す。火は三日間燃え、それによつて多くの人びとが困窮に陥り、惨憺たる状況であつた。
- ④坂本は大坂定番遠藤但馬守統胤（三上藩主）の命をうけ、鉄砲を持つて同心とともに応戦した。淡路町で大塩勢に遭遇し、坂本は紙店に隠れ、そこから狙いを定める。大塩勢が放つた鉄砲弾は陣笠にかすつたが坂本は気づかない。坂本が放つた弾は命中し、その後、坂本が激しく追いかけて、大塩勢は四散した。それによつて大塩勢は総崩れとなつた。その後、市中は落ち着きを取り戻し、商家は営業を再開した。これは坂本の賜物である。後に賊酋は誅伐された。
- ⑤翌年秋、坂本は（陪臣から）直参に拔擢された。さらに白金百枚、大砲一門を賜り、（定番与力から）大坂鉄砲方となつた。在坂の鉄砲方は、坂本がはじめである。のち屋敷を桃谷に賜り、下僚一〇人がつけられた。このような特別な待遇は他に例がない。

【後半生】

- ⑥坂本の人となりは端剛沈毅、忠直勤儉。書を読むことを喜とした。厚く宋学（朱子学）を尊び異端を排した。
- ⑦万延元年九月二四日の早朝、鉄砲稽古場でたおれ亡くなつた。七〇歳であつた。私的に剛毅と諡号し、大倫寺に葬られた。
- ⑧坂本は、森山氏の女を娶り、一男七女をもうけた。しかし長男と長女はともに夭折。他の兄弟は他家に嫁いたが、末女のみ嫁いでなかつた。坂本に継嗣がなかつたため、大坂大番の高橋氏の子（貞方）を養子として迎え入れて、六女と結婚。貞方は大坂鉄砲方を継いだ。

【碑銘】

- ⑨大坂町奉行久須美佐渡守祐雋が、坂本の功德を嘉賞して、「丁酉の偉蹟」を子孫に伝えるため、並河寒泉（鳳来）に命じて撰文させ、碑を建立した。
- 碑銘中の「丁酉の偉蹟」は、大塩の乱鎮圧を指す。この坂本鉉之助の生涯が刻まれた碑銘からは、大塩の乱が坂本にとつて、いかに人生最大の画期となつたかが伝わってくる。

三 「坂本剛毅碑」建立の背景

幕末になると、坂本は「浪華三傑」の一人に数えられる。⁶「坂本剛毅碑」建立の直接的契機となつた大坂西町奉行久須美祐雋（一七九六〜一八六三）は、自身が記した『在阪漫録』において、坂本が「浪華三傑」の一人になつた経緯を、次のように記している。⁷

○天保之頃より安政の初に至て、浪花の三傑（欄外「坂府三傑」と称して土地のもの殊の外に賞讃し、江戸にても其風聞ありし人物は第一予が組の西ノ奉与力内山彦次郎、次に三町人の内尼崎又右衛門^三に改む^二次に惣年寄^三内薩摩屋仁兵衛の三人を云。此三人はいずれも格別二用立人物なり。仁兵衛事は予が当任二移りし安政二卯年に入坂せし頃は八十余の老翁なりしが、翌辰年に歿しぬ。其後ハ阪本鉉之助を加えて三傑と称しぬ。

続けて久須美は、坂本との出会いについて、大塩の乱後、坂本が江戸の久須美宅を訪れて、はじめて知る人となり、その後、大坂に赴任した久須美と坂本は懇意となり、月に二、三回は会つてゐる、と記している。

一方、碑銘を撰文した並河寒泉との関係はどのようであつたか。並河寒泉（一七九七〜一八七九）は、名を朋来あるいは鳳来、字は亭先、通称復一といった。懷徳堂最後の教授として幕末期の懷徳堂の経営・維持に努めた人物として知られている。

大塩の乱鎮圧の功績によつて、坂本は身分取立を受け、大坂鉄砲方に就任するが、それによつて日常的な交際相手も変わるようになる。坂本は大坂代官竹垣直道らと肩をならべ、竹垣らが行う「逸史講」に参加するようになる。⁸そのときの講師が並河寒泉であつた。つまり、並河寒泉は懷徳堂教授として出講した際に、学芸交流を通じて、坂本と日常的な関係をもつようになったのである。

さらに、久須美と寒泉も親しい間柄であつたらしく、久須美が大坂を離れる二日前、寒泉らを招いて別れの宴を行い、互いに離別・送別の詩も詠んでいる。

このように、坂本鉉之助を中心に、碑建立に関わつた人間関係が浮かびあがってくる。すなわち、「坂本剛毅碑」建立には、大坂鉄砲方坂本鉉之助と大坂町奉行久須美祐雋、懷徳堂教授並河寒泉の三者の密接な関係が背景にあつたのである。

四 木崎愛吉が抱いた大塩の乱「勇士」像

次に、「坂本剛毅碑」拓本の裏面に記されている添書について述べることにする。先述したように、拓本の裏面には、「大阪市高津町／大倫寺／坂本剛毅碑／大塩乱ノ勇士」とあり、木崎愛吉が記したものと考えられる。この裏書からは、木崎が坂本に対して、大塩の乱「勇士」と認識していたことを窺い知ることができる。実は木崎以外に、坂本のことを大塩の乱の「勇士」と呼んだ人物がいる。それは、明治三四年に大阪市史編纂主任として来阪した幸田成友（一八七三—一九五四）である。¹⁰ 幸田は明治四三年刊行の『大鹽平八郎』のなかで、坂本について、「鉉之助は玉造口与力で、かねて平八郎と文墨の交があり、しかも淡路町の一戦では大塩党の浪士を銃殺した一勇士」と紹介している。¹¹

おそらく、木崎は幸田の著書『大鹽平八郎』を読んで、「坂本剛毅碑」拓本の裏に「大塩乱ノ勇士」と記したのではなからうか。事実、木崎は、大阪朝日新聞記者時代に、幸田の『大鹽平八郎』を次のように紹介している。¹²

●「大鹽平八郎」畏友幸田成友君が『大鹽平八郎』を書きますが何か材料が欲しい、大塩の手紙をお持ちのやうですから拝借に來ましたと、昨年の夏の末浴衣がけのま、一夕訪問された折、つまらぬものながら本書の附録に転載されてある一通を差上げ、同時に拙稿「手紙の猪飼敬所」の中から大塩関係の分を御目に掛けたところ、大喜びで抄写して歸られたのが、アチコチに用立つてあるのも嬉しい、「平八郎に関する新事実の発見は向後恐らくは此方面にあらうと考へる」と本書の末尾に記されてある通り、紛々として一つも取留めのなかつた大鹽平八郎の公的私的兩方面の史実は、本書の発行により今後手紙の上から研究を積みて的確に赴くであらう

本書成功の要素はその材を大塩の私友にして公敵たりし阪本鉉之助の『咬菜

秘記』や、その他これまで広く読まれておなかつた公文書類の方面、乃至墓しらべの結果に採りしに由るは申す迄もなく、著者が久しく市史編纂の事業に主任として、在阪中に取扱はれたさまざまの文書眼より得來つた貴重土台の上に築かれてある丈け個人としての真面目は更なり、大塩騒動としての真相が明々白地にさらけ出されてあるのは痛快である

木崎は、幸田のことを「畏友」と呼んでいる。このことから、両者はある程度、親密な関係であつたことがわかる。

幸田は、明治三八年に発表した「南勢紀行——山室山と林崎宮崎兩文庫」¹³の冒頭で、「職業年齢の差別こそあれ、読書探古の樂を解する同志八名」と南勢を訪れたことを記している。その紀行文の末尾に、「一行は木崎好尚君、濱眞砂君、水落露石君、永田有翠君、小山田松翠君、打越丁戌君、京都小山巨杜君及び予の八名なり」とあり、同行した人名を書き記している。このことから、木崎と幸田の関係は、少なくとも明治三八年にさかのぼる。

大阪朝日新聞の記事の前半では、一昨年の夏、——『大鹽平八郎』の刊行が明治四三年であるから明治四二年を指す——木崎が幸田に史料提供をした旨が記されている。後半では、著書『大鹽平八郎』成功の要素は、坂本鉉之助の『咬菜秘記』や新史料の使用、「墓しらべ」の結果に因るとした上で、大塩の乱の真相が明白になつたのは「痛快である」と述べている。さらに記事の末尾では、

一月八日の夜、社の夜勤を済ませて帰宅したのは九日の午前一時、帰つて見ると本書が郵送されてゐる、故人に遇ふやうな気がして一気に読み畢り、明けての朝卒業の記念に、取敢ずこれだけの事を書いて『大鹽平八郎』をまだ見ぬ人々に紹介して置く（好尚）

と結んでいる。この記事は、明治四三年一月一日付のものであるから、記事が出される三日前の夜に、木崎は幸田から著書を贈られたことになる。夜勤の後、帰宅は日付が変わっていたが、木崎は幸田の著書を「故人に遇ふ」ような気分が、一気に読んだとある。この記事を木崎が記したことは、記事の最後に木崎の号「好尚」とあることから明らかである。木崎は「卒業の記念」に幸田の『大鹽平八郎』をまだ見ぬ人々に紹介して置く」と述べており、あるいは記者としての最後の仕事として、幸田の『大鹽平八郎』を紹介したのかも知れない。

おわりに

最後に、木崎愛吉の論考にみられる坂本鉉之助について触れておきたい。木崎は、大正九年（一九二〇）八月に、論考「猪飼敬所の観た『大塩騒動』」（『日本及日本人』七八八、政教社）を発表した。この論考は、猪飼敬所の書簡をもとに、大塩の乱の状況を談話体で紹介したもので、木崎はその末尾において、坂本鉉之助を登場させている。

坂本鉉之助は、其（大塩の乱鎮圧：筆者注）働きて、加番の遠藤侯から、当座の褒美に御家伝来の銘刀を賜はり、委細関東へ申し上げられたが、いづれ何とか沙汰のあることだらう。何はともあれ大塩騒動は、誠に天下大乱の発端ちやあるまいか。

ここからも木崎が、坂本鉉之助を意識していたことがわかる。木崎は自身の学問的関心から、「坂本剛毅碑」を手拓したのであろう。

木崎は金石文研究の他に、頼山陽、篠崎小竹、田能村竹田など、江戸時代的人物に注目した研究を行っている¹⁴。木崎は、頼山陽の研究を行う契機について、次のように記している¹⁵。

私の先師五十川初堂先生が山陽門下の関藤藤陰に学ばれ、更に先生の令姉が同門江木鱒水の夫人であり、又同じく森田節斎・塩谷岩陰等頼門諸子に従遊されたといふ関係から、いつとはなしに山陽その人に就て、私淑といふではないが、何となく景慕の情に堪へられなかつた

つまり、頼山陽—関藤藤陰—五十川初堂—木崎愛吉という学問上の師弟関係があり、それが木崎を頼山陽研究に向かわせたのである。頼山陽と同時代を生きた人物には、坂本鉉之助や大塩平八郎¹⁶がおり、彼らは木崎にとつて、特別な存在であつたと考えられる。

注

(1) 坂本鉉之助に関する近年の研究は、川崎謙司「大坂定番与力家の成立と推移—坂本鉉之助を中心に—」（『大阪の歴史』六四、二〇〇四年）、拙稿「大塩の乱後の坂本鉉之助について—〈武〉〈知〉〈家〉の視点から—」（大塩事件研究会編『大塩平八郎の総合研究』和泉書院、近刊予定）がある。

(2) 鎌田春雄『近畿幕跡考』（大鑑閣、一九二二年）。

(3) 木村敬二郎編・船越政二郎編纂校訂『浪速叢書第十 稿本大阪訪碑録』（浪速叢書刊行会、一九二九年）。

(4) 政野敦子「大塩ゆかりの史蹟を訪ねる—上町台地の寺々—（1）」（『大塩研究』一七、一九八四年）。

(5) 政野敦子注（4）論文三九頁。

(6) 藪田貫「内山彦次郎—大坂町奉行所与力の生涯—」（『近世大坂地域の史的研究』、清文堂出版、二〇〇五年）参照。

(7) 久須美祐雋『在阪漫録』（森銑三・野間光辰・中村幸彦・朝倉治彦編『随筆百花苑 第一四巻』、中央公論社、一九八二年）三一—一頁。

(8) 松本望「逸史」の講釈について（藪田貫編、松本望・内海寧子校訂『なにわ・大阪文化遺産学叢書2 大坂代官竹垣直道日記（一）』、二〇〇七年）参照。

(9) 多治比郁夫「在阪漫録 解題」（森銑三・野間光辰・中村幸彦・朝倉治彦編『随筆百花苑 第一四巻』、中央公論社、一九八二年）四三四頁。

(10) 幸田成友については、西垣清次「幸田成友」（今谷明・大濱徹也・尾形勇・樺山紘一編『20世紀の歴史家たち（1）』日本編 上、刀水書房、一九九七年）参照。

(11) 幸田成友『大鹽平八郎』（東亜堂書房、一九二〇年）四頁。

(12) 大阪朝日新聞、明治四三年一月一日付の記事。なお、明治期の大塩事件に関する新聞記事については、久保在久「明治期の新聞記事にみる大塩事件」（『大塩研究』四、一九七七年）を参照。

(13) 幸田成友「南勢紀行—山室山と林崎宮崎兩文庫」（『新小説』第一〇巻第一〇号、のち『幸田成友著作集』第七巻、に収録）。

(14) 例えば、『家庭の頼山陽』（金港堂書籍、一九〇五年）、『頼山陽と其母』（一九二一年）、『井原西鶴の研究』（たるまや書店、一九二三年）、『篠崎小竹』（玉樹香文房、一九二四年）、『田能村竹田全書』（帝國地方行政学会、一九三四・三六年）など。

(15) 木崎愛吉「稿後雑筆」（徳富蘇峰・木崎愛吉・光吉元次郎編『頼山陽書翰集』下巻、民友社、一九二七年）一頁。

(16) 頼山陽と大塩平八郎との関係については、相蘇一弘「大塩平八郎と頼山陽—文政十三年『日本外史』の譲渡を巡って—」（『大阪歴史博物館研究紀要』一、二〇〇二年）参照。

付記

小稿は、二〇〇七年六月二八日、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター歴史資料遺産研究プロジェクト研究会での松永報告「大坂鉄砲方坂本鉉之助とその墓碑」の一部を加筆修正したものである。

拓本解説

【一般碑石】

1 宇治橋断碑 (A111) 一紙

大化二年(六四六)、寛政五年(一七九三)復元
京都府宇治市宇治東内にある橋寺放生院の境内に建てられている碑。寛政元年(一七八九)に幕吏某が橋寺の納屋蔵付近で断碑の上部三分の一を見つけたという。断碑は六朝風の書体で、三行二七字を刻む。寛政五年に尾張の人小林亮適らによって下部三分の二が復元された。重要文化財。本拓本は復元の最下部三行一八字を採拓したもので、縦二七・六cm、横二四・三cm。

碑文の全文を伝える『帝王編年記』によると、山尻の恵満の家から出た僧道登が、宇治川を渡るのに難渋する人畜を濟うため、大化二年に橋を構立したという。道登は『日本書紀』大化元年八月条に衆僧を教導する十師の一人として見え、白雉元年(六五〇)二月条では祥瑞としての白雉の由来を諮問されて、高句麗における白鹿や白雀の故事を答えている。『日本霊異記』上巻一二縁には「高麗学生道登は元興寺沙門なり」とある。『続日本紀』文武四年(七〇〇)三月条に道昭が宇治橋を創造したとあることから、道登と道昭のどちらが宇治橋を創建したとみるべきか議論があるが、大化二年に道登が架橋し、その後、天武朝の末年(六八六)前後に道昭が架橋したとみるのが穏当であろう。

〔拓本銘文〕

至今莫知杭竿

此橋濟度人畜

空中導其苦縁

〔朱印〕

〔好尚所蔵金石〕

〔参考文献〕

木崎愛吉編『大日本金石史』第二卷(歴史図書社、一九七二年)、藪田嘉一郎『日

本上代金石叢考』(河原書店、一九四九年)、守屋茂「宇治橋の紀功碑と道登・道昭」(『史迹と美術』四二一七、一九七二年)、寺西貞弘「宇治橋架橋をめぐる問題」(横田健一編『日本書紀研究』一三、一九八五年)、和田萃「道昭と宇治橋」(『藤井寺市史紀要』一一、一九九〇年)、田中嗣人「元興寺の僧道昭宇治橋を架けるか」(『華頂博物館学研究』二、一九九五年)

2 近江超明寺養老元年石柱 (A116) 一紙

養老元年(七一七)

滋賀県大津市月輪の超明寺本堂に木製の箱に納め奉安されている。大萱新田の開発に伴う貯水池工事により延宝四年(一六七六)四月に発見されたと伝えられる。出土地は、超明寺の東南約1kmにある月輪大池。石柱が納められている箱の蓋裏の墨書には、天保三年(一八三三)、発見者の子孫により寺へ寄進されたことが記される。

石柱は、長さ約四一・〇cm、幅約一八・五cm、厚さ約一四・二cmの小型で、水成岩様の堅い岩石よりできている。頭部を圭頭状に整形し、銘文の四周には古代朝鮮の碑に特徴的な枠線が刻入される。

拓本の寸法は、縦四八・〇cm、横二五・〇cm。銘文には、養老元年一〇月一〇日ちゅうみょうねんに超明僧ちゅうみょうぼうしによって石柱が立てられた旨が記される。木崎愛吉の『大日本金石史』は、古代の遺物であるとの断定を避けたが、近年、東野治之氏により古代の碑として再評価された。

〔拓本銘文〕

養老元年十月十日石柱

立 超明僧

〔朱印〕

〔好尚所拓〕、「好尚所蔵金石」

〔添書〕

〔近江大萱新田超明寺／大正元年八月廿九日晚間手拓〕

〔朱書〕
〔第百八拾四號〕

〔参考文献〕

木崎愛吉編『大日本金石史』第一卷（歴史図書社、一九七二年）、東野治之「滋賀県超明寺の『養老元年』碑」（『日本古代金石文の研究』岩波書店、二〇〇四年）

3 上野国下賛郷神龜三年碑（A一七七）一紙

神龜三年（七二二）

高崎市山名町字金井の丘陵中腹南斜面に建てられているが、発見の経緯は定かではない。金井沢碑とも称され、山上碑・多胡碑と合わせて、「上野三碑」と通称されている。昭和二九年（一九五四）、国指定特別史跡となる。碑石は輝石安山岩の自然石で、高さ約一一〇cm、幅約七〇cm、厚さ約六五cm。台石の上部に穿たれた穴に嵌めこまれている。比較的平坦な面に九行一二字の銘文がある。書体は楷書体、丸彫りで風化が進み、判読困難な部分もある。拓本は、縦七一・五cm、横六〇・七cm。拓影は、縦六九・〇cm、横四九・三cm。銘文は、上野国群馬郡下賛郷高田里にある三家（屯倉）の管理者であった子孫の一族九名が、祖先供養のため、仏教による縁を結び神仏に誓願したことを記している。子□を子孫と読んできた通説に対して、願主の人名ではないかとする説もある。

〔拓本銘文〕

上野国群馬郡下賛郷高田里

三家子□為七世父母現在父母

現在侍家刀自池田君目頼刀自又児加

那刀自孫物部君午足次駟刀自次乙駟

刀自合六口又知識所結人三家毛人

次知万呂鍛師磯マ君身麻呂三口

如是知識結而天地誓願仕奉

石文

神龜三年丙寅二月廿九日

〔朱印〕

〔好尚所蔵金石〕

〔添書〕

「上毛下賛郡碑神龜三年丙寅二月廿九日 大正元年十月廿一日／在神太田孝

太郎君／所贈」〔朱書〕番外五十九

〔参考文献〕

木崎愛吉編『大日本金石史』第一卷（歴史図書社、一九七二年）、『群馬県史』資料編四（群馬県、一九八五年）、平野邦雄監修・あたらしい古代史の会編『東国石文の古代史』（吉川弘文館、一九九九年）

4 上毛山名村碑（A一七八）一紙

天武十年（六八二）

高崎市山名町字山神谷の丘陵南面の上縁近くの平坦地にあり、碑の東側の山上古墳と密接な関係があるとする見解が定説となっている。昭和二九年（一九五四）、国指定特別史跡となる。山上碑銘とも称され、多胡碑・金井沢碑と合わせて「上野三碑」と通称される。碑石は、輝石安山石の自然石で高さ約一一一cm、幅約四七cm、厚さ約五二cm。自然石の台石に穿たれた穴に嵌めこまれている。銘文は四行五三字、楷書体丸彫であるが、風化が進み、不鮮明な部分もある。拓本は、縦九二・〇cm、横四一・〇cm（拓影は縦八六・〇cm、横三九・〇cm）。

銘文には、佐野の三家（屯倉）の管理者であった健守命の孫の黒売刀自と新川臣の児、斯多多弥足尼の孫の大児臣との間に生まれた僧の長利が、母の為に記したとある。木崎愛吉の『大日本金石史』は、辛巳歳を天平一三年（七四一）と推定したが、銘文の表記形式、内容からみて天武一〇年（六八一）にあてる説が、今日の通説となっている。

〔拓本銘文〕

辛巳歳集月三日記

佐野三家定賜健守命孫黒賣刀自此

新川臣児斯多、弥足尼孫大児臣娶生児

長利僧母為記定文也 放光寺僧

〔朱印〕

〔好尚所蔵金石〕

〔添書〕

「大正五年一月六日到／山名上碑原拓／大正四年十一月廿七日打搨／上毛郷

土史研究会（角印「上毛郷土史研究会印」）、^{〔朱書〕}「第三百五拾貳號」

〔参考文献〕

木崎愛吉編『大日本金石史』第一卷（歴史図書社、一九七二年）、『群馬県史』資料編四（群馬県、一九八五年）、平野邦雄監修・あたらしい古代史の会編『東国石文の古代史』（吉川弘文館、一九九九年）

5 八幡古碑（A一―一三）一紙

正安二年（一二七三）

石清水八幡宮山麓の市場町にあった石碑。正安二年八月の銘をもち、「市遊無常講」と記されている。拓本は縦四二・五cm、横二五・〇cm。嘉永元年（一八四八）の『男山考古録』巻二三、市場町に「志水町薬師堂前に古石碑あり、へ旧は此碑南山西車塚に建たりと、銘無常講に市庭と冠らせ書、へ正安二年八月云々あり、此市場也」とあるので、もとは男山南麓の西車塚古墳内に立っていたが、志水町薬師堂前に移されたようである。石清水八幡宮では山麓境内の宿院河原に康平六年（一〇六三）にはじめて午市が立てられ、放生川東岸に市庭が形成されていた（『石清水叢書』五）。嘉禄三年（一二二七）には市庭に新在家五宇が作られている（『石清水皇年代記』上）。

〔拓本銘文〕

市遊無常講

正安貳年八月

〔朱印〕

「好尚所藏金石」

〔添書〕

「八幡古碑」、^{〔朱書〕}「第參百貳拾號」

〔参考文献〕

石清水八幡宮史料叢書一『男山考古録』（続群書類従完成会、一九六〇年）、田良島哲「中世の寺社境内と市庭―石清水八幡宮の事例から―」（『史潮』一七、一九八五年）

6 中村歌右衛門（三世）墓碑（A一―二八）一紙

文政七年（二二四）

歌舞伎役者三世中村歌右衛門（一七七八―一八三八）の墓碑は、文政七年（二二四）に正法寺（現大阪市中央区中寺町）に建立された。正法寺は、山号を本覚山といい、日蓮宗本法寺の末寺である。墓碑は、歌右衛門自身が生前に境内の開山堂（日親堂）に向けて建てたものである。これは歌右衛門の出生が、父・初世歌右衛門の日親上人への立願によるため、父と同じく自らも熱心な法華信仰者となり、死後も日親上人へ感謝のお詣りを願ったことに由来する。墓碑は現在も境内にある。墓碑の正面には歌右衛門と妻の法名が、右側面には歌右衛門と妻の没年が、左側面には歌右衛門の辞世の句が、背面には銘文が刻まれている。

拓本は、正面と背面を手拓した二枚が一紙に貼り付けられている。寸法は、縦九四・五cm、横四七・七cm。背面の銘文により、墓碑は建立前年に営まれた父の三三回忌に因むものであることが判明する。建立にあたり、当時の住職日蓮上人が関わっていたこともわかる。墓碑では判読困難な文字もあり、それだけに当拓本の存在は貴重である。拓本の裏書には「初代中村歌右工門碑」とあるが、実際には三世歌右衛門の墓碑である。

大坂の名優・三世歌右衛門は、初世の実子。屋号加賀屋、俳名は梅玉。幼名は加賀屋福之助といった。寛政三年（一七九二）に歌右衛門を襲名。一時、中村芝翫を名乗ったが、後年、歌右衛門さらに中村玉助と改名。小柄でしゃがれた声だったが、工夫に富んだ芸で人気を博した。

〔拓本銘文〕

〔正面〕

歌唄院宗讚日徳信士

〔背面〕

中村歌右衛門諱宗讚綽號芝翫其父歌七加賀人嘗仕食禄

性嗜優戯遂来大坂以優戯為業頗得名譽常崇 三寶信妙

法年六十憂無嗣子乃祈于吾 開祖生芝翫父母甚鐘愛之

既成童乃教以優戯穎敏卓悟優戯^{〔朱書〕}進有青藍之譽年十四

不幸喪其父事母孝既而襲父業一時以為魁矣受藝術者幾

百人矣據附之為生産者亦甚衆矣文政癸未十月值父三年之忌乃營冥福今茲新建壽藏碑予舉其槩略以識于碑陰

維時文政七年甲申四月 本覺山現住日遵

〔裏書〕

「大阪市東区高津中吉町正法寺初代中村歌石工門碑」

〔参考文献〕

日蓮聖人第七百遠忌報恩奉行実行委員会編『日蓮大聖人とともに』（日蓮宗大阪市宗務所、一九八〇年）、服部幸雄・富田鉄之助・広末保編『新訂増補歌舞伎事典』（平凡社、二〇〇〇年）

7 高野山慈尊院道 四里石（A二一六二）一紙

弘安元年（二二七八）

弘仁七年（八一六）、弘法大師空海によって開かれた高野山には、山麓の慈尊院（和歌山県伊都郡九度山町）から奥の院までの間に「町石卒塔婆」といわれる道標がある。「寛治二年白河上皇高野行幸記」によれば、木製の卒塔婆が道中に立てられていたというが、その後、木製卒塔婆は朽ち、それを嘆いた高野山遍照光院の覚敷は、文永二年（一二六五）、参詣者の道標とするとともに、後嵯峨上皇の宝祚長延と將軍をはじめ十方施主の二世快樂と天下泰平を祈願して、石製の道標を建立することを発願した。覚敷の発願に対し、上皇をはじめ、北条時宗・安達泰盛ら鎌倉幕府の有力者らが石製卒塔婆を寄進し、弘安八年（二二八五）に完成した。町石は一町（一〇九m）ごとに建てられ、高野山の壇上伽藍までの距離や奥の院までの距離を表している。町石のほかに、慈尊院からの距離を示す里石があり、壇上伽藍まで三六町ごとに一基が建立された。町石が続く参詣道は、平成一六年（二〇〇四）に「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として世界文化遺産に登録されている。なお、四里石は、平成一七年九月の台風一四号によって倒壊している。

拓本は一紙で、縦一三一・五cm、横三四・八cmである。四里石には、正面と左右二面に文字が刻されているが、拓本はそのうちの右側面のものである。銘文にあ

る「祖父秋田城介藤原義景」は、安達義景のことである。評定衆として鎌倉幕府に参画し、執権北条時頼の時代には、執権の外戚として幕政を主導した。宝治元年（一二四七）の三浦氏の乱（宝治合戦）で、三浦氏を討滅した後は、比肩する者なきまでの権勢を誇った。建長五年（一二五三）五月に病のため出家して高野山に入り、六月に没した。四里石正面には「藤原長宗」とあり、義景の孫長宗が、祖父のためにこの里石を建立したことがわかる。

『大日本金石史』には、「紀伊高野山町石・里石」として一八点の翻刻が収められているが、四里石については、正面と左側面のみで、この拓本にあたる右側面は載せられていない。

〔拓本銘文〕

為祖父秋田城介藤原義景

〔参考文献〕

愛甲昇寛『高野山町石の研究』（密教文化研究所、一九七三年）、松山健『紀伊山地の霊場と参詣道 高野山町石道 語り部の小箱』（二〇〇五年）

【顕功頌徳碑】

8 嘉暦三年碑（A二一一〇）一紙

嘉暦三年（二二二八）

兵庫県宝塚市波豆^{はず}の八幡神社隣接墓地に現存する。もとは、大正初年に千刈水源地造築の際に水没した廃金（今）福寺境内に造立されていた。地元産の石英粗面岩、いわゆる波豆石を用い、細長く尖った自然石の全面を平らかに削る、地上高約四mに及ぶ長大なもの。本拓本にはみえないが、拓影上部にあたる部分に、金剛界大日・胎藏界大日・阿弥陀の三尊種子を刻み、以下の空間に「為二親法界衆生／嘉暦三年^辰初秋上旬／願主妙信合力衆等」の銘文を配す。銘文の内容は、慈父悲母と三界万霊の菩提を願って、旧暦七月上旬に、願主の妙信と合力衆がこの板碑を造立するというものである。鎌倉・南北朝時代の板碑には、この嘉暦三年碑のように正面中央に弥陀三尊種子を配したものが圧倒的に多く、造立した人々の信仰が、真言密教と弥陀念仏の習合形態、つまり真言念仏におかれていた

ことを示していると考えられる。

また、波豆の地名は川辺郡内でも独自のものであって、古代における品部・雑戸の一種である羽束や泥部等の技術者がこの地に集住したことによると思われる。羽束（ハツカ）は武器製造に携わった工人であり、また、泥部（ハツカシベ）はハニ（泥）・ツカシ（築）の約で、土作りや造瓦、石灰を取り扱うことを職掌としたことに由来するものである。

拓本は、縦一七・〇cm、横七〇・〇cm。拓影は、縦一〇七・五cm、横二四・八cm。下方部は墨付が薄く、文字の明らかでない部分が多い。

〔拓本銘文〕

為二親法界〔朱書〕

嘉曆三年 戊辰初

願主妙信合

〔朱印〕

〔好尚所拓〕、「好尚所蔵金石」

〔添書〕

「大正二年六月二日／川辺郡波豆／廢今福寺」、「第〔朱書〕三百六十號」

〔参考文献〕

宝塚市文化財調査報告第四集『宝塚市の中世石造美術』（宝塚市教育委員会、一九七一年）、『宝塚市史』第二卷（宝塚市、一九七六年）、『兵庫県史』第二卷（兵庫県、一九九三年）

9 陸奥多福院吉野先帝供養碑（A二一一一）一紙

延元四年（一三三九）

宮城県石巻市吉野町に所在する多福院の本殿裏にあり、全国で唯一の天皇菩提碑といわれている。曹洞宗、山号は日輪山。室町時代前期の作といわれる木造の秘仏、大日如来座像が大日堂に祀られるほか、石巻市指定文化財第一号である板碑群がある。陸奥多福院吉野先帝供養碑は延元四年（暦応二年・一三三九）八月、後醍醐天皇が吉野で死去し、その菩提を弔うために湊の領主であった淵辺一族を

はじめ、南朝方の武士らが建立した供養碑であると伝えられている。

拓本は、縦六九・〇cm、横三二・〇cm。多福院の供養碑（縦一五〇cm、横七〇cm）と比べると大きさが異なるため、銘文のみを採拓したのと考えられる。銘文の左右の書体が異なることから、「延元四年己卯〔籀〕月廿四日〔歌〕白」の部分に刻まれた碑が立てられ、のちにこの碑を吉野先帝の供養碑とするため、「奉為」と吉野先帝〔御菩提也〕「」の部分に書き足されたものではないかと考えられている。

〔拓本銘文〕

吉野先帝〔御菩提也〕

奉為

延元四年〔籀〕己卯月廿四日〔歌〕白

〔朱印〕

〔好尚所蔵金石〕

〔添書〕

「陸奥石巻多福院 辛亥四月十六日 奥村良次郎君所贈」、「第〔朱書〕百四拾五號」

〔参考文献〕

石巻市史編纂委員会編『石巻の歴史』第二卷・第八卷（石巻市、一九九二年）

10 原田法華寺法華経碑（A二一二五）三紙

永禄二〇年（一五六七）

大阪府豊中市曾根西町二丁目（かつての原田村）の法華寺の境内に所在する板状石碑。現在は墓地の中央に西面して立つ。花崗岩製で頂部両端を隅丸に加工する。碑面はやや前方に傾斜する。縦約一〇七cm、横は上部で約二五cm、下部で約四三cm、厚さ約三〇cm。別石の四角形基礎上に据えられている。

拓本は縦九〇・〇cm、横四四・五cmの大判一紙（上部不定形）、縦六一・〇cm、横一五・八cmの小判二紙からなる。大判は碑石正面の拓影で、中央上部に「南無妙法蓮華経」の題目、その下に「日蓮太上人」、その左右に「日朗」「日像」以下各四人の僧名を刻む。小判の一つは右側面の拓影で「撰州原本妙寺 日〔音カ〕」、いま一つは左側面の拓影で「永禄十丁卯八月二十日」と刻む。永禄一〇年に「原（原

田か)「本妙寺の日（音九）□が造立したものである。妙顕寺の日像・大覚(妙美)・朗源から本妙寺の日霽をへて立本寺の日実以下に至る歴世の僧名が記されており、当時の北摂に法華宗の本山寺院の一つである京都立本寺の影響力が及んでいたことを示す資料といえる。

原田村法華寺は、大坂城代となった阿部備中守正次(武蔵国岩槻藩)の家臣近藤五郎左衛門らが寛永一二年(一六三五)に日雄を開基として創建した寺院で、本碑がここに所在する理由は不詳である。

〔拓本銘文〕

(右側面) 摂州原本妙寺 日（音九）□

(正面) 日諦

日霽

大覚

日朗

南無妙法蓮華經 日蓮太上人

日像

朗源

日實

日俊

(左側面) 永禄十丁卯八月二十日

〔朱印〕(中央・左右両側面とも)

「好尚手拓金石」

〔添書〕

(右側面)

「文云攝州原本妙寺日□」、「右側面」

(正面)

「高三尺五寸強／潤一尺三寸／厚」

「大正戊午春季皇靈祭前一日／豊能郡東豊嶋村／原田法華寺」

□□／日霽／大覚／日朗／日蓮太上人／日像／□源／日實／日俊

〔朱書〕

〔番外七〕

(左側面)

「文云永禄十丁卯八月二十日」、「左側面」

〔参考文献〕

天岸正男・奥村隆彦『大阪金石志―石造美術』(三重県郷土資料刊行会、一九七三年)、影山堯雄「京都に於ける日蓮教団寺院」(『大崎学報』一一二、一九六〇年)、『日蓮教団全史』上(平楽寺書店、一九七三年)

11 島津義弘建立高麗陣敵味方戦没者供養碑(A二一三四)一紙

慶長四年(一五九九)

島津義弘建立高麗陣敵味方戦没者供養碑は、慶長四年(一五九九)に高野山奥の院の島津家兆域に建てられた。この碑文は、薩摩の戦国大名島津義弘・忠恒(のち家久)親子が慶長の役(一五九六―一五九八)における敵・味方の戦没者の霊を供養するために建立したもので、その内容は、博愛精神の発露として知られ、和歌山県指定文化財に指定されている。

拓本は縦二一・〇cm、横六四・五cm。慶長の役は、慶長二年(一五九七)八月、朝鮮南四道を実力で奪うことを目的に、全羅道南原城(全羅・慶尚両道の要衝)において開戦。明軍数千人を討ち取り陥落させて明副総兵楊元は敗走、全羅兵使李福男・助防将金敬老らを戦死させている。

また碑文には、「同十月朔日於慶尚衛泗川表大明人八萬余兵撃亡畢」と銘されているが、これは翌三年一〇月における泗川新寨の攻防のことをさす。董一元率いる明・高麗連合軍数万が泗川に押し寄せるが、義弘の策略により、連合軍の首級三万八千余を挙げてた。「大明人八萬余兵撃亡畢」というのは誇張である。豊臣五奉行が忠恒に宛てた「豊臣五奉行連署御知行方目録」には、鼻の数三万八千余とあり、また島津家家臣が国元に宛てた手紙によれば、その数三万八千一四とある。これは、島津家が唐入りの際、遅陣したことや、家臣の梅北国兼が肥前国名護屋に向かう途中で一揆を起こしたことに對する汚名返上と、後世に「島津家の功名」を残すためであったと考えられる。

〔拓本銘文〕

慶長二年八月十五日於全羅道南原表大明國軍兵數千騎被

討捕之内至當手前四百廿人伐果畢

同十月朔日於慶尚衛泗川表大明人八萬余兵擊亡畢

(アーンク) ^(梵字) 爲高麗國在陣之間敵味方闕死軍兵皆令人佛道也

右於度々戰場味方士卒當弓箭刀杖被討者三千余人海墮之間

横死病死之輩具難記 薩州嶋津兵庫頭藤原朝臣義弘

慶長第四 己 亥 歲六月上澁 同子息 少將 忠恒 建之

〔参考文献〕

北島万次『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』(校倉書房、二〇〇二年)、中野等『秀吉の軍令と大陸侵攻』(吉川弘文館、二〇〇六年)

【墓誌・墓碑銘類】

12 船王後墓誌銘 (A三一―) 一紙

天智七年(六六八)

大阪府柏原市国分市場一丁目の松岡山(松岳山)の丘陵の崩れた箇所から、江戸時代に出土したと伝えられる。松岳山には、松岳山古墳をはじめとする古墳の存在は知られているものの、墓誌の詳しい出土地点などについては全く不明である。出土後は、長く河内国西琳寺に所蔵されていたが、三井高遂氏の所蔵を経て、現在は三井記念美術館に所蔵される。昭和三六年(一九六一)には国宝の指定を受けている。鍛造の銅版で、表裏にそれぞれ四行ずつ銘文を刻んでおり、火葬墓から出土した墓誌としてはわが国最古の年紀(戊辰年〓六六八年)を持つ墓誌である。

拓本は縦一六・八cm・横三一・二cm、拓影は縦二九・〇cm・横一三・九cm。後半部は破損しており判読できない。銘文には、被葬者である百済系渡来人の船王後の出自・経歴が記され、没年や埋葬の経緯についても触れられている。また、この墓誌の製作年代は戊辰年であると従来考えられてきたが、銘文に「天皇」や船氏一族の人名に闕字の礼がとられること、「官位」と表記されていることから、少なくとも、天武朝の末年以降に製作されたものとされている。

〔拓本銘文〕

惟船氏故 王後首者是船氏中祖 王智仁首見 那沛故

首之子也生於乎娑陁宮治天下 天皇之世奉仕於等由

羅宮 治天下 天皇之朝至於阿須迦宮治天下 天皇之

朝 天皇照見知其寸異仕有功勳 勅賜官位大仁品為第

三殞亡於阿須迦 天皇之末歲次辛丑十二月三日庚寅故

戊辰年十二月殞墓於松岳山上供婦 安理故能刀自

同墓其大兄刀

代之靈基牢固

(永却之寶地也)

羅古首之墓並作墓也即為安保刀

〔朱印〕

「好尚所藏金石」

〔参考文献〕

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』(同朋舎、一九七九年)、東野治之『古代の墓誌』(『日本古代金石文の研究』、岩波書店、二〇〇四年)

13 采女竹良卿墓誌銘 (A三一三) 一紙

持統三年(六八九)

大阪府南河内郡太子町(旧春日村)の形浦山より江戸時代中期以前に出土し、付近の妙見寺に置かれていたが、明治初年に所在不明となった。現在は、本拓本や静岡県立美術館小杉文庫所蔵文書中の拓本などから内容をうかがうことができる。なかでも静岡県立美術館所蔵の拓本は、昭和五八年(一九八三)に紹介され、本来は唐の開元令に定められるような圭首形の碑であったことが確認された。

拓本は縦三八・〇cm、横二一・一cm。銘文によると、持統三年(六八九)に大弁官直大貳采女竹良の墓所を明示するために作られたもので、他人は墓所にのぼって破壊したり、周辺の地を穢したりしてはならない旨が述べられている。銘文や端書に記されている「形浦山」は帷子山とも呼ばれ、現在の片原山と推定される。なお墓域の解釈については、「四千代」説と「四十代」説とがある。

采女竹良は、「竹羅」「筑羅」とも書き、天武一〇年(六八一)七月に遣新羅大使となり、同一三年一月に朝臣姓を賜り、朱鳥元年(六八六)九月の天武天皇

の殯の際、直大肆で内命婦のことを誅した。没年ははっきりしないが、持統朝に直大式となったあと、同三年までに没したと推察される。

〔拓本銘文〕

飛鳥浄原大朝廷大弁

官直大貳采女竹良卿所

請造墓所形浦山地四千

代他人莫上毀木犯穢

傍地也

己丑年十二月廿五日

〔朱印〕

「好尚所藏金石」

〔添書〕

「河内 形浦山」、〔朱書〕「第百六號」

〔参考文献〕

近江昌司「采女氏埜域碑について」(『日本歴史』四三二、一九八四年)、三谷芳幸「采女氏埜域碑考」(『東京大学日本史学研究室紀要』創刊号、一九九七年)

14 伊福吉部德足比売墓誌銘 (A三一六) 一幅

文政二年(一八一九)

安永三年(一七七四)六月、因幡国法美郡宮下村(現在の鳥取市国府町宮下)無量光寺境内の裏山から骨蔵器が発見された(現在は東京国立博物館所蔵、重要文化財)事実や、その関連事項を記した碑銘。骨蔵器は往古掘り出され、宇倍神社に保管されていたが、文政二年(一八一九)、当時の神主伊福部宿称信世が元の位置から少し離れた別の場所に埋め直し、その際にこの石碑が建てられた。銘文は国学者源長秋(衣川長秋)による。拓本は縦八六・〇cm、横一二七・四cm。

伊福吉部德足比売は文武天皇の時代に采女として仕え、慶雲四年(七〇七)二月に従七位を授かった女性である。銘文によると、和銅元年(七〇八)八月一日に没し、三年に火葬されたという。なお、骨蔵器が発見された月日については諸説あり、六月二四日とするものが当碑銘の他、『古墳碑銘雑図』(藤貞幹編、天明

五年)、『好古小録』(同、寛政七年)、『古京遺文』(狩谷掖齋編、文政元年)である。その他、『因幡志』(安部恭庵編、寛政七年)では六月二日とし、『因府年表続篇』(岡島正義、弘化三年(一八四六))では六月一三日としている。

〔拓本銘文〕

伊福吉部德足比賣臣奥墓碑

平安大宮尔天下所知食

後桃園天皇乃大御世安永三年登云年甲午

夏六月廿四日宇倍山中尔石一在乎里人乃

發見婆石二乎合弓蓋底登爲弓各圓鑿在中

尔銅壺乎藏在壺中尔波灰在其二石各長五

尺厚二尺壺之徑高共尔八寸也其蓋尔因幡

國法美郡伊福吉部德足比賣臣

藤原太宮御宇大行天皇御世慶雲四年歲次

丁未春二月廿五日從七位下被賜仕奉矣和

銅元年歲次戊申秋八月一日卒也三年庚戌

冬十月火葬即殯此處故未代君等不應崩壞

上件如前故謹録紳和銅三年十一月十三日

巳未登云文字鐫利伊福部氏者新撰姓氏録

尔尾張連同祖天火明命後也登有後宮職員

令尔其貢采女者郡少領以上姉妹及女形容

端正者皆申中務奏聞登有婆德足者法美郡

司乃姉妹尔弓蓋哉采女有氣牟宇倍神社神

主伊福部宿称爲世再藏登思慮斯乎其事終

受弓牟未泥久有祁留乎安波礼安波礼時乃

行礼婆爲世之孫信世再思發弓本乃地者良

羅儒登弓公尔願申弓有祁礼婆他良地平給

弓此度其處尔那毛再藏計留其事乃由縁乎

書誌弓與石碑建登乞氣礼婆聊書誌尔那毛

時者文政二年登云年十二月廿一日如此云

者源長秋

〔朱印〕

〔好尚所拓〕

〔参考文献〕

齊藤忠「因幡国伊福吉部徳足比売の墓について」(『仏教史研究』九、一九七五年)、
『国府町誌』(国府町、一九八七年)

15 石川年足墓誌銘 (A三一九) 一幅

天平宝字六年(七六二)

文政三年(一八二〇)に摂津国嶋上郡真上村光徳寺の荒神山(現在の大阪府高槻市月見町)で発見。個人蔵(大阪歴史博物館寄託)。国宝。墓誌は、鑄銅製の短冊状の薄板(縦二九・七cm、横一〇・四cm、厚〇・四cm、重さ八五〇g)で、全面に鍍金を施す。表面は四辺を細い界線で縁どり、唐草文を線彫し、余白に魚々子を打つ。表裏共、緑青を生じているが、表面は錆を除き、鍍金や銅肌が露われている。銘文は五本の野線を引き、六行に渡って一三〇字を鑿彫で鏤刻する。火葬墓から出土したと考えられ、共に木櫃の残片三枚と銅釘一五本が遺存する。拓本は縦二九・〇cm、横一〇・二cm(軸装全体は縦六四・五cm、横一九・八cm)。

内容は被葬者石川年足の出自・官位・死去並びに墓葬の時と場所を記し、死を悼む四言の銘を付す。年足は奈良時代の貴族官人であり、『続日本紀』によると蘇我氏直系の石川朝臣石足の長子で、出雲守・式部卿・紫微大弼・参議・中納言等を歴任した。墓誌にみえるように、淳仁天皇の天平宝字六年九月三〇日に御史大夫正三位兼行神祇伯で七五歳で京宅にて亡くなり、同一二月に「摂津国嶋上郡白髮郷酒垂山」に葬られた。荒神山は当時「酒垂山」と称されていたことがわかる。

〔拓本銘文〕

武内宿祢命子宗我石川宿祢命十世孫從三位行左大

辨石川石足朝臣長子御史大夫正三位兼行神祇伯年

足朝臣當平成宮^(御)宇天皇之世天平寶字六年歲次壬

寅九月丙子朔乙巳春秋七十有五薨于京宅以十二月

乙巳朔壬申葬于攝津國^(橋上)郡白髮郷酒垂山墓礼也

儀形百代冠蓋千年夜臺荒寂松柏含^(禮也)呼哀哉

〔朱印〕

〔好尚所蔵金石〕

〔参考文献〕

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』(同朋舎、一九七九年)、
村上弘子「奈良時代の石川朝臣氏―石川年足を中心に―」(下出積與編『日本古代史論輯』、桜楓社、一九八八年)

16 高屋枚人墓誌銘 (A三一〇) 一幅

宝龜七年(七七六)

本墓誌は延享元年(一七四四)、大阪府南河内郡太子町(旧磯長村)にある叡福寺の東方丘陵斜面から出土したとも、愛染堂付近の田圃の間から出土したとも伝えられる。現在、本墓誌は同寺に所蔵され、重要文化財に指定されている。墓誌は黄灰褐色の長方形の砂岩で作られ、身と蓋の二面からなり、身の上面(縦二六・二cm、横一八・七cm)に五行計三七字を刻む。石製の身と蓋を合わせる形式は、古代中国の墓誌の様式と共通する。

拓本の法量は縦二九・一cm、横二二・二cm。拓影は縦二五・四cm、横一七・五cm。銘文には正六位上常陸国大目であった故高屋連枚人の墓で、宝龜七年一月二八日に埋葬したことが記される。枚人の名はこの墓誌以外に所見がないが、高屋連姓は『続日本紀』や『新撰姓氏録』などに見え、河内国古市郡高屋の地に本拠地を持つ渡来系の氏族であったことが分かる。佐伯有清氏は、枚人が東南院文書の天平宝字二年一月二八日付「伊賀国司解」に、「從五位下行目高屋連^(朝集使)」と見える人物と同一人物の可能性があると指摘している。枚人は常陸国大目として赴任中に死去し、河内国に葬られたものと推測される。

〔拓本銘文〕

故正六位上常陸国

大目高屋連枚人之

墓寶龜七年歲次丙

辰十一月乙卯朔廿

八日壬午葬

〔朱印〕

「好尚所拓」、「好尚所蔵金石」

〔参考文献〕

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』（同朋舎、一九七九年）、

『古京遺文注釈』（桜楓社、一九八九年）、佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考證篇

第四（吉川弘文館、一九八二年）

17 紀氏吉繼墓誌銘（A三一―一） 一幅

延暦三年（七八四）

江戸時代に現在の大阪府南河内郡太子町春日（旧春日村）にある妙見寺旧境内の茶臼山と称する丘から出土した。現在は妙見寺所蔵で重要文化財。直方体を呈する博製の墓誌で、中国の墓誌にない、身と同大の蓋をつける。身の寸法は縦約二五cm、横約一五cm、厚さ約六cm。

拓本は縦三〇・〇cm、横二一・四cm。四本の界線で区切られた五行のうち四行に四七文字を刻み、紀吉繼の没日とその父広純の官歴を記す。没日である延暦三年の「朔癸酉丁酉」は正月二五日にあたる。紀広純は宝龜年間に鎮守副將軍・陸奥守・陸奥按察使として征夷事業に活躍したが、宝龜二年（七八〇）二月に参議に任じた直後の三月に、陸奥国の伊治城において伊治公皆麻呂の反乱にあつて殺害された。その女である吉繼のことを伝える史料はこの墓誌以外にない。

〔銘文〕

維延暦三年歲次甲子朔癸酉丁

酉参議從四位下陸奥国按察使

兼守鎮守副將軍勳四等紀氏

諱廣純之女吉繼墓志

〔朱印〕

「好尚所拓」、「好尚所蔵金石」

〔参考文献〕

高橋健自「紀吉繼墓誌考」（『考古界』三一七、一九三二年）、藪田嘉一郎『日本上代金石叢考』（河原書店、一九四九年）、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』（同朋舎、一九七九年）

18 伝聖徳太子墓誌銘（A三一―一四） 一紙

天喜年間（一〇五三〜五八）

河内国石川郡磯長の聖徳太子墓（現在の大阪府南河内郡太子町叡福寺）から天喜年間（一〇五三〜一〇五八）に「発見」されたことが、『古事談』など諸史料に記される。「太子御記文」「瑪瑙石」などとも称され、叡福寺に所蔵されている。碑文の全文を記す『古事談』によると、聖徳太子の仏法興隆の事績を記す下石文と、その出現を予言し国王大臣に寺院建立を促す上石文からなる。拓本は上石文残欠の拓影である。縦一九・六cm、横三三・五cm。拓影（縦一四・四cm、横一八・六cm）には七本の罫線が確認され、中央四行に銘文を記す。『古事談』の記載と対照させると、実物は本来、第一行に「今年歲次辛巳河内国石川郡磯長里有一勝」の一八字、第二行に「地尤足稱美故點墓所已畢吾入滅以後及」の一七字、第三行に「于四百三十餘歲此記文出現哉尔時国」の一六字、第四行に「王大臣発起寺塔願求佛法耳」の一二字が記されていたと推測できる。拓本に捺された「好尚所拓」の朱印は札幌の篆刻家石井双石の寄贈で、添書からこのとき初めて使用されたことがわかる。

この記文の「発見」については、従来、聖徳太子墓がその信仰を高揚させるために出現させたとされてきた。しかし、近年、四天王寺別当桓舜が関わり、同寺を通じて経過報告がなされていることから、四天王寺の関与があつた可能性も指摘されている。現在の叡福寺の創建を考える上で貴重な資料である。

〔拓本銘文〕

〔今年歲次〕
□□□□辛巳
〔地尤〕
□□足稱美□□
〔四百三十餘〕
于□□□□□□
王大臣□□□□
〔発起寺〕

〔朱印〕

「好尚所拓」

〔添書〕

「河内叡福寺所謂瑪瑙石／大正三年四月廿七日／傳聖德太子墓志大理石」

「是日札幌／石井雙石君／遙寄此／木印乃／始用之／記是喜」

〔長 四寸八分／潤 六寸／厚 二寸四分、^{〔朱書〕}「第百貳拾貳式」

〔参考文献〕

林幹彌『太子信仰―その発生と発見―』（評論社、一九七二年）、小野一之「聖德太子墓の展開と叡福寺の成立」（『日本史研究』三四二、一九九一年）、太子町立竹内街道歴史資料館編『太子町に息づく聖德太子』（二〇〇二年）

19 暁鐘成翁墓碑銘（A三一五）一幅

明治四十四年（一九一）

暁鐘成翁墓碑は、暁鐘成（一七九三〜一八六〇）の五十回忌に、三世木村貞次郎や親族・知友らが、黄檗宗瑞龍寺（通称つげん寺、大阪市浪速区元町）に建立したもので、現在も同地に残されている。瑞龍寺に碑が建立されたのは、鐘成が一期、その門前に居を構えたことによる。墓碑の形は六角柱で、正面には「暁鐘成翁墓」が、五面の側面には暁鐘成の事蹟が刻まれている。墓碑の寸法は、高さ約九〇cm、幅約四〇cm、厚さ約三四cm。台石は犬をかたどったもの。碑文は、明治四〇年に大阪人文会において、生田南水（一八六〇〜一九三四）が講演した原稿をもとに選書。拓本は墓碑の正面・側面をとったものだが、側面のうち暁鐘成室の法名などが刻まれた一面分はない。拓本の寸法は、縦八四・五cm、横九六・〇cm。現在は軸装されている。墓碑に刻まれた文字は現在も読み取ることができ、拓本と比して一部に損傷を確認することができる。

暁鐘成は、幕末の大坂出版界で最も人気を博した戯作者である。『天保山名所図会』や『浪華のにきわむ』、『摂津名所図会大成』の著者として、よく知られている。鐘成は、寛政五年に、西横堀福井町の上醬油所三代目泉屋茂兵衛の四男として生まれるが、出生後すぐに分家に預けられる。姓は木村、名は明啓、通称は弥四郎、鶏鳴舎、鹿廼舎真秋など多くの号がある。弘化四年までには、難波村瑞龍寺門前に移住、同地で豆茶屋を開業。万延元年、鐘成が妻の縁を頼って福知山

を訪れたとき、地元の百姓に依頼され、朽木騒動の檄文を書いたため投獄される。赦免され大坂に帰ったが、同年二月一九日に逝去。享年六八歳。墓は黄檗宗勝樂寺（大阪市北区大淀中）にある。

〔拓本銘文〕

暁鐘成翁墓

翁諱ハ明啓木村弥四郎と称す号を暁鐘成鹿之家真秋味噌留坊一禅福泉外史漫戲堂枸杞庵雞鳴舎晴翁といふ大阪京町堀上通元福井町に住し家世々醬油釀造を業とす翁ハ其三代和泉屋太兵衛の四男なり幼より讀書を好む長するに及びて資財を分ち別居せしむ乃ち上本町八丁目に草庵を結び著述を以て口を糊せり其庭上萩を栽ゑ鹿を放つ後博労町四丁目及本町四丁目に轉居し著述の傍菜味噌目磨粉有職調度品を商へり其名目能書の類人をして一讀願を解かしむ是元より錙銖の利を争ふの業にあらされは其損得ハ必ずしも問はずかくてこれにも飽たれば宗家に近く枸杞庵をかまへ別宅を難波に設け日夜著述の筆を放たさりき一とせ室柳子の縁類を尋ねて丹波国福知山に赴きしに偶ま城主と領民との間に紛議起りて強てことを訴むと為し俠気ある翁に囑して陳情書の起草を請へり然るに願意達せざりければ翁又請はるまゝに一揆の檄文を作りて散布せしめたり因て其主謀者の中に坐ざられ圍に日を送る中俄然毒殺の危に瀕し赦されて枸杞庵に帰り幾くもならずして遂に逝けり實に萬延元年十二月十九日也享年六十有八法號を道觀居士といふかくて梅田の三昧に茶毘の煙となし木村家累代の墓域有る浦江勝樂寺に仮祀せり本年恰も五十回忌に當れるを以て翁の三世木村貞次郎氏親族知友と謀り墓碑を舊栖に隣せる瑞龍精舎の坤位に建て予をして文を撰せしむこれ予か祖父蘆邊之人成其友たりし因を以て也

明治四十四歲次辛亥

鹿鳴草舎生田南水撰書

〔裏書〕

「大阪市南区灘波鉄眼寺／暁鐘成碑」

〔参考文献〕

長友千代治『近世上方作家・書肆研究』（東京堂出版、一九九四年）

20 池大雅墓碑（A三一―一九）一幅

安永六年（一七七七）

池大雅墓碑は、京都・西陣の地、京都市上京区寺之内通千本東入ル新猪熊町の浄土宗浄光寺に所在する。石柱型の墓碑の正面に篆書で「故東山畫隱大雅池君墓」、側面及び背面に銘文が楷書で刻まれる。拓本は縦六五・六cm、横九〇・五cm。正面篆書は儒学者・篆刻家である高芙蓉、銘文は書家の韓天壽による染筆で、撰文は相国寺一―三世大典禪師、淡海竺常によるものである。

池大雅（一七二三―一七七六）は、京都北山、深泥ヶ池村の農家に生まれる。幼名は又次郎、のち勤・亮・無名などと称する。字は公敏・貧成など。通称秋平、号は大雅堂・九霞山樵・三岳道者・霞樵など。父は京都へ出て銀座中村氏の下役をつとめたが、大雅が幼少の頃に亡くなり、母とともに画扇を売って生活をした。若くより絵を志し、柳里恭（柳沢淇園）、祇園南海らの教えを受けたほか、中国の画論や画譜を通じて独学で南画を研究し、次第に独特の画風を確立した。書も能筆で、当時の文人墨客との交流も深く、煎茶趣味に影響を与えた。代表作は「十便図」「十便十宜」「楼閣山水図屏風」など。画家である妻玉瀾（町）とともに多くの奇行の逸話が残されている。

〔拓本銘文〕

故東山畫隱

大雅池君墓

池貧成歿矣既表墓焉而未有銘也以爲請余嘗觀貸
成爲人蕭散不以寵辱驚心善與物和而不苟合紆志
外疎放而內實修檢與人文謙損而不阿簡於禮法當
往不往當答不答而顧諸義未嘗有所失惠而弗望廉
而弗劇其於取予得失恬淡如也平生行事多出於人
之所不意於是有疇人之目焉貧成生平安幼而穎□
學文學書無不能而獨長於繪事圖山水尤妙好遊名
岳尤趨健高峻幽奧無不屐極即取以爲臺端趣數登
富士而每異其路因作富士圖一百各變狀態皆其所
經覽古今画工所未及也安永丙申四月十三日病卒

于葛原艸堂距生享保癸卯五月四日得季五十有四

葬于舟岡之南浄光寺先塋之側貧成名無名始名勤

遠近皆以大雅堂稱之妻玉瀾姓徳山間靖不飾能配

夫之行亦能畫有名無子家絶悲夫世皆知大雅之畫

而不知其行知其行而不知其心故爲叙其大略如其

世則存焉不待論也銘曰

若人胡不壽若人胡無嗣庶安子哉浄光之地

安永六季丁酉六月 淡海竺常撰 韓六壽書

〔参考文献〕

角田芳昭「金石文拓本資料の表装―江戸時代文人墓碑と中国墓碑―」（関西大学博物館『関西大学博物館紀要』二、一九九六年）、角田芳昭「池大雅墓碑拓本について」（『阡陵』八、関西大学考古学等資料室、一九八三年）

21 大塩家墓碑（大塩平八郎建立）（A三一―二〇）三幅

文政元年（二八一八）

大塩平八郎中齋（一七九三―一八三七）が、文政元年（二八一八）七月に再建した墓碑。現在、大阪市北区豊崎一丁目の南濱墓地にある。墓碑の寸法は、高さ約六〇cm、幅約二五cm、厚さ約二五cm。拓本は、墓碑の正面、背面、右側面の三紙あり、現在、軸装されている。墓碑右側面には何も刻まれていない。拓本の寸法は、正面が縦五八・二cm、横二六・一cm、背面が縦五八・二cm、横二六・四cm、右側面が縦五八・三cm、横二五・七cm。拓本には、いずれも「好尚手拓金石」の朱印が捺されており、木崎愛吉が現地にて手拓したと思われる。拓本（正面）に記されている木崎の添書によると、大正七年（一九一八）四月に拓本をとったことがわかる。また、木崎が大塩のことを「中齋先生」と称していることも注目される。現在、墓碑は損傷が進み、全体に亀裂が入るとともに、正面左上部と裏面左下部の一部が破損している。墓碑からは判読できない文字もあるが、本拓本によつてすべての文字が判明する。

この墓碑は、大塩平八郎が二六歳のときに再建したもので、墓碑文によると、「春岳院清空」は寛延二年（一七四九）三月二九日に没した大塩の高祖父の喜内、

「本覺院不二日性」は安永二年（一七七三）六月二六日に没した喜内の弟助左衛門、
「耀山院誠意日涼」は文政元年六月一日に没した大塩の祖父政之丞、「覺信院秀雄」
は文化二年二月一五日に没した大塩の叔父石川吉次郎であることがわかる。

〔拓本銘文〕

〔正面〕

春岳院清空

本覺院不二日性

耀山院誠意日涼 墓

覺信院秀雄

〔背面〕

嗚呼歲月既久舊碑摧壞盡矣其文字不可少概見

也余竊恐子孫不認先塋之所在乃換舊以新次

叙各厥諡號而刻尔焉其春岳我高祖父喜内本

覺其弟助左衛門耀山我祖政之丞覺信我

叔父養于石川氏吉次郎也

文政元歲次戊寅秋七月 大鹽平八郎誌且建

〔右側面〕

春 寛延二年三月廿九日

本 安永二年六月廿六日

耀 文政元年六月朔日

覺 文化二年十二月十五日

〔朱印〕（三紙とも）

「好尚手拓金石」

〔添書〕

〔正面〕

「正面」、「其一」、「大正戊午四月仲一 南濱三昧中齋先生ノ廿六歳 撰書」

〔背面〕

「裏面」、「其二」

〔右側面〕

「右側面」、「其三」

〔参考文献〕

幸田成友『大鹽平八郎』（東亜堂書房、一九一〇年）、相蘇一弘『大塩平八郎書簡の研究』（清文堂、二〇〇三年）

22 荻生徂徠墓碑銘（A三―三二）二幅

荻生徂徠墓碑は、東京都港区三田（旧三田豊岡町）の長松寺にある。国指定史跡。墓碑の状態は良く、銘文も判読可能である。拓本と比較しても大きな劣化は認められない。拓本は墓碑の正面と背面をとったもの。拓本の寸法は、正面が縦八七・〇cm、横二五・〇cm、背面が縦一〇三・〇cm、横四三・一cmである。銘文は直接孔子・孟子への道を開いた荻生徂徠を称えており、五経と同様の表現が何箇所かに見られる。

荻生徂徠（二六六―一七二八）は江戸中期の儒学者。名は雙松、字は茂卿、通称惣右衛門。徂徠は号である。本姓は物部氏、物徂徠といった。父の方庵は館林侯（のちの五代将軍徳川綱吉）の侍医を勤めた。元禄九年（一六九六）に柳沢侯（吉保）に召し抱えられ、将軍綱吉にもしばしば講義するようになり、ついには五百石の禄を食むまでになった。宝永六年（一七〇九）、日本橋茅場町に護園塾を開くことを許された。正徳四年（一九一四）には『護園隨筆』を刊刻した。これは伊藤仁斎の学説および文章を徹底的に批判したものである。さらに、論語の古義を先秦の古書に見える古訓に徴して解説した『論語徴』を享保三年（二七二八）に執筆し、新儒教の性理学的な解釈を排斥した。享保七年には『政談』を幕府に献じた。これは八代将軍徳川吉宗の諮問に対して応えたもので、幕府政治の制度の立て直しの必要を述べたものである。享保十三年に六三歳で没し、三田の長松寺に葬られた。

〔拓本銘文〕

〔正面〕

徂徠物先生之墓

〔背面〕

嗚呼大東物先生之墓也嗚呼先生復學於古歸道鄒魯
博窮物理立言脩辭德崇名垂不朽莫大焉嗚呼先生出
也如日之升也乃影之及無所不照其矇焉嗚呼實出先
生天意可知也其為人其行狀弟子識矣享保戊申正月
十九日六十有三卒姓物部茂卿以字行銘曰洋洋聖謨
世用惑久天降文運斯人云受乃化乃弘徽猷維厚大業
已成日新富有瑕其不壽天奪斯人匪天維奪有司列辰
嗚呼小信瑕能字神盛德不朽永于牖民元文四年己未
秋七月門人朝散大夫藤忠統撰源君岳書

23 片山北海墓碑銘（A三一三四）一幅

江戸中期の漢学者・漢詩人で、混沌社の盟主として知られる片山北海（一七二三～一七九〇）の墓碑は、臨済宗梅松院（大阪市天王寺区城南寺町）にある。碑銘は淡海竺常（一七一九～一八〇一）の撰、篠崎応道（号は三島、一七三六～一八一三）の書による。墓碑は、高さ約九〇cm、幅約三九cm、厚さ約三〇cm。墓碑の正面には、「北海片先生之墓」と刻まれ、左側面・背面・右側面には六七五字が刻まれている。拓本は縦八四・四cm、横一三五・八cm。現在、墓碑は損傷が進み、全体に亀裂が入るとともに、下部の一部が破損している。墓碑から判読できない文字もあるが、本拓本によってすべての文字が判明する。

片山北海は、名は猷、字は孝秩、通称忠蔵、号を北海といった。享保八年（一七二三）、越後国弥彦村（現在の新潟県西蒲原郡弥彦村）の農家に生まれる。一八歳のとき上京して、宇野明霞の門人となるが、明霞の死後は大坂に移り、立売堀で塾「孤運館」を開いた。明和二年（一七六五）、漢詩結社・混沌社が結成され、その盟主となる。混沌社には儒者、医者、武士、商人など幅広い分野からの参加があり、在坂最大の文化サロンとなった。北海の門人には、木村兼葭堂、佐々木魯庵、平沢旭山らがいる。北海は自身で書を著すことを好まなかったため、後世に伝わる「北海文集」・「尺牘」・「詩集」・「混沌社詩稿」などは門人が編集したものである。寛政二年（一七九〇）九月、逝去。享年六八歳。城南寺町梅松院

に葬られた。

〔拓本銘文〕

北海片先生之墓

君諱猷字孝秩姓片山脩為片氏越後新瀧人故以北海號家世為

農父默翁母三村氏蚤亡君生岐嶷聰敏比十歲族人某授以四書

不二句便通無誤句讀皆以為不凡使為書生而僻區無師友之資

年十八遊學于京心無所可獨慕宇士新先生之業而從之先生亦器

之使侍側未幾先生歿矣君益落莫無聊父亦掣家來就朝夕殆不

給君辛勤克奉其驪學亦日進浪華有一二遊宇先生之門者因以招

君遂占居浪華父亦因以終焉君為人間靖寡欲不與世競未嘗以

表襮措心然內充而外著名曰籍甚海內知宇先生之業者莫不知君

以故行束脩以上者比々不絕性好音樂善笛其伎蓋不下伶官云又

嗜茶事有雅澹之賞君既閑靖無意乎當世然至於論經濟權古今

辨事當否未嘗不察々中肯綮焉其與人交似簡澗方其有故也未

嘗不輪誠而款是君之素也泉之岡部侯每有朝鮮之聘例司浪華公

館必用文儒供其應接於是欲辟君充其職而知君不肯宦苦以客禮

召之君亦悅觀光之美也應之受其廩給嘗曰我雖貧哉孰與吾宇先

生之貧哉家人以君老且病請用帛易布被君却之曰吾嘗養親不能

極輕煖之足於體今吾曷以是為因忽淚數行下其秉心也如斯寬政

二年庚戌臥病弥留至九月二十二日卒距生享保八年乙巳得年六

十有八葬城南之梅松院有遺文若干卷君晚娶河原氏先沒無子

養平井氏名縑者為後亦為存父之祀也已於是縑持其狀調余志其

墓碣余嘗從宇先生學文乃與君相交四十年如一日也道雖不同於

其所執未嘗不相謀凡有著作莫不相際悅其同調今也則亡寧無

有無質之嘆乎哉且宇先生之門獨有君而今則亡矣孰可志其墓

者乃尔使余余也方外人何以文為且余老於君五歲不圖後於君

而志其墓也唯其相知深且久莫余如也誼不可辭乃銘之曰

嗚呼北海萬里而南橋梓厥偕既安且湛存于此喪于此復何招魂于彼

淡海竺常 謹撰

〔参考文献〕

浪華篠應道謹書

多治比郁夫「片山北海年譜攷」、『大阪府立図書館紀要』六、一九七〇年

24 木村兼葭堂翁墓碑銘（A三—四〇） 一面

享和二年（一八〇二）

木村兼葭堂（一七三六—一八〇二）は、名は孔恭、字は世肅。巽（遜）斎と号し、邸内の井戸より出た古芦根にちなんで書斎を兼葭堂と名付けたという。通称は坪井屋吉右衛門で、大坂の北堀江で酒造業を営む傍ら、本草学・物産学を学び、書画や詩文を能くし、茶を嗜み、珍書・奇書・標本等を蒐集するなど、幅広く活躍した。兼葭堂が記した「兼葭堂日記」は、全国から訪れた多くの学者・文人との交友の様子が詳細に記録され、兼葭堂を中心とした文化的環境を知ることができると言える。

兼葭堂は没後、大阪市天王寺区餌差町にある大応寺に土葬され、その場所に兼葭堂墓碑が建てられた。剥落が進み、改修の手も及んでいないが、現存している。墓碑の正面に「兼葭翁之墓」と大書され、墓碑の右側面・背面・左側面にわたって、伊勢長島藩主増山河内守正賢（雪斎）の撰による碑文が陰刻されている。碑文には兼葭堂の事績、雪斎や中国からの渡来僧で黄檗山萬福寺の大成禪師との逸話などが記されている。

拓本は右側面・背面・左側面をとったものである。拓本の寸法は縦一八二・九cm、横八五・五cm。拓影の寸法はそれぞれ、右上部が縦九一・四cm、横三四・二cm、右下部が縦九一・二cm、横三四・三cm、左上部が縦九一・二cm、横三四・九cm、左下部が縦九一・二cm、横三四・一cmである。四紙を貼り継いで、一面の額装としている。拓本の右上部・左上部・左下部が雪斎の手になる碑文にあたる。右下部の拓影については、現時点では不明である。

兼葭堂墓碑の拓本は、本拓本のほか、水田紀久編『木村兼葭堂没後二百年記念諸国庶物志』（中尾松泉堂書店、二〇〇一年）や大阪歴史博物館編『木村兼葭堂—なにわの巨人—』（思文閣出版、二〇〇三年）に掲載されたものが知られる。

〔拓本銘文〕

兼葭翁墓表

（拓本右上部）

兼葭翁名孔恭字世肅姓木村氏浪速堀江人也浪速以有兼葭之古跡因堂號兼葭於是世人呼翁曰兼葭翁翁質直而忠信博學而多通其志寬優而莫與世人不交者就中博窮山海所產之物以為其樂傍玩書畫殊妙於画山水矣嘗有他邦之客訪之則晤言談論終日不倦或問文學者或問武術者或問書者或問画者於產物於故事於雅於俗各莫不答者日以繼夜夜以繼日書翰往來無有暇日四方之旅客到浪速之地者無雅俗必先訪兼葭堂如此者凡四五十年而莫有疲倦之色者京師浪速自古名藝園者多出雖名聞海內然通達萬事者少矣近讀畸人傳大都各達一二事耳如翁之考古計今而通達萬事者古今最少矣翁向遊崎巖試唐山之風俗歸後每隨黃檗山大成禪師遊若人有問唐山之風俗於禪師者即答云翁能知之不須費吾談云蓋雖禪師者唐山之產來本邦而住于黃檗然不及翁之不見不到而玩考陰察仔細於唐山之風俗是亦可一笑也於此世人以為唐山樣風流之祖余夙有忘年之交後有故客居於弊邑長洲常同床而臥同机而語於此乎得能知翁翁又能通本邦之學其他地理街區名山奇勝盡為圖以藏之又能記憶之所不到其地者亦如到所不見者亦如見東武叡麓有井貫流者面貌甚奇雖然世人不知者多矣翁竊介其隣家人而求圖貫流聞之大喜備画家作圖以贈云其多通好事以此一事可知也蓋於翁若不知之者為多端迂癡以笑之若知之者為丁寧款密以貴之有一妻有一妾有女子一人和睦善事之可謂不失雍熙之軌也翁祖為後藤隱岐守基次基次戰死河州道明寺子吉右衛門基房學醫術號玄哲玄哲遊于京師而仕近衛殿下為醫官其子玄篤紹箕裘焉玄篤之弟五助芳雅芳雅子七郎兵衛芳矩芳矩子延助芳昌芳昌子吉右衛門重周重周繼浪華木村重直之家翁者乃重周子也元文元年丙辰十一月二十八日生享和二年壬戌正月二十五日終享年六十有七銘曰

兼葭兼葭不知即為荻知即為葭彼

此難波与伊勢邦言二州本是同花

享和二年歲次壬戌夏四月十八日巢丘小隱雪齋會君撰撰并書

〔拓本行部〕
文法四卷唐詩發揮四卷明清六家文法六卷歸録二卷文集十卷

其他未脱稿者數種嘉永元年八月十三日病歿享年六十四葬於浪

華城北濱村三昧娶濱屋氏無子銘曰

良劍云藏 著書云成 劍則入道 書則先生

疑義錯節 迎刃以解 嗚呼書乎 其之劍矣

嘉永元年戊申復月 門人浪華和田孝榮書

〔参考文献〕

大阪歴史博物館編『木村兼葭堂―なにわ知の巨人―』(思文閣出版、二〇〇三年)、

水田紀久「同床同机―増山雪齋侯と木村兼葭堂―」(関西大学なにわ・大阪文化

遺産学研究所センター編『Occasional Paper No.4 NOCHSレクチャーシリーズ 近

世大坂の学芸』、二〇〇七年)

25 契沖墓 (A三一四四) 一紙

付 契沖碑 一紙

元禄一五年(一七〇二)

寛保三年(一七四三)

契沖(一六四〇〜一七〇二)は江戸時代中期の僧、国学者である。一一歳で今里村の妙法寺に入り、一三歳の時に高野山に上り修行を続け、二三歳で大阿闍梨の位を授けられている。その後は仏典、漢籍、国学、歌書の研究も行い、四一歳で今里妙法寺の住職となる。この間に水戸家の徳川光圀から命を受け、元禄三年(一六九〇)には万葉集の注釈書『万葉代匠記』を献上している。その後、餌差町の円珠庵(現在の大阪市天王寺区空清町)に移り晩年の一〇年を過ごし、ここで万葉集などの講義を行った。

契沖没後の元禄一五年(一七〇二)に、この円珠庵に墓と碑が建てられた。当初の碑には安藤為明による撰文が書かれていたが、その内容が行状であり碑銘ではないということから、後の円珠庵主源光が五井純禎に依頼し、寛保三年(一七四三)に新たに撰文が書かれることとなった。

契沖墓の寸法は、縦約六九cm、横約二六cm、厚さ約一九cm。拓本の寸法は、縦六三・三cm、横二六・〇cm。拓本は墓の正面をとったものである。

碑の寸法は、縦約一〇一cm、横約四六cm、厚さ約一九cm。拓本の寸法は、縦九〇・四cm、横一二五・五cm。拓本は碑の正面・右側面・背面・左側面をとったものである。

なお、契沖旧庵(円珠庵)ならびに墓は、国指定史跡に登録されている。現在は契沖の菩提を弔う意味で、毎年一月二五日にのみ墓参することができる。

〔拓本銘文〕

(墓)

(ア)契沖阿闍梨墓

(碑)

僧契沖没實元禄十四年矣没即塔于圓珠庵庵在大坂東郊距今四十三年塋域荒蕪款字漫剥庵主源光憂之將修焉乃謀諸江友俊素嗜為和歌學沖焉議便能合遂欲別造碑而記其顛末以列之冢上乃俾余文之余以弗識沖且儒釋殊塗也辭焉俊曰沖雖則緇流善和歌及治萬葉集而有功于訓詁者也水戸義公之命詞臣為萬葉集纂註也介而請沖固辭不於是乎撰代匠記以獻之總釋副焉則公嘉其善解古言善釋古歌乃餽白金千兩絹三十四匹以展謝之沖即散贍貧乏修塔廟一錢尺帛不以隨身公又聞古今餘材抄至柿大夫赤石和歌解大服其卓見乃復與書強起之辭曰林壑之性不嫻拜趨終不就所著漫吟集二十卷下河邊長流子序之厚顏抄改觀抄勝地吐懷篇各三卷勢語臆斷四卷源注拾遺名所補翼各八卷類字名所集七卷和字正濫五卷河社二卷代匠記二十卷總釋二卷古今餘材抄十卷沖為人也寬厚長者謙恭愛人強識博覽旁通經史嘗為人說萬葉集引證確實雄辯如注聽者悚然以為古行秘書之流亞幼時長流子誦其篇什莫逆乎心乃請為方外之交相與唱酬以為得一鍾期焉其優浮屠之法即具載水戸詞臣安藤為明所撰行狀及僧義剛所錄逸事狀此沖之梗概爾余聞之嘆曰斯異乎世僧之撰其豈可以浮屠之故

卻之耶乃取行狀讀之沖姓下川氏諱空心祖考諱元宜仕
肥後守加藤清正考諱元全仕巨崎城主青山山幸利娶間氏

生沖五歲能誦定家所輯和歌百首七歲嬰疾幾死乃懇父
母為僧時年十有三矣性恬澹愛靜不欲主巨刹晚住持攝
之妙法寺蓋為邇母氏居也母氏終天年乃退居圓珠菴沒
年六十二臘五十五云

寛保三年癸亥孟冬 大坂五井純禎撰

〔朱印〕

〔墓〕

「好尚所藏金石」

〔添書〕

〔墓〕

「餌差町圓珠庵契沖碑」、^{〔朱書〕}元禄十五年 寛保三年ノモノトハ別碑」

〔参考文献〕

鎌田春雄『近畿墓跡考』(大鏡閣、一九三二年)、近松譽文『大阪墓碑人物事典』(東方出版、一九九五年)

26 坂田藤十郎墓碑銘 (A三一五三) 一幅

大正八年(一九一九)

歌舞伎役者初世坂田藤十郎(一六四七〜一七〇九)の墓は、大阪市天王寺区四天王寺の北墓地、元三大師堂西にある。小型の五輪塔で、大正八年(一九一九)に松竹合名社の社長であった白井松次郎らが発起人となつて建てた供養塔である。

拓本は縦二五・〇cm、横五二・五cm。軸長は縦一〇三・〇cm、横六六・九cm。藤十郎の法名「重譽一室信士」と没年が刻まれている。

供養塔の傍らには木谷蓬吟の顕彰碑がある。大正八年一〇月に菊池寛が毎日新聞に『藤十郎の恋』を発表したところ大評判となり、大森痴雪が脚色し、中村鴈治郎の主演で浪花座にて上演された。これが大当たりしたため、感謝の気持ちを込めて建立されたものである。

坂田藤十郎は、京の芝居座本坂田市右衛門の子として生まれた。俳名冬貞。延宝六年(一六七八)、大坂荒木座で『夕霧名残の正月』の伊左衛門役を演じ、名声を高めた。以来、夕霧狂言の伊左衛門は生涯の当り芸として繰り返し演じられた。主として京都で活躍し、狂言も作つたが、元禄六(一六九三)年頃から近松門左衛門の作品を多く演じるようになった。傾城買狂言を形成する「やつし事」、「濡れ事」、「くぜつ事」などを得意とし、せりふも巧みであった。上方歌舞伎の和事を作り上げ、後世に伝えた功績は大きい。

〔拓本銘文〕

寶永六年十一月一日歿

坂田藤十郎

重譽一室信士

〔参考文献〕

三善貞司編『大阪史蹟辞典』(清文堂出版、一九八六年)、服部幸雄・富田鉄之助・広末保編『新訂増補歌舞伎事典』(平凡社、二〇〇〇年)

27 坂本剛毅碑 (A三一五四) 一幅

文久二年(一八六二)

坂本鉉之助(一七九一〜一八六〇)の碑は、文久二年(一八六二)に大坂中寺町の大倫寺に建てられた。大坂町奉行久須美祐雋が坂本の功德を嘉して建立したもので、懷徳堂教授並河寒泉が碑銘を撰した。碑の寸法は、高さ約一三七cm、幅約六二cm、厚さ約二六cm。近年、碑の破損が進んだため、新碑が建てられたが、新旧の碑で文字の異同があり、建立時の様子を伝えるのは、この拓本のみである。拓本は縦一三五・五cm、横六〇・七cm。拓本の裏には、「大阪市高津寺町大倫寺坂本剛毅碑(大塩乱ノ勇士)」と記されている(総論参照)。

坂本鉉之助は、名は俊貞、字は叔幹、号は鼎齋、咬菜軒。剛毅は諡号である。信州高遠生まれ。実父は高遠藩士で砲術家として有名な坂本天山。坂本鉉之助が幼少のとき、大坂定番玉造口与力坂本俊現の養子となった。天保八年(一八三七)の大塩平八郎の乱では鎮圧に出動し、淡路町堺筋の激戦において大塩勢の大砲方梅田源右衛門を討ち取り、それによって大塩勢は総崩れとなった。この功績によつ

て、坂本は定番与力(陪臣)から大坂鉄砲方(直参)に昇進する。万延元年(一八六〇)九月、鉄砲稽古場で倒れ、逝去。享年七〇歳。大倫寺に葬られた。

〔拓本銘文〕

剛毅君之碑銘

君諱俊貞字叔幹號鼎齋稱鉉之助坂本氏其先佐々木氏食邑於江之坂本因改焉考諱俊豈字伯壽號「天山以善狄法銃聘仕于高遠侯妣吉田氏生君于信既長以官命來承府城南鎮曹坂本俊現後俊現」以 召留江都因有斯 命兩坂有銃名而天山最多發明君演述其法以命家焉天保丁酉春鹽賊亂砲「寇市三郷火起府下驚擾荷擔逃者填咽道路火弗燬者三日顛沛流離慘不可言矣君受 鎮帥三上侯」命執銃與衆出禦遇賊于淡路街君徑潛躬於紙肆架櫃以狙焉賊丸先迸汰于笠簷君不知即發賊斃」君躍然急追賊黨駭散砲煙旆冥不辨咫尺賊首匿蹤事竟平市井帖然商賈復業實君之賜也後賊酋伏「誅明年戊戌秋 大命褒賞擢君於磨士賜白金百錠及巨砲一門乃爲士着司銃正士着磨士蓋君爲」始矣後賜居第于桃谷隸部卒十人他年遂列于元從臣籍又以爲永制矣世稱其特恩異數云君爲人端「剛沈毅忠直勤儉恩威並行夙喜讀書及老弗怠厚崇末學痛排異端人愛而畏之萬延庚申九月廿四日」蚤赴 府帥檢銃場暴疾告老而後終壽七十私謚剛毅葬府南大倫寺娶森山氏生一男七女長男女俱「夭餘皆歸唯末女未適無嗣養幕府大鎮衛高橋氏子貞方爲嗣配以第六女貞方尋奉 命繼職銃技太」精黃泉之下君無復遺憾矣銘曰「以銃發身 報父有烈 以身殉銃 奉君有節 孝始忠終 一機火術 猗與銃法 準的精密」功德遠聞 優恩特拔 古來攸稀 智矣壽訣 西衙故尹 久須美君 嘉厥功德 交友投分「斫石殊表 墓道之阡 題額一揮 隸古雄渾 鳳來奉命 誌且銘焉 丁酉偉蹟 以貽後昆 文久二年壬戌五月 浪華府學懷德書院教授並河鳳來謹撰并書

〔端裏書〕

「大阪市高津寺町／大倫寺／坂本剛毅碑／(大塩乱ノ勇士)」

〔参考文献〕

川崎讓司「大坂城定番与力家の成立と推移―坂本鉉之助家を中心に―」(『大阪の歴史』六四、二〇〇四年)、松永友和「大塩の乱後の坂本鉉之助について」(大塩事件研究会編『大塩平八郎の総合研究』和泉書院、近刊予定)

28 篠崎小竹墓碑銘 (A三―六〇) 三紙

安政二年(一八五五)

天満東寺町(大阪市北区与力町)の天徳寺にある。拓本は三紙から構成され、木崎愛吉の著書『篠崎小竹』に写真が掲載されているほか、『稿本大阪訪碑録』に全文が翻刻されている。墓誌は、齋藤拙堂の撰、門人呉北渚の書で、小竹の養子訥堂(竹陰)が建立したのとなっており、「小竹篠崎先生之墓」の題表は野田笛浦の書となっている。拓本の寸法は、一紙目が縦一〇・一〇cm、横二七・九cm、二紙目が縦一〇・五cm、横六八・五cm、三紙目が縦一〇・二cm、横六八・〇cmである。現在、墓碑は全体的に損傷が進み、一部破損して判読できない部分があるが、銘文は本拓本によってすべて判読できる。

篠崎小竹(一七八一―一八五二)は名を弼、字を承弼、通称は長左衛門である。畏堂を本号とするほか、南豊、聶江などの別号をもつが、特に小竹の別号で知られる。豊後杵築藩領八坂村出身の医師で、大坂で開業していた加藤周貞(吉翁)の子として誕生し、大坂の町人儒学者で私塾梅花社を開いていた篠崎三島(吉翁)し、その養子となった。小竹は、三島から徂徠学を学んだが、後に江戸に遊学して尾藤二洲や昌平黌の古賀精里から朱子学も学び、梅花社を継いだ。著書には「四書松陽講義」「小竹斎文稿」などがある。また頼山陽との交流でも知られる。

〔拓本銘文〕

(正面) 小竹篠崎先生之墓

嘉永四年歲次辛亥五月八日小竹先生筱崎君以疾終於大阪尼崎坊之宅海内人士識與不識莫不盡傷焉越七年甲寅五月嗣子公概綴緝君之行狀郵寄於余屬以碑文余於君爲同門後進其文不足爲君輕重且君交友滿天下誌銘之任應自有其人辭之一再公概不聽余乃據狀詮次之曰君諱弼字承弼小竹及畏堂其別號也通稱長左衛門義父諱應道字安道號三島以護園學下帳大阪本生父諱某號吉翁加藤氏豐後人業醫寓大阪君其仲子也以天明元年辛丑四月十四日生於兩國坊僑居幼而穎異好讀書九歲從三島翁受業翁喜其岐嶷養以爲子遂冒筱崎氏數歲專修家學東西薄游徧訪山水人物才思與年俱長翁謂君曰汝才學已具矣所乏者識耳君曰所學如此識何由長願讀洛閩書以求進境庶有所得乎翁可之時江都學政一新精里古賀先生執鐸焉君欲再東游從之恐翁不許而不敢面請潛辭家去從精里先生翁不唯無愠容且寄書先生以君爲託先生

既喜君之才又以翁之故遇之甚厚既而先生謂君曰親老何苦遠游君惕然感悟未半歲

而歸養焉及其代父教授諄々講義弗倦曰經學在習而熟之苟習而熟之則胸中自有

所得又謂宋以後構學者各有所發明要之莫若朱子之完善也支離拘泥則學者之過耳

作文詩不甚刻意曰文達意而已詩言志而已何弄巧之為然天才秀拔語自妙靈每一篇

出人爭傳誦焉書法學元明諸家而湖唐晚年自出機軸流麗雅健兼有之君齒德既邵書

名又噪於海內於是一時著書者必須君序跋而後開版矣作詩若文者必需君批評而後

銜世矣人家門楣上柱壁屏障間必得君揮染而後以為有光輝勿論貴賤也君有耐煩處

劇之才加以勤敏八面酬應綽々然有餘裕門無停客必皆面晤凡無滯牘必皆手答晚

患腹痛久之不愈庚戌秋余西上訪君々大喜留作十日飲忍痛相款有詩見贈曰喜君遙

命駕及我未歸泉余讀之愴然遂以其翌年不起享年七十有一葬於天滿鄉天德寺先塋

之次會葬者殆千人配田中氏生三男皆天三女長適處士後藤機季嫁濱田藩士與郵克

勤公概本江戶加藤氏之季子初從學侗庵古賀先生後負笈來從君々収而養之以配其

仲女君為人潤達灑落軀幹長大音吐如洪鐘不喜低語而心甚精細通達事務毫無書生

迂踈之習趙魏之老滕薛大夫皆可優為之然平生不欲仕宦其言曰吾邦君臣之道甚嚴

一委質則身受束縛進旅退言不能盡其意有損於我而無益於彼不若為賓師進退任

己直言讜議無所顧慮也諸侯鎮戍大阪者多聘君為師最受知於安中節山公々已歸藩

郵筒往來不斷阿波巨室稻田氏甚相信敬延為賓師廩人繼粟其來大阪舍其邸而信宿

於君家君虛懷容衆不持門戶之見凡當世名人莫不往來交通焉少年輩示其著作苟有

可觀者則手寫而藏之其愛才服善天性也是以人亦皆愛慕君焉座客常滿君善飲善吹

笛及筆築接人和易然其中介然有所守不可犯以非義也嘗自題其肖像曰貞不絕俗郭

林宗和而不流柳下惠不為鄉愿不為甚欲以平常了百歲及歿門人採摘其語私謚曰貞

和先生可以盡君之性行矣然猶不可無銘但後生贊不敢贊一辭乃又隱括君平生持論

以為銘曰

試看天下讀書人有幾許其名一鄉一國者又有幾許至其著稱海內者落々晨星是孰非

我之黨與繁文人之相輕何執德之偏也人皆矚目皆安於戲休哉君之言

也設心如斯可不謂賢歟

伊勢 齋藤謙 撰

丹後 野田逸題表

門人 吳 策 書

安政二年歲次乙卯五月 孝子概 建

〔參考文獻〕

木崎愛吉『篠崎小竹』（玉樹香文堂、一九二四年）、木村敬二郎編『浪速叢書第

十 稿本大阪訪碑録』（浪速叢書刊行會、一九二九年）、近松譽文『大阪墓碑人物

事典』（東方出版、一九九五年）

29 鉄眼道光茶毘所碑（A三―七五）一幅

江戸時代前期の黄檗僧鉄眼道光（一六三〇〜八二二）の茶毘所碑は、黄檗宗瑞

龍寺（通称つげん寺、大阪市浪速区元町）にある。拓本は茶毘所碑の正面にあ

たる。縦一〇九・二cm、横六〇・三cm。現在の茶毘所碑は、後年になって建て替

えられているが、本拓本は建立時の碑から手拓されたと考えられる。

鉄眼道光は、寛永七年正月一日に肥後国益城郡守山村（現在の熊本県宇城市）

に生まれる。俗姓佐伯氏。一三歳のとき出家。明暦元年（一六五五）、隠元隆

琦（一五九二〜一六七三）に参じ禅に入り、その後、木庵性瑫（一六一一〜

八四）に師事した。鉄眼は、木崎愛吉も指摘するように、大蔵経を刻蔵した人物

として知られている（『大日本金石史』五）。寛文三年（一六六三）に中国から大

蔵経を購入することを発願したが、やがて大蔵経刻蔵事業を開始。延宝六年

（一六七八）、大蔵経六九五六巻の初刷を後水尾法皇に献上し、天和元年（一六八一）

に完刻をみた。また、瑞龍寺・宝泉寺・金禅寺・海蔵寺・羅漢寺・小松寺・延命

寺・三宝寺を開山した。鉄眼は、大飢饉の救済に奔走するうちに自身が疫病に感

染、天和二年三月二二日、瑞龍寺にて逝去。享年五三歳。瑞龍寺は別名、鉄眼寺

ともいう。

〔拓本銘文〕

開山和尚茶毘處

師諱道先號鐵眼以寛永庚午年正月朔日

誕於肥之後州益城郡佐伯氏初出家于本

郡教寺後嗣添木菴瑫和尚募刻藏板流布

于世嘗開山八處曰瑞龍曰寶泉曰金禪曰

海藏曰羅漢曰小松曰延命曰三寶也天和
二千戌年三月二十二日巳時示滅於本寺
乃荼毘于此遂奉遺骨樹塔于寶藏之西隅

〔参考文献〕

源了圓『日本の禅語録 第十七卷 鉄眼』（講談社、一九七九年）

30 中井磔庵墓碑銘（A三一七七）一幅

宝曆八年（一七五八）

中井磔庵墓碑は宝曆八年（一七五八）に現在の大阪市中央区上本町四丁目にある誓願寺に建立された。五井蘭洲（純禎）が碑銘を撰し、三宅春楼（正誼）が書した。撰者五井蘭洲は、中井磔庵とともに三宅石庵の門下として互いに学間に励んだ間柄であった。また、三宅春楼は、初代学主石庵の子息で三代学主として磔庵没後の懷徳堂において、助教五井蘭洲とともに堂風の確立に傾注した。

墓碑の正面には、「磔庵中井先生之墓」と大書されている。拓本は墓碑の左・右側面と背面をとったもの。拓本の寸法は縦一〇四・〇cm、横一〇一・三cm。軸長縦一八〇・〇cm、横一一八・五cm。銘文には、磔庵の生涯について記されており、播州龍野に生まれ、来坂し石庵に入門したことや、学友との親交などが描かれている。現在、墓碑は損傷が進み一部判読できないが、文字は本拓本によって判明する。

中井磔庵（一六九三〜一七五八）は、名は誠之、字は叔貴、号は磔庵、通称は忠藏といった。祖父の代から播磨国龍野で医業にたずさわっていたが、宝永三年（一七〇六）に父とともに来坂し、三宅石庵に入門した。享保九年（一七二四）磔庵は同志らと図って懷徳堂を創設し、石庵を初代堂主に迎えた。享保十一年には幕府に公許され、磔庵は懷徳堂学問所の預人となった。石庵没後享保一六年に二代目学主を兼ね、懷徳堂の振興に努めた。

〔拓本銘文〕

寶曆八年戊寅六月十七日郷校教授中井君終焉其子乃執其行状請余紀墓表嗚呼
余也與君友善無慮四〇年所而中間索居十數年余而乃得陪其易實悲矣哉義不可辭
也君諱誠之字叔貴稱忠藏自號磔庵播之龍野人祖考諱昌倫字養僊私諡好生考諱昌

〔参考文献〕

『大阪府史』第六卷 近世編Ⅱ（大阪府、一九八七年）、『新修大阪府史』第三卷・第四卷（大阪府、一九八九年・一九九〇年）、脇田修・岸田知子『懷徳堂とその人々』（大阪大学出版会、一九九七年）、湯浅邦弘『懷徳堂事典』（大阪大学出版会、

直字玄端私諡恭貞好生君以善醫仕乎飯田守脇坂東陽侯食祿二百五十石侯移封龍野亦從焉玄要侯時以敢諫不容家居乃恭貞君出仕聚脇坂氏生五男長名懷之字養元私諡懿貞次名信之字伯元次名廣之稱權藏見俱仕于本藩次則君也季名文之字季禮彌常菴私諡良簡好生君誘令恭貞君辭祿乃携家累徙大坂醫術大行及歿家道衰廢君東西拮据不憚劬勞嘗與季禮委贖萬年三宅先生俱受業君乃僑居躬爨以學朋友輒多其妻益勤資給以周之為人豪宕不羈蔑視小節自親炙先生温厚謹敕口無忿言體無懈惰氣質變化之說猶信恭貞君之移赤穂也君亦奉妣氏往焉幹家事播攝之間負書篋逆旅道上手不釋卷無幾丁恭貞君憂哀毀踰禮乃與季禮議終喪制服除遂如大坂復事先生於高麗坊講舍學業倍隆君每念大坂之地有設鄉校以教道子弟曾與二三友相議奮然自以為功便入關咨諸大嶋三輪二氏二氏乃為之先容於是先生在厩崎坊講舍君乃欲就以為肄業之處享保十一年再入關是歲四月還大坂乞于本衙六月召君聽之乃區講舍之地除其戶役以賜之遂飾講堂置子舍首請先生開講席生徒滋進遠方之人亦懷資來學者衆濟二成禮讓之風者咸君功也季禮寢疾君輒扶妣氏甘旨百須無欠而弗使知其苦辛龍藩有田邊和介者包藏禍心事發覺君奉敬信侯命如平安如南都以摘發之和介乃伏誅藩府無事君力居多侯說之賜以廩食君於藩府知無不言侯亦以心膂為寄國人畏敬焉妣氏壽九十一以天年終初妣氏在播以子姓天亡之衆也常忽之不樂君乃謝生徒歸省色養每招族人故舊日設宴以盡其娛親姻孤女五人皆收養子資裝以嫁之而其奉身泊如也校舍經久日就傾頽於是土木一新實有增舊規人服其心計獨運處貧能理財享年六十有六遺狀學校事以屬萬年先生嗣子正誼辭旨懇篤曾無一言及妻子昔日鄉校之誓也輒以不傳子為約至今踐其言不渝人以為美談君以踐履為尚是以雖有詩賦文章及和歌和文不以為意委篋中皆未脫藁配植村氏生二男長積善次積德俱敦文行鄉閭以欣羨葬大坂誓願寺境內銘曰

維孝百行之基母氏九十撫之均嬰兒子也斑白亦如小兒嬉二愛敬之所覃

内外普施吾見其人非君其誰

五井純禎撰 三宅正誼書

二〇〇一年)

31 松尾芭蕉碑銘 (A三一九一) 一幅

享保一九年(一七三四)

松尾芭蕉碑は、享保一九年(一七三四)、芭蕉の門人野坡が中心となつて現在の大阪市天王寺区下寺町にある円城院(通称遊行寺)に建てられた。そのことは碑銘から読みとることができる。現在、正面・背面ともに剥落が著しく、「翁墓」の文字以外は読みとれないが、『撰津名所図会大成』によれば、「芭蕉翁墓」の字は黄檗佚山の書である。背面には香月牛山が記した碑文が刻まれ、建碑の意趣が詳しく開陳されている。拓本の寸法は、縦一〇三・二cm、横五九・四cm。

松尾芭蕉(一六四四〜一六九四)は、幼名金作、名は宗房。俳号は当初実名の宗房であつたが、次いで桃青、芭蕉と改めた。伊賀国の松尾与左衛門の次男として生まれ、若くして藤堂新七郎の嗣子良忠に仕えた。北村季吟に師事して俳諧の道に入り、延宝三年(一六七五)に江戸深川の芭蕉庵に隠棲する。これまでの「談林俳諧」を一新し、「蕉風俳諧」を打ち立てた。しばしば旅に出て、『奥の細道』などの代表作を残した。晩年は大坂に移り、南御堂の旅宿で「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の句を残し死去。生前の遺言により近江の義仲寺に葬られた。弟子には其角・嵐雪・去来・許六などがある。

〔拓本銘文〕

芭蕉翁墓

桃青子姓松尾字甚質號芭蕉翁産于伊賀官于伊勢卒于難波其顛末載于野坡子之碑文故不贅矣余嘗觀世間九流百家稱師呼弟者生前懷其德者最多及身故也報其恩者甚少何乎蓋學其道而未得則不遠千里來侍事左右而仰望其德是有所求于彼也既得之則棄之如弁髦以耻稱師况乎報其恩耶夫俳諧者和歌之一體也嗜之者稱之道而擇之師者不亦宜乎翁素嗜此道壯而致仕遂離郷而到于兩都及難波所到之處門人弟子營寶廬致衣食以給焉然其性洒落四壁而立所寓無突黔之地其動靜語默必於俳可謂此道之盟主滑稽之巨擘也嘗謂弟子曰俳諧者和歌之一體也古哲所謂和歌無師伸己之性情而吟詠焉而天下之口非一世與時相變矣以故格調亦自異猶和歌於今古唐詩於盛晚然唯顧結選道如何耳頼翁得此道

解其惑者億萬翁然而化矣蓋關之西東嗜此道者悉莫不為之歸壹是皆稱其流亞就中野坡子傑然繼其緒以倡此道于四方當翁之七回諱辰遠來西肥縱更其門人而建碣于長崎乎自裁碑文復當十七回忌之歷來筑紫與其弟子相謀而建碑于宮崎今茲來赤間關券防長以東迄難波諸州門生而彫刻石碑建于天王寺裏其所其他翁之墓散在諸州者一在江之義仲寺一在東都深川長慶寺其在洛之雙林寺者翁之門人支考所建云今野坡子所建者蓋難波翁之所卒地也是欲傳師德乎久遠而不朽謝師恩乎當己以不諱也一日野坡子扣余門來告曰我既老矣建翁之五十回忌亦不可知故有此舉今年實翁之謝世四十一年云且乞碑文余曰吾子之功其勤哉余雖不敏不敢辭嘉獎其欲謝師恩之志為誌云

享保十九甲寅歲晚秋日前豊倉藩醫官八十老翁牛山香月啓益誌

〔参考文献〕

『浪速叢書第七 撰津名所図会大成 其一』(浪速叢書刊行会、一九二七年)、三善貞司『大阪の芭蕉俳蹟』(松籟社、一九九一年)

【墓碑類】

32 安倍宗任女墓碑 (A四一一) 一紙

仁平二年(一一五二)

岩手県西磐井郡平泉町所在の毛越寺は、金堂円隆寺・嘉祥寺(嘉勝寺)および東に隣接する観自在王院をも含めた一大総合寺院であつた。墓碑は『平泉旧蹟志』によると、観自在王院の小阿弥陀堂跡の良(北東)に、平泉の里人村上治兵衛照信が享保十五年(一七三〇)九月一三日に建立したとある。

拓本は紙面が縦一二四・〇cm、横三六・〇cm。拓影面は縦一一一・〇cm、横三四・〇cm。銘文にある前鎮守府將軍基衡は、平安時代末期に毛越寺を創建した奥州藤原氏二代の藤原基衡で、陸奥・出羽押領使であつたが、鎮守府將軍に任官したのは、その子の藤原秀衡であつた。秀衡の母が、基衡の室であつた安倍宗任の女である。彼女は観自在王院を建立した。安倍宗任は、前九年の役(一〇五一〜一〇六二年)で源頼義・義家征討軍に敗れた安倍貞任の兄弟で、役後は伊予国

に流され、その後、大宰府に移された。

〔拓本銘文〕

仁平二壬申年

前鎮守府將軍基衡室安倍宗任女墓

四月二十有日

〔朱印〕

〔好尚所藏金石〕

〔添書〕

〔平泉〕、〔朱書第八拾號〕

〔参考文献〕

相原友直「平泉旧蹟志」(鈴木省三編『仙臺叢書』、仙臺叢書刊行会、一九二二年)、岩手県教育委員会編『奥州平泉文書新訂版』(国書刊行会、一九八五年)、『平泉町史』史料編一(平泉町、一九八五年)

33 征西大將軍式部卿親王墓碑 (A四―四) 一紙

南北朝時代

征西大將軍式部卿親王墓碑は熊本県八代市妙見町の中宮山悟真寺にある。征西將軍式部卿親王とは後醍醐天皇の皇子である懷良親王(？〜一三三三)を指す。後醍醐天皇が皇子らを各地に分遣する際、懷良は九州に送られた。一時は大宰府を占拠し九州に威を振るつたが、室町幕府の今川了俊に敗れて大宰府を退去し、弘和三年(一三三三)に没した。懷良の没した場所や墓所は正確にはわかっていないが、筑後矢部(現在の福岡県八女郡矢部村)で没し、征西將軍を継いだ良成親王が征西府を八代と定めた際に、懷良の遺骨を八代に移して当地に墓所を設けたとされている。明治二年(一八七八)にこの墓が懷良のものであると宮内省に認定された。

拓本は縦一三七・四cm、横二九・六cm。添書に「富岡百鍊拜識」、裏書に「鉄齋手拓」とあり、明治・大正期の南画家富岡鉄齋(一八三六〜一九二四)が手拓したものと考えられる。この拓本は、木崎愛吉と富岡鉄齋との関係を示す意味でも貴重な資料といえよう。

〔拓本銘文〕

征西大將軍式部卿親王之墓

〔朱印〕

〔好尚所藏金石〕、「富岡百鍊」

〔添書〕

〔後醍醐天皇ミ子懷良親王〕

〔肥後(同カ)八代郡東宮地村中宮山悟心寺境内／富岡百鍊拜識〕

〔裏書〕

〔付箋〕「征西大將軍之墓銘／鉄齋手拓」

〔参考文献〕

小高根太郎『富岡鉄齋』(『現代日本絵巻全集』一、小学館、一九八四年)、蓑田田鶴男『八代市史』第二卷(八代市教育委員会、一九七〇年)

34 徳川家康母(於大の方)墓碑 (A四―八) 一紙

慶長七年(一六〇二)

徳川家康の母於大の方(おだいのかた)(一五二八〜一六〇二)の墓碑は、無量山傳通院寿経寺(浄土宗、東京都文京区小石川)にある。墓碑は五輪塔で、拓本は地輪部表面をとつたもの。縦五〇・三cm、横六五・八cm。拓本には朱書で、「東京市小石川区傳通院内徳川家康母堂塔墓銘 大正十年十二月廿日拓」と記され、その下に「三輪」の印が押されている。「三輪」という人物は、三輪善之助であると考えられる。三輪が本拓本をとり、木崎愛吉に送ったとみられる。墓碑は長年風雨にさらされてきたが、文字は現在も読み取ることができる。

於大の方は、三河国刈谷城主水野忠政の次女として、享禄元年(一五二八)に生まれた。天文一〇年(一五四一)に岡崎城主松平広忠に嫁ぎ、同一年、広忠の長男竹千代(後の徳川家康)を生む。しかし、忠政の死後、水野家を継いだ於大の方の兄水野信元は、松平氏の主君今川氏と絶縁し、織田氏に従う。これにより広忠と離縁。その後、於大の方は、知多郡阿古居城主久松俊勝と再婚し、三男四女を生んだ。久松俊勝の死後は剃髪して、「傳通院」と号した。慶長七年(一六〇二)八月二八日、家康の滞在する京都伏見城にて逝去。享年七五歳。京

都知恩院で法会の後、遺骸は江戸に送られ無量山寿経寺傳通院に葬られた。法名は、「傳通院殿蓉譽光岳智香大禪定尼」。

〔拓本銘文〕

傳通院殿

蓉譽智香

大禪定尼

〔朱印〕

〔好尚所蔵金石〕、「三輪」

〔添書〕

〔^{朱書}東京市小石川区傳通院内徳川家康母堂塔墓銘 大正十年十二月廿日拓〕

〔参考文献〕

中村孝也『家康の族葉』（講談社、一九六五年）、宇高良哲『於大の方と傳通院』（無量山傳通院、二〇〇一年）

35 基督教徒墓碑（A四―一）一紙

慶長十三年（一六〇八）

京都延命寺のキリスト教徒墓碑であり、拓本は京都の日本画家入江波光より寄贈されたものである。拓本の寸法は、縦四九・二cm、横三〇・六cm。また、この拓本は木崎愛吉編『大日本金石史』附図にも掲載されている（一七五・一七六頁）。

墓碑に記された「平加太郎左衛門まこい衞す」については、不明である。年代は慶長一三年三月一〇日となっており、幕府がキリシタン禁圧を強化していく直前の段階に建立されたものである。

〔拓本銘文〕

慶長十三年三月十日

（十字架）平加太郎左衛門まこい衞す

さんのりのりよの日

〔朱印〕

〔好尚所蔵金石〕

〔添書〕

「丁巳九月廿六日／京都下立賣 入江波光君所贈」、〔^{朱書}番外二十〕

〔裏書〕

〔参考文献〕

木崎愛吉編『大日本金石史』附図（歴史図書社、一九七二年）

36 井原西鶴墓（A四―一九）一軸

元禄六年（一六九三）

井原西鶴（一六四二―一六九三）は大坂に生まれ、生家は富裕な商人であったという。一五、六歳頃から俳諧をはじめ、後に西山宗因に師事し、談林派の代表的な俳人として「和蘭陀西鶴」とも称された。また天和二年（一六八二）に『好色一代男』を発表した後は、浮世草子作者としても活躍し多くの作品を残した。

拓本の寸法は、縦六八・五cm、横三九・四cm。左側面には、この墓が下山鶴平と北條團水によつて建立されたことが記されている。北條團水は井原西鶴の門人で、西鶴没後京都から大坂に移り、西鶴庵二代目となり西鶴の遺稿を編纂し、『西鶴置土産』や『西鶴織留』などを出版したことで知られている。また、本拓本にはみられないが、右側面には「元禄六癸酉年八月十日」との記述もある。

西鶴の墓は大阪市中央区上本町西の誓願寺にあり、大阪市指定文化財及び大阪市史跡顕彰碑に指定されている。

〔拓本銘文〕

（正面）

仙皓西鶴

（左側面）

下山鶴平

北條團水

〔参考文献〕

近松譽文『大阪墓碑人物事典』（東方出版、一九九五年）、『浪速叢書第七 撰津名所図会大成 其一』（浪速叢書刊行会、一九二七年）

37 大石内蔵助父墓碑 (A四―二二) 一紙

付 大石良雄・主税墓碑 二紙

寛文十三年(一六七三)
元禄二十六年(一七〇三)

大石内蔵助の父権内良昭(？(一六七三)の墓碑は、大阪市北区兔我野町の円通院にあり、大石信澄墓碑と並んで建てられている。墓地の入口に「大石内蔵助良雄實父権内良昭・大石瀬左衛門信清實父八郎兵衛墓」と書かれた碑が建っている。

拓本は墓碑の正面をとったものである。拓本の寸法は、縦一〇八・五cm、横四一・〇cm。墓碑の表面は全体的に摩耗しているが、文字は読み取ることができる。

大石良昭は、赤穂浪士大石内蔵助良雄の実父で、赤穂藩家老大石内蔵助良欽の嫡子である。赤穂藩大坂屋敷に務めていたが、良雄が三四歳の時に病死し、大坂に葬られた。その後、良雄が良欽の養子となり、家督を継いだ。

大石内蔵助良雄(一六五九―一七〇三)と主税(一六八八―一七〇三)の墓碑拓本は、吉祥寺(大阪市天王寺区六万休町)のものから手拓されたものである。

拓本の寸法は、良雄・主税ともに縦五八・八cm、横二八・八cm。吉祥寺は赤穂浅野家の祈願所である。

〔拓本銘文〕

(大石良昭墓碑)

寛文十三癸丑九月六日

圓寂本務院英岳玄雄居士覺靈

大石内蔵助父

(大石良雄墓碑)

大石内蔵助

忠誠院刃空淨劍居士

行年四十五歳

(大石主税墓碑)

大石主税

趙倫院刃上樹劍信士

行年十六歳

〔朱印〕(三紙とも)

〔好尚所蔵金石〕

〔添書〕

(大石良昭墓碑)

〔圓通院大石内蔵助父碑〕

(大石良雄墓碑)

〔吉祥寺〕

38 大塩家墓碑(大塩政之丞建立)(A四―三二) 一紙

付 塩田鶴亀助夫妻墓碑 三紙

享和元年(一八〇二)
明和元年(一七六二)

大塩家の墓碑二基。一基は大塩政之丞が建立した大塩家の墓碑。もう一基は、政之丞の養父塩田鶴亀助夫妻の墓碑。二基の墓碑は、図版番号21大塩家墓碑(大塩平八郎建立)とともに、大阪市北区豊崎一丁目の南濱墓地にある。両墓碑とも損傷が進み、全体に亀裂が入るとともに、一部が破損・剥落している。墓碑からは判読できない文字もあるが、本拓本によってすべての文字がわかる。拓本にはいずれも「好尚手拓金石」の朱印が捺印されており、木崎愛吉が実際に現地に赴き、拓本をとったと思われる。拓本をとった年代は、大塩家墓碑(大塩平八郎建立)と同じく、大正七年(一九一八)四月である可能性が高い。

大塩家墓碑を建立した大塩政之丞成余(一七五一―一八一八)は、大坂町奉行所与力で大塩家の六代目にあたる。幼くして父母を亡くした大塩平八郎を育てたのは政之丞である。墓碑の寸法は、高さ五五cm、幅二三cm、厚さ二三cm。拓本は墓碑の正面、右側面をとったもの。墓碑左側面と背面には何も刻まれていない。拓本の寸法は、正面が縦六七・五cm、横二七・〇cm。右側面が縦五三・〇cm、横二七・〇cm。拓本(正面)には、「中齋先生祖父成余所建、盖自書也」とあり、墓碑の文字は大塩政之丞が書いた文字であろう、との木崎の推察が記されている。墓碑に刻まれている「新寂林道信士」は、大塩政之丞とその妻清との子で、俗名を祥二といった。享和元年(一八〇二)九月二日に没したことが墓碑からわかる。

塩田鶴亀助夫妻墓碑の寸法は、高さ六一cm、幅二三cm、厚さ一四cm。拓本は墓碑の正面、右側面、左側面をとったもの。墓碑背面には何も刻まれていない。拓

本の寸法は、正面が縦六八・〇cm、横二三・八cm。右側面が縦六七・〇cm、横一四・七cm。左側面が縦六七・九cm、横一八・〇cm。拓本（正面）には、木崎による添書、「南濱墓地大塩成余養父母」がみられる。大塩政之丞は、阿波国徳島藩家老稲田氏の家臣である真鍋元右衛門の次男で、幼少期に同じ稲田氏の家臣塩田鶴亀助の養子となった。塩田鶴亀助の娘は大塩家四代左兵衛の妻であったが、子になかったため、大塩家では左兵衛の死後、三代喜内の弟助左衛門を当主に迎えた。しかし助左衛門にも家督を継ぐ男子がいなかったため、先代の妻の実家である塩田家から政之丞を迎え入れたのである。

〔拓本銘文〕

（大塩家墓碑正面）

享和元辛酉年

新寂林道信士

九月二十二日

（大塩家墓碑右側面）

大塩政之丞之

（塩田墓碑正面）

諱銘院諱空時照居士

茹月院諱質妙義大姉

（塩田墓碑右側面）

宝曆十一辛巳年九月六日

妙明和元申閏十二月二日

（塩田墓碑左側面）

俗名 塩田鶴亀助墓

〔朱印〕（五紙とも）

「好尚手拓金石」

〔添書〕

（大塩家墓碑正面）「中齋先生祖父成余所建／蓋 自書也 正面 其四」

（大塩家墓碑右側面）「右側面 其五」

（塩田墓碑正面）「南濱墓地 大塩成余養父母 正面 其六」

（塩田墓碑右側面）「裏面 其七」

（塩田墓碑左側面）「右側面 其八」

〔参考文献〕

幸田成友『大鹽平八郎』（東亜堂書房、一九二〇年）、相蘇一弘『大塩平八郎書簡の研究』（清文堂、二〇〇三年）

39 小西来山夫妻墓碑（A四―三五）一紙

小西来山夫妻の墓碑は、大正四年に島道素石、青木月斗等によって大阪市浪速区恵美須西にある海泉寺で発見された。現在も同寺に墓碑は残っているが、側面にあつたとされる銘文は全て剥落し、この拓本に取られている正面部分も文字の一部が欠けている。拓本の寸法は縦五五・七cm、横三三・〇cm。文字が剥落する以前の墓の側面には、右側面に「享保元丙申十月三日／享保十九甲寅十月廿日」、左側面に「辭世釋尼貞林／しる人もしらざる人も淀川の／くせいのはねは内にこそあれ」と刻まれていたという。

小西来山（一六五四―一七一六）は大坂に生まれ、七歳の頃から前川由平について俳諧を学び、後に西山宗因に師事し、一八歳にして俳諧の点者となっている。その俳風は談林から出たが、蕉風に近いものがあつたといわれている。また、来山の墓は海泉寺の他に天王寺区逢阪にある一心寺にもあり、境内には来山の句碑も建っている。

〔拓本銘文〕

釋道法
貞林

〔朱印〕

「好尚手拓金石」

〔添書〕

「乙卯八月廿七日／海泉寺」

〔裏書〕

「小西来山夫妻碑」

〔参考文献〕

近松譽文『大阪墓碑人物事典』（東方出版、一九九五年）、鎌田春雄『近畿墓跡考』（大鏡閣、一九二二年）

40 近藤守重（重蔵）墓碑（A四―三六）一紙

文政二年（一八二九）

近藤重蔵の墓碑は、瑞雪院（滋賀県高島市勝野）と西善寺（東京都文京区向ヶ丘）の二ヶ所にある。本拓本は瑞雪院の墓碑からとったものである。墓碑には大きな痛みはなく、文字の判読も可能である。拓本の寸法は、縦八一・〇cm、横六七・〇cm。拓本にある朱印と添書によって、「辛亥四月十二日」に手拓したことがわかる。おそらく明治四四年（一九一三）に、木崎自身が墓碑を訪れて手拓したのであろう。

近藤重蔵（一七七一―一八二九）は、名は守重、号を正斎・昇天道人といった。重蔵は通称である。寛政一〇年（一七九八）に松前蝦夷地御用取扱を命じられ、以後五回にわたって北方領土を探検した。エトロフ島では、高田屋嘉兵衛とともに新たな漁場を開いたり、「大日本恵土呂府」という標柱を立てるなどした。その後、幕府の紅葉山文庫の書物奉行に抜擢されたが、北方警備と開発をめぐる幕府の要人と意見が合わず、文政二年（一八一九）に大坂弓奉行に左遷された。さらに、長男富蔵が犯した罪で近江国大溝藩にお預けとなり、この地で生涯を閉じた。文政一二年、五九歳で没した。藩主分部光寧は重蔵の死を悼み、遺体を分部家とゆかりがある瑞雪院に葬った。

墓石の表面には、藩士分部準輔の揮毫によって「近藤守重之墓」と刻まれた。背面の「自休院俊峯玄逸禪定門」は、万延元年（一八六〇）、徳川家斉の十三回忌に重蔵の罪が許されたのを機に、大溝藩が重蔵に法号を授け、刻ませたものである。さらに、明治四四年には北方探検の功によって、明治政府から正五位を贈られ、墓所が有志の手で整えられた。現在、近藤重蔵の墓は、高島市指定史跡となっている。

〔拓本本文〕

〔正題〕
近藤守重之墓

〔背題〕

文政十二己丑年

自休院俊峯玄逸禪定門

六月十日（看）六日

〔朱印〕

〔好尚手拓金石〕

〔添書〕

〔江州大溝 辛亥四月十二日〕

〔参考文献〕

『高島町史』（一九八三年）、近藤重蔵翁顕彰会『高島町歴史民俗叢書第五輯 北方探検の先駆者 近藤重蔵の生涯』（一九八三年）

41 梶屋久右衛門墓碑・松山墓碑（A四―四五）

延宝五六年（一六七七・七八）

〔梶久わんきゅう〕で知られる梶屋久右衛門と遊女松山の墓碑は、実相寺（浄土宗、大阪市天王寺区上本町）にある。梶屋久右衛門の墓碑は、高さ約七八cm、幅約二四cm、厚さ約一五cm。遊女松山の墓碑は、高さ約七一cm、幅約二九cm、厚さ約一八cm。梶屋久右衛門の墓碑拓本は二紙あり、墓碑の正面と左側面をとったもの。正面拓本は縦七五・〇cm、横二四・六cm。左側面拓本は縦六八・四cm、横一五・〇cm。一方、遊女松山の墓碑拓本は、墓碑の正面をとったもので、縦六八・〇cm、横四四・二cm。銘文は現在も読み取ることができる。ただし、木崎愛吉は『大日本金石史』の中で、梶屋久右衛門の墓碑文の「筋はした谷氏」の「筋」は、「筋」にも見える、と注記している。

梶屋久右衛門は、江戸前期の商人で、浄瑠璃・歌舞伎の題材となった「梶久も」の主人公である。新町の遊女松山と深く契り、豪遊して家産を傾け、のちに座敷牢に入れられ、発狂して没したという。貞享元年（一六八四）に大和屋甚兵衛が大坂において歌舞伎「梶久」を上演。翌年、井原西鶴（一六四一―一六九三）が「梶久一世の物語」を書いた。浄瑠璃では、宝永五年（一七〇八）に紀海音（二六六三―一七四二）が「梶久末松山」を作るなど、その他、長唄、常盤津節などの題材となっている。

〔拓本銘文〕

(椀屋墓碑正面)

宗達居士 墓

(椀屋墓碑左側面)

延寶五箇歳九月初七日

筋谷氏宗継造

(松山墓碑)

延宝六年午

(姓字) キリーク 朱 珍 信 女

四月七日

(朱印) (椀屋墓碑)

「好尚所蔵金石」

(添書)

(椀屋墓碑)

「実相寺 傳椀久碑／其三」

(松山墓碑)

「上本町 實相寺 椀久碑」

42 初代竹本義太夫墓碑 (A四―四八) 三紙

正徳四年(二七二四)

初代竹本義太夫墓碑は大阪市天王寺区大道にある超願寺に建てられた。建碑の時期は不明であるが、墓碑の右側面に「正徳四甲午九月十日」とあるので、義太夫が亡くなった直後に建てられたものと推測される。現在は寺内の墓地の一角に屋根を構えて立てられているが、墓碑の剥落が著しく、拓本でのみその全容がわかる。拓本の寸法は、正面が縦九六・五cm、横三三・五cm、左側面が縦九五・五cm、横二二・〇cm、右側面が縦三四・六cm、横一七・五cm。墓碑左側面の「釋道喜」は義太夫の法名。

初代竹本義太夫(一六五一―一七一四)は、江戸前・中期の義太夫節太夫の始祖とされる。摂津天王寺村の農家の生まれで、初名は天王寺五郎兵衛。延宝初年に井上播磨掾の門弟で安居天神の料理屋の主人清水理兵衛に師事、延宝五年

(二六七七) 京都の宇治嘉太夫座に出勤し好評を得た。清水五郎兵衛・清水理太

夫を経て貞享元年(一六八四)に名を竹本義太夫と改め、道頓堀に竹本座を創設。以後、座付作者近松門左衛門の力もあつて、人形浄瑠璃発展の主導的地位を固めた。義太夫ははじめ播磨風の豪快な語りで知られていたが、のちには世話物の艶やかな語り口も得意とする芸域の広さをもつようになった。

〔拓本銘文〕

(右側面)

正徳四甲午年九月十日

(正面)

元 竹本義太夫墓

(左側面)

釋道喜

(朱印)

「好尚所蔵金石」

(添書)

「超願寺竹本筑後掾碑 追建／廿三」

〔参考文献〕

『浪速叢書第十 稿本大阪訪碑録』(浪速叢書刊行会、一九二九年)、近松譽文『大阪墓碑人名事典』(東方出版、一九九五年)

43 近松門左衛門夫妻墓碑(広濟寺・法妙寺) (A四―五二) 四紙

享保九年(二七二四)

江戸中期の浄瑠璃・歌舞伎脚本作家として有名な近松門左衛門(一六五三―一七二四)の墓は、日蓮宗広濟寺(尼崎市久々知)と日蓮宗法妙寺跡地(大阪市中央区谷町八丁目)の二ヶ所にある。昭和四二年(一九六六)、両墓碑は国指定史跡になっている。昭和四二年に法妙寺は道路拡張工事により大東市に移転したが、近松夫妻の墓はその跡地にある。

広濟寺の墓碑は自然石で、正面に近松夫妻の法名が、背面に近松の命日が刻まれている。寸法は高さ約四七cm、幅約二〇cm、厚さ約九cm。拓本は墓碑の正面と

背面をとったもの。拓本の寸法は縦五四・五cm、横五四・〇cm。墓碑に刻まれた文字について、正面は現在も読み取ることができるが、背面は一部判読が困難である。拓本も同様の状態である。

一方、法妙寺の墓碑は自然石で、広済寺同様、正面に近松夫妻の法名が、背面に近松の命日が刻まれている。寸法は高さ約五二cm、幅約二五cm、厚さ約一二cm。台石の寸法は、高さ約四五cm、幅約四五cm、厚さ約四四cm。拓本は三紙あり、墓碑の正面・背面・台石をとったもの。拓本の寸法は、正面が縦四九・三cm、横二一・三cm。背面が縦四二・五cm、横二一・八cm。台石が縦三五・五cm、横四九・一cm。墓碑の文字は現在も読み取ることができる。

近松夫妻の墓が尼崎の広済寺にあるのは、日昌上人（一六六七〜一七三八）が正徳四年（一七一四）に広済寺を再興するとき、近松が協力したことによる。一方、近松と法妙寺との関係は、妻の菩提寺が法妙寺だったことによる。なお、近松夫妻の墓について、法妙寺の墓は後年つくられ、広済寺の墓が本墓であるという説がある。広済寺には、明治四三年一月に木崎愛吉ほか六名による近松墓に関する石碑が現在も残されている。

近松門左衛門は、承応二年（一六五三）、越前藩士杉森信義の次男として福井に生まれ、幼名を次郎吉、長じて信盛、巢林子そうりんしといった。その後、父信義が浪人となり一家は京都に移住、一条家などの公家に仕えた。近松が浄瑠璃作家としての地位を確立したのは、宇治加賀掾うじかがのじょうのために書いた「世継曾我」、大坂道頓堀に旗揚げした竹本義太夫（一六五一〜一七一四）のために書いた「出世影清」によってである。また、お初・徳兵衛の心中事件を扱った「曾根崎心中」は、新しい世話浄瑠璃の基礎を作った作品として有名。竹本義太夫が竹本座の経営を竹田出雲（一六九一〜一七五六）に譲り、近松がその座付作者になってからは、義太夫・出雲・近松の三者の協力によって、「冥途の飛脚」や「心中天の網島」、「国性爺合戦」など、次つぎと新しい作品が生み出された。その一方で、近松は傾城事の名手坂田藤十郎（一六四七〜一七〇九）のために歌舞伎脚本を書き、歌舞伎と浄瑠璃の交流に貢献した。享保九年（一七二四）一月に逝去。享年七十二歳。法名は阿耨院あのをん穆矣日一具足居士いちくそくこじ。

〔拓本銘文〕

（広済寺墓碑正面）

阿耨院穆矣日一具足居士

一珠院妙中日事信女

（背面）

享保九甲辰年十一月廿二日

（妙法寺墓碑正面）

阿耨院穆矣日一具足居士

一珠院妙中日事信女

（背面）

享保九甲辰年十一月一日

（台石）

施主

近松氏

正七

〔朱印〕（広済寺・妙法寺墓碑拓本とも）

「好尚所蔵金石」

〔添書〕

（広済寺墓碑拓本）「久々智廣濟寺 近松巢林子碑」

（法妙寺墓碑拓本）「法妙寺近松巢林子碑 其三」

〔参考文献〕

向井芳樹「近松墳墓考―広済寺本墓説―」（『同志社国文学』三〇、一九八八年）

44 十時梅屋母墓碑並墓誌（A四―五三） 一幅

十時梅屋とときばいがい（一七四九〜一八〇四）は、近世後期大坂の文人、画家。名は業のち賜。字は季長のち子羽。号は梅屋・顧亭・清夢軒・天臨閣。通称半蔵。儒学を伊藤東所、書を大谷永庵のち趙陶齋に学んだ。天明四年（一七八四）頃、大坂城加番であった伊勢長島藩主増山河内守正賢（雪斎）の儒臣として仕官した。寛政一二年（一八〇〇）頃に致仕し大坂に住んだ。この間、細合半齋・木村兼葭堂・

浜田杏堂・岡田米山人らと交友を結んだ。

十時梅厓の母の墓碑は、大阪市天王寺区上本町の正念寺境内の無縁仏として集められた墓石群の中に現存している。拓本の寸法は縦六七・九cm、横五一・〇cm。拓影については、墓碑の正面を手拓した左部分は縦六四・〇cm、横三〇・〇cm、墓碑の右側面を手拓した右部分は縦六七・八cm、横一七・八cmである。墓石が密集していること、側面の剥落が進んでいることから、本拓本の右部分が現状では解読しづらくなっている。この点で、本拓本は資料的価値が高い。

正念寺には梅厓の墓もあったが失われ、明治二四（一八九二）年に大阪の画家芳川笛村が追建した「十時梅厓翁之碑」が建っている。

〔拓本銘文〕

寶永六己丑年生于大坂為十時氏妻

性静専老従子于宦竟卒于郷享年八

十有五

寛政五癸丑年九月廿四日卒

本岳誓願大姉

増山河内守臣十時半藏謹建

〔朱印〕

〔好尚手拓金石〕

〔添書〕

「大正六年六月廿六日」、「八丁目寺町／正念寺」、「梅厓母 梅厓被葬于此云」

〔参考文献〕

岸野俊彦「寛政・享和期の名古屋・大坂文化交流―内田蘭渚と十時梅厓・木村兼葎堂の交流を中心に―」（岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』清文堂出版、二〇〇四年）

45 富永芳春他墓碑（A四―五五）七紙

江戸時代中期

富永芳春他墓碑は大阪市天王寺区下寺町の西照寺にある。富永芳春墓碑・芳春夫人安村氏墓碑・毅齋墓碑は本堂裏側に、宗仲夫妻墓碑は本堂の南側に所在して

いる。芳春夫人安村氏は芳春の後妻、毅齋は芳春と先妻金崎氏との子、宗仲夫妻は芳春の親にあたる。墓碑の現状は、芳春墓碑・芳春夫人墓碑は、それほど大きな損傷はみられないが、毅齋墓碑は一部が破損しており、さらに正面と背面の表面が剥落しかけています。宗仲夫妻墓碑には一部に補修の跡がみられる。

拓本は、富永芳春墓碑の正面、芳春夫人墓碑の正面と背面、富永宗仲夫妻墓碑の正面と左側面、富永毅齋墓碑の正面と背面をとったものである。拓本の寸法は、芳春墓碑正面が縦六〇・二cm、横一九・〇cm。芳春夫人墓碑正面が縦六〇・四cm、横一八・六cm、背面が縦六二・〇cm、横二四・一cm。宗仲夫妻墓碑正面が、縦六〇・四cm、横一八・五cm、背面が縦三三・四cm、横一七・六cm。毅齋墓碑正面が縦六〇・六cm、横一七・九cm、背面が縦六一・三cm、横二四・二cmである。

富永芳春（一六八四―一七三九）は、江戸時代中期の大坂商人で、名は徳通、通称は道明寺屋吉左衛門といった。芳春は号。懐徳堂を創設した五同志の一人として知られている。大坂尼崎町（現在の大阪市中央区今橋）に住み、醤油醸造業を営んだ。はじめ五井持軒に学び、持軒没後は三宅石庵に学んだ。享保九年（一七二四）に中井盤庵が懐徳堂を創設しようとしたとき、尼崎町一丁目の隠宅を提供した。元文四年（一七三九）年に五六歳で死去した。

なお、懐徳堂を代表する思想家で『出定後語』の著者として知られる富永仲基は、芳春と後妻との子である。仲基の墓碑の所在は不明だが、明治期に建立された「富永仲基招魂碣」が西照寺に建てられている。

〔拓本銘文〕

〔芳春墓碑正面〕

富永芳春居士墓

〔芳春夫人墓碑正面〕

清信孺人安村氏墓

〔芳春夫人墓碑背面〕

〔人諱佐幾和州立野人考仁山君妣深津氏

配芳春富永君出三男三女長諱基先卒謙齋

先生是也次定堅及重二女夭季女嫁南都福

智院孺人爲人謹慎明悟守儉好施婦德全備

博涉羣書工書及國風有集傳于世寶曆十二年壬午八月十四日終壽七十一葬西照寺

(宗仲夫妻墓碑正面)

富永宗仲居士墓

山口氏貞信婦墓

(宗仲夫妻墓碑左側面)

嫡男徳通建

(毅齋墓碑正面)

富永毅齋居士之墓

(毅齋墓碑背面)

居士姓富永諱信美稱吉左衛門考諱

徳通號芳春妣金崎氏娶真多氏生三

男一女寶永五年戊子十月廿七日生

寶曆六年丙子正月十五日終壽四十

九葬于大坂下寺町西照寺

〔参考文献〕

『浪速叢書第十 稿本大阪訪碑録』(浪速叢書刊行会、一九二九年)、梅谷文夫・

水田紀久『富永仲基研究』(和泉書院、一九八四年)

46 中井竹山墓碑 (A四―五七) 一幅

中井竹山墓碑は大阪市中央区上本町四丁目の誓願寺にある。墓碑の正面に「竹山中井先生墓」とあり、拓本はそれにあたる。拓本の寸法は縦一〇四・〇cm、横一〇一・三cm。軸長は縦一八〇・〇cm、横一一八・五cm。

中井竹山(一七三〇〜一八〇四)は、名を積善、字は子慶、号は竹山、通称は善太といった。懷徳堂二代学主中井整庵の長男であり、次男履軒とともに五井蘭洲の薫陶を受けた。整庵没後の宝暦八年(一七五八)に懷徳堂の預人となった。天明二年(一七八二)三代学主三宅春楼が亡くなり、四代学主となる。竹山は朱子学を奉じつつ、自由な学風の高揚につとめた。蘭洲の荻生徂徠批判書『非物篇』

を校正し、自身も徂徠の『論語微』に批判を加えた『非微』を著した。また、徳川家康の事蹟をまとめた『逸史』の編纂に二七年の歳月を費やしたほか、老中松平定信の諮問に応えた経世論『草茅危言』を著した。また、詩文集として『奠陰集』がある。

〔拓本銘文〕

竹山中井先生墓

〔朱印〕

〔好尚所蔵金石〕

〔参考文献〕

『大阪府史』第六卷 近世編Ⅱ(大阪府、一九八七年)、『新修大阪府史』第三卷・第四卷(大阪府、一九八九年・一九九〇年)、脇田修・岸田知子『懷徳堂とその人々』(大阪大学出版会、一九九七年)、湯浅邦弘『懷徳堂事典』(大阪大学出版会、二〇〇一年)

47 西山宗因墓碑 (A四―六一) 一幅

江戸時代前期

西山宗因墓碑は大阪市北区兎我野町の西福寺に建てられたが、建碑の由来は不明である。墓は、位牌型の六名の合同墓となっている。拓本は縦一二一・〇cm、横三三・五cm。

西山宗因(一六〇五〜一六八二)は、江戸前期の連歌師、俳人。姓は西山、名は豊一、通称次郎作。連歌の号は宗因、俳諧の号は一幽・西翁・梅翁。肥後八代の生まれで、加藤忠広の家老八代城主加藤正方の小姓として仕えた。寛永七年(一六三〇)まで里村昌隆に連歌を学ぶ。正保四年(一六四七)里村家の推挙により大坂天満宮の連歌所宗匠となる。俳諧は宗匠となったところから始め、連歌所宗匠をその子宗春にゆずる頃には、宗因を中心にした俳諧の集団が形成され、談林派と呼ばれた。門人に井原西鶴・岡西惟中・小西来山等がいる。著書に紀行文『津山紀行』、『松島一見記』、連歌『十花千句』、俳諧『蚊柱百句』、『宗因七百韻』等がある。

〔拓本銘文〕

實菴宗春處士 眞山宗眼

(梵字) (キリーク) 實省宗因法師 觀光昌察處士

觀光宗純處士 實光昌林處士

〔朱印〕

〔好尚所藏金石〕

〔添書〕

〔西福寺／宗因碑〕

〔参考文献〕

『浪速叢書第十 稿本大阪訪碑録』(浪速叢書刊行会、一九二九年)、木崎愛吉編
『大日本金石史』第五卷(歴史図書社、一九七二年)

48 本阿弥光悦墓碑 (A四一六七) 一幅

寛永一四年(一六三七)

本阿弥光悦墓碑は京都市北区鷹峰光悦町の大虚山光悦寺に所在する。板碑状の墓石正面には「南無妙法蓮華經」了寂院光悦日豫居士」及び没年が刻まれている。拓本は縦四二・〇cm、横三一・〇cmで、「南無妙法蓮華經」の部分に欠く。拓墨の状態からみて本来は上部も存在したと考えられる。

本阿弥光悦(一五五八〜一六三七)は、室町時代よりの刀剣の鑑定(めきき)、磨礪(とぎ)、淨拭(のごひ)の三業で知られ、京中の法華大将と称された有力信徒の町衆本阿弥家に父光二・母妙秀の長子として生まれる。父の分家に伴い、本阿弥家三業から半ば解放され、家産を背景に芸術活動に専念する。書、陶芸、漆芸、茶道等に秀で、特に書は近衛信尹、松花堂昭乗とともに「寛永の三筆」の一人に挙げられる。元和元年(一六一五)、徳川家康より洛北鷹峰の地を拝領、この地に一族、職人とともに移り、芸術の里を興す。なお、光悦寺は、光悦の屋敷地内に建てられた先祖供養の位牌堂を、光悦の死後、寺に改めたものである。

〔拓本銘文〕

寛永十四□稔

鷹峯山

了寂院光悦日豫居士

太虚庵

仲春上澣三日

〔朱印〕

〔好尚所藏金石〕

〔添書〕

〔洛北鷹峰本阿弥光悦墓 武岡楽山君所贈／大正元年十月廿九日〕

〔参考文献〕

『京都大事典』(淡交社、一九八四年)、竹村俊則『京の墓碑めぐり』(京都新聞社、一九八五年)

【板石・石塔婆類】

49 品川相模守時頼塔 (A五一一) 一紙

弘長三年(一六三三)

拓本の寸法は、縦三六・〇cm、横三六・〇cm、拓影が縦三二・〇cm、横三四・〇cmである。銘文の「相模守平□□時頼」は北条時頼のこととされる。弘長三年(一二六三)は時頼の没年であり、官位も時頼のものと一致する。平姓で書かれているのは、北条氏が平氏の出身であったためであると考えられる。

北条時頼に関係のある墓碑・塔は、鎌倉の明月院、伊豆の最明寺、品川の海晏寺に現存している。本拓本は、品川(海晏寺)に現存している供養塔(「時頼墓」とされている)の地輪部背面からとったものである。なお、拓本にはみられないが、供養塔の地輪部正面には時頼の法名「最明寺殿覺了房道崇」が刻まれている。

〔拓本銘文〕

弘長三年十一月廿一日

正五位下行相模守平□□時頼

〔朱印〕

〔好尚所藏金石〕

〔添書〕

「品川時頼塔」、〔朱書〕「第百九拾五号」

〔参考文献〕

『品川歴史館特別展図録 大井―海に発展するまち―』（品川区教育委員会、二〇〇六年）

50 逢坂一心寺元和元年本多忠朝石塔（A五―六八―一）一紙 元和元年（二六一五）

付 宝永五年家臣五十追悼碑（A五―六八―二）一紙 宝永五年（二七〇八）
 一心寺の境内にあるひととき大きな五輪塔である。忠朝の五輪塔兩脇には、ともに討死した家臣の五輪塔九基と、箱型墓石一基が並ぶ。

本多忠朝（一五八二―一六一五）は、徳川四天王と呼ばれた徳川家康の側近、本多忠勝の次男。慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の戦いで初陣を飾り、翌六年には従五位下出雲守に叙任、五万石で上総大多喜城の城主となる。慶長一九年（二六一四）の大坂冬の陣、慶長二〇年（二六一五）の大坂夏の陣に従軍する。夏の陣では、天王寺口の先鋒を務めたが、五月七日の戦いで豊臣方の毛利勝永隊と対陣し、天王寺表において討死した。

本多忠朝石塔の拓本は三枚を貼り合わせて一紙としており、「其一」から「其三」までの番号が付されている。「其一」と「其二」が、五輪塔地輪部の正面、「其三」が地輪部の右面にあたる。寸法は縦八二・〇cm、横一〇五・八cmである。家臣五十追悼碑拓本は「其四」と付され、寸法は、縦八三・〇cm、横五三・二cm。宝永五年（二七〇八）に、五輪塔脇に建立された箱型墓石の拓影で、討死した家臣五名の名前がみえる。

忠朝の墓は『撰陽群談』や『撰津名所図会』といった江戸時代の地誌に取り上げられており、また、在坂の武士が墓参する事例も見受けられる。天保一五年（二八四四）には、大坂代官であった竹垣直道が忠朝の墓に墓参し、家臣の五輪塔について「字滅して難読事」と、その状況を書き留めている。

軍記物の『難波戦記』や講談で武勇が伝わる忠朝であるが、現在では、忠朝の酒にまつわる伝承から「酒封じの神」として信仰を集めている。

〔拓本碑文〕

（其一・五輪塔地輪部正面・南面）

前本多出雲守藤原朝臣忠朝

三光院殿岸誉良玄居士

（朱書）（ア） （線刻蓮華）

（其二・五輪塔地輪部正面・南面）

元和元乙卯年五月七日

（其三・五輪塔地輪部正面から右・西面）

（朱書）（ア） 施主□□謹敬白

（其四・本多忠朝公の五輪塔左横の箱型墓石）

村越茂兵衛

藤平治右衛門

本多出雲守家士

土屋太郎八

土橋加兵衛

稲毛市郎兵衛

元和元年大坂御陳之節五月七日日本多氏家士十四人致討死之

撰陽軍談〔九〕巻雖出九人右五人不見此書依之今改建之者也

宝永五戊子年五月七日

〔朱印〕（二紙とも）

〔好尚手拓金石〕

〔添書〕

「大正三年十一月十二日 一心寺 其一」、「其二」、「其三」、「其四」

〔参考文献〕

千葉県立中央博物館編『本多忠朝の時代 平成一八年度企画展 関ヶ原から大坂の陣』（千葉県立中央博物館、二〇〇六年）、藪田貫編『なにわ・大阪文化遺産学叢書五 大坂代官竹垣直道日記（二）』（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、二〇〇八年）

51 正和四年日岡山宝塔（A五―九九）一紙

正和四年（二二一五）

兵庫県加古川市加古川町大野の日岡山には日岡陵（景行天皇皇后播磨稲日大郎

姫命陵に治定)が存在するが、その日岡山南麓にある常楽寺の境内入口付近に三基の石塔が並んで建っている。中央の石塔が当宝塔である。元は九尺塔であったと考えられており、宝塔としては数少ない大型の塔である。左右の扉形の中央部に縦二行計一五字を刻む。花崗岩製で、石材は西撰六甲山産の御影石とされ、山麓の石屋で製作したものを、舟便によって加古川下流の高砂へ運び、さらに川舟によって搬入したものとされる。現状としては宝塔・銘文ともに残存していない。

拓本は縦三二・〇cm、横一五・〇cm。『播磨鑑』には、塔下に石函があり、その中に壺と黄金の器があり、「宝生山常楽寺院主文勤大僧正菩薩比丘弘信為母骨納之」という頌文が入っていた、と書かれていることから、この宝塔は文観が常楽寺に住持していたとき、その母をこの宝塔の下に葬ったと考えられている。ただし、文観弘真が文勤弘信と記されている理由は不明で、銘文にみえる「願主沙弥道智」との関係も不詳である。

〔拓本銘文〕

正和四年乙卯八月日

願主沙弥道智

〔朱印〕

「好尚所藏金石」

〔添書〕

「播州日岡陵下ノ寺ノ日岡宝塔ノ加古郡志(三四七頁)」

〔参考文献〕

『加古川市史』第七卷(加古川市、一九八五年)

52 山名時氏宝篋印塔(A五―一〇五)一紙

応安四年(一二七二)

山名時氏宝篋印塔は享保年間(一七二六―一七三六)に池田河内守清定(鳥取藩主池田光仲第五子)の屋敷造営に際して掘り出され、当時久松山麗にあった一行寺(浄土宗、鳥取市戎町)に運ばれたという。かつては上部に別の五輪塔が乗せられていたが、現在は基礎部分だけが残存し、同寺屋内に安置されている。

山名時氏(？―一三七二)は南北朝時代の武将で、新田氏の支族でありながら足利尊氏に従って戦功を上げた。観応の擾乱では足利直義派に属し、その死後は南朝に帰順する。さらに足利直冬を奉じて尊氏・義詮派に対抗し、山陰地方を中心に勢力を拡大した。後に幕府へ帰参して因幡を含む七ヶ国の安堵をうけ、応安元年(一三六八)には足利義満から評定衆に任じられる。応安三年(一三七〇)一二月に隠居剃髪、翌応安四年(一三七二)二月二十八日に没し、伯耆国大雄山光孝寺(倉吉市)に葬られた。法名を光孝寺殿鎮国道静居士といい、没年には六九歳・七三歳の二説があつて確定されていない。

拓本は縦三六・四cm、横一一・三・〇cm。拓影は右より縦二九・三cm、横三五・一cm、縦二〇・八cm、横三五・一cm、縦二〇・七cm、横三五・六cm。塔の基礎部三面に彫られた銘文と蓮華模様を写す。本塔の性格については「因州太守孝子源氏重造立之」の一節から、当時の因幡守護と推定される子の氏重が供養のために建立したとする通説と、「壽塔」の判読により山名時氏の生前に建立されたとする説がある。

〔拓本銘文〕

因州太守孝子

源氏重造立之

右(為)鎮国(静)公

大種定門壽塔

應安四辛亥歳

仲呂廿八日記

〔朱印〕

「好尚所拓」

〔添書〕

「應安四辛亥歳仲呂廿八日記」

「鳥取一行寺ノ山名時氏塔 大正二年九月十二日ノ手嶋道雄君ノ所贈」

〔朱印〕「第参百貳拾九號」、「一」、「二」、「三」

〔参考文献〕

西尾護『鳥取藩以前の備前池田・山名氏墓誌』(一九八五年)、青木壽光『山陰南北朝史蹟(法塔)考』(私家版、一九八六年)

53 稲淵龍福寺竹野王塔 (A五―一一八) 一紙

天平勝宝三年 (七五二)

竹野王塔は奈良県高市郡明日香村大字稲淵にある龍福寺境内に安置されている。現在は四重層塔であるが、もと五重層塔であったと考えられている。石塔は第一層軸部のみ花崗岩を使用し、他は凝灰岩が用いられる。銘文は第一層軸部の四面に陰刻されている。拓本は縦二三・三〇cm、横六九・三cm。四紙を一紙に張り継ぐ。拓本右隅に鉛筆で一紙ごとに上から、「一表」、「二右側」、「三裏」、「四右側四」、と記す。これは拓本を張り継ぐ段階で順序を誤らないために付された採拓者による注記であろう。銘文は石塔東面より時計回りに陰刻されているが、風化が甚だしく判読できる文字はほぼ東面と北面に限られる。

北面の竹野王は長屋王家木簡に「竹野王子(皇子)」として米の支給を受けている竹野女王と同一人物である。竹野王子を長屋王の妹と見る説、草壁皇子の夫人の一人とみる説、藤原武智麻呂の妻にあて、その娘が聖武夫人となったとする説などがあるが、その系譜は明らかではない。天平十一年(七三九)正月一三日に正四位下から従三位に叙されて以降、天平勝宝元年(七四九)四月一四日に正三位、同三年正月二五日に従二位に昇叙されている。

〔拓本銘文〕

(東面)

昔阿育王□□□□

塔□□□□□□□□_(内カ)

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□

其来尚□□□□□□_(年カ)

□□□□□□□□

□□□□□□□□

之峯北□□□□田之谷_(峠カ)

安□□□□之□_(田カ)

□□□□之□

(南面)

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□_(有カ)

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□

□□□□□□□□_(同道百カ)

□□□□□□□□

□□□□□□□□

天平勝宝三年歲次

辛卯四月廿四日□

子

從二位竹野王

(朱印)

「好尚所拓」、「好尚所蔵金石」、「高市郡字稲淵龍福寺」

〔添書〕

「大和高市郡高市村稲淵 龍福寺／從二位竹野王塔／辛亥四月十六日」

〔参考百八號〕

〔参考文献〕

鬼頭清明「長屋王家木簡二題」(『白山史学』二六、一九九〇年)、寺崎保広『長屋

王』(吉川弘文館、一九九九年)

54 兵庫平相國十三重塔（A五―一九）一紙

弘安九年（二二八〇）

神戸市兵庫区切戸町にある鎌倉時代の石造十三重塔で、清盛塚と呼び習わされている。花崗岩製で総高八・五m。相輪は後補。基礎の台石側面に「加安九／二月」と刻む。『吾妻鏡』によると、平清盛は養和元年（一一八一）閏二月四日に京都で没し、その遺骨は播磨国山田（垂水区舞子付近）の法花堂に納められた。『平家物語』巻六、入道死去には、遺骨は摂津国「経の島」に納められたとある。清盛の遺骨を納めたのがこの清盛塚であり、百余年後の弘安九年に北条貞時が石塔を建立したと伝えられてきたが、大正一二年（一九二三）に道路拡張工事のため、もとの位置より北東一・一mの現在地に移動させる際、発掘調査が行われ、墳墓でないことが確認された。拓本は左右二枚の料紙を張り継ぎ、合わせて縦四八・〇cm、横五四・五cmを計る。

〔拓本銘文〕

加安九

二月

〔朱印〕

「好尚所拓」、「好尚所藏金石」

〔添書〕

「大正二年六月八日／兵庫平相國十三塔／傳平貞時建」、「第拾志躰」^{〔本誌〕}

〔参考文献〕

『兵庫県史』史料編 中世四（兵庫県、一九八九年）、『兵庫県の地名』I（平凡社、二〇〇一年）

55 野崎慈眼寺永仁二年塔（A五―一二）一紙

永仁二年（二二九四）

大阪府大東市野崎にある福聚山慈眼寺（通称、野崎観音）本堂の裏山に現存する。昭和五八年（一九八三）七月、大東市指定文化財第二号に指定。造立銘は永仁二年（二二九四）とあり、七四字の金石文を刻む北河内最古の層塔である。高さ三・三m、花崗岩製で、相輪は失われているが、全体の造りや梵字の刻まれ方

から、鎌倉時代の特徴をよく示す資料である。この石塔は、昭和九年の室戸台風で倒壊した際、最上部の屋根石を失い、八層で組み直された。しかし、後に屋根石が発見され、平成一七年（二〇〇五）に方角を正して組み直し、再び九層に復元して現在に至る。

拓本は石造九重層塔の礎石部の銘文を手拓したもので、二枚を張り継いで一紙としている。拓影の右側は石塔の北面を、中央は東面を、左側は南面をそれぞれ手拓したものである。寸法は縦三八・一cm、横一七九・〇cm。風化のため全文を読みとることはできないが、沙弥入蓮と秦氏が、主君と両親の追善供養のために造立した旨が刻まれる。在俗信者の入蓮がいかなる人物であったかは不明であるが、秦氏は大陸系渡来人の子孫と考えられ、造立当時、当地方の有力者であったと思われる。寺説によると、この地に住む入蓮が、永仁二年、秦氏の協力で寺堂を修造した時にこの石塔を建てたという。寺堂は永禄八年（一五六五）松永久秀の兵火で焼失し、その後再建された。

〔拓本銘文〕

歌 白

志者為

主 君並二親

稱 靈頓證

造 起立塔

奉 寄進同

收也

自

一余者入

出離乃至

平等利益矣

永仁二年

四月八日

願主沙彌

入蓮敬白

同願主

秦氏 □

敬白

〔朱印〕

「好尚所拓」、「好尚所藏金石」

〔添書〕

「辛亥四月三十日／河内野崎慈眼寺塔」、「右」、「中」、「左」

〔参考文獻〕
〔朱書〕
「第百六十一號」

〔参考文献〕

平尾兵吾『北河内郡史蹟史話』（大阪府北河内郡教育会、一九三二年）

【石仏造像銘類】

56 薬師寺仏足石並銘（A六一―一） 四幅

天平勝宝五年（七五三）

仏足石は、奈良市西ノ京の薬師寺大講堂に安置され、国宝に指定されている。伝来は明らかではなく、唐招提寺や興福寺等、薬師寺以外の寺にあったとする説がある。薬師寺における仏足石の存在は、寛永年間（一六二四―一六四四）ころより確認される。また一七世紀中葉以前の成立と考えられる「大和国添下郡西京薬師寺絵図」には、金堂の西北に「仏足」として歌碑とともに描かれている。仏足石は、上面に仏足跡が彫られ、正面・左側面・右側面・背面に銘文が方面内に刻まれる。その他、散華や飛雲、竜王帰順図なども線刻される。角礫岩製で高さ六九・〇cm、奥行七四・五cm、幅一〇八・〇cmである。

拓本の寸法は、上面が縦六七・〇cm、横七六・〇cm、軸長一四五・〇cm、正面が縦六二・三cm、横一一三・〇cm、軸長一四四・〇cm、左側面が縦三八・八cm、横六四・五cm、軸長一一〇・〇cm、背面／右側面（散華含む）が縦四四・九cm、横九八・〇cm／縦三七・五cm、横一七・五cm、軸長一二五・〇cmである。側面銘文のうち正面には、「西域伝」や『観仏三昧海経』を引き、仏足跡の信仰と功德が綴ら

れている。左側面には、唐人王玄策が中天竺の鹿野園にて転写した仏足跡図を第一本とし、日本人黄書本實が唐都長安の普光寺にて転写し、平城京右京四條一坊の禪院に伝来する仏足跡図を第二本として、これを写した第三本により天平勝宝五年七月に一三箇日かかって仏足石が彫られた旨を記す。檀主は文室真人智努、画師は越田安万、書写は神石手であった。

拓本にはないが左側面右下に「知識家口男女大小」、方面外右および第一〇行方面外下の二ヶ所に「三國真人淨足」といった協力者と考えられる人々の名前も刻まれている。背面には、智努の亡妻茨田女王のため発願されたことが述べられ、右側面には三法印の偈が彫られる。以上の銘文により仏足石製作の背景を知ることができ、仏足跡信仰を示す遺品として貴重である。

なお、添書にみえる「織田鷹洲翁」は勤王家、農学者であった織田完之であり、「武岡樂山」は実業家で和漢の学にも通じた武岡豊太である。

〔拓本銘文〕

〔正面〕

釋迦牟尼佛跡圖

案西域傳云令摩揭陁國昔阿育王方精舍中有一大□□□□

有佛跡各長一尺八寸廣六寸輪相花文十指各異□□□□_{是佛}

欲涅槃北趣拘尸南望王□□足所踏處近為金耳國商□□□□_遷

不信正法毀壞佛跡鑿已還生文相如故又捨□□□□

中尋復本處今現圖寫所在流布觀佛三昧□□□□_{又力}

若人見佛足跡内心敬重无量衆罪由比而滅今□□□□_其

非有幸之所致采又北印度烏仗那國□□□□□□□□_{東北二百六十里}

入大山有龍泉河源春□□含□□晨夕飛雪□□□□□□_{有暴惡}

龍常雨水災如來往化令金剛神以杵□□□□□□□□_{聖學}

怖歸依於佛恐惡心起留跡示之於泉南大石上現□□□□□□_其

跡随心淺深量有長短今丘慈國城北四十里寺佛□□□□□□_堂

中玉石之上亦有佛跡齋日放光道俗至時同往□□□□□□

依觀佛三昧經佛在世時若有衆生見佛行者□□□□□□_及

見千輻輪相即除千劫極重惡罪佛去世後□□□□□□_想

佛行者亦除千劫極重惡業雖不想行見佛迹〔若見〕□□
像行者步步之中亦除千〔劫〕極重惡業觀如〔米〕□□
足下平滿不容一毛足下千輻輪相□□具足魚鱗相〔次〕□□
金剛杵相足跟亦有梵王頂相衆蠱之相不遇諸〔惡〕□□
是為休祥

(左側面)

大唐使人王玄策向中天〔空鹿〕□□
野蘭中轉法輪〔處力〕□□因見〔跡〕□□
得轉寫搭是第一本
日本使人黃書本實向
大唐國於普光〔寺〕□□得轉〔寫搭〕□□
是第二本此本在
右京四〔條〕□□坊〔禪院〕□□向禪
院壇披見神跡敬〔轉寫〕□□
搭是第三本〔從〕□□天平勝
寶五年歲〔次美〕□□巳七月十五日盡〔并七〕□□
日并一十三箇日作〔勝〕□□檀〔主從〕□□
智努王以天平〔勝〕□□
寶四年歲次壬辰九月七日
改王字成文室真人智努
畫〔師〕□越田安万書寫
神石手□□□□人足〔心〕□□
近仕□□□□□□

(右側面・背面)

至心發願為
亡夫人從四位下
茨田郡主法

名良式敬寫
釋迦如来神
跡伏願夫人
之靈駕遊
无勝之妙邦
受□□□之
聖□永脫有
漏高證无為同
霑三界共契一真

(右側面)

諸行无常
諸法无我
涅槃寂静
〔朱印〕(四幅とも)
「好尚所拓」、「好尚所藏金石」
〔添書〕
「上面共五」
「左面共五」
「背面共五」、「右面共五ノ内」
「正面共五」、「大正二年八月十七日／両織田鷹洲翁武岡菜山父子共拓」
〔参考文献〕
東野治之「薬師寺仏足石記と龍福寺石塔銘」(『日本古代金石文の研究』、岩波書店、二〇〇四年)、蔵中しのぶ「薬師寺「仏足石記」所引「西域伝」攷」(『東洋研究』一六一、二〇〇六年)

(参考) 薬師寺仏足石 (A六―一―二) 一幅

仏足石とは、釈尊の足形を刻んだ石のことである。釈尊は、自身の像をつくることを禁じていたため、釈尊を象徴するものとして、足跡をもって間接的に表現

された。拓本は縦五八・四cm、横六六・九cm、軸長は一一三・二cm。

仏足の足裏には一〇数個の模様を描かれている。後周・顯徳元年(九五四)に、僧義楚によって書かれた『義楚六帖』によると、中央部には千輻輪という法輪、五指には花形の卍、関節の筋が刻まれている。足の内側から外側へかけて、宝剑(金剛杵のものもあるが、共に敵を破り悪をくたく剣)、双鱼(豊稜と生産をあらわす)、通身(指の根元から引かれた二本の線)、花瓶(宝の入った瓶)、螺王(衆生を集めて法を宣布する法螺貝)を順に配す。右足には千輻輪の左側に月王(月紋)がある。踵部には梵王頂と小さな法輪がある。

〔朱印〕

〔好尚所蔵金石〕

〔添書〕

〔木刻〕

〔参考文献〕

丹羽基二『図説世界の仏足石 仏足石から見た仏教』(名著出版、一九九二年)、奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観』補訂版第六卷(岩波書店、二〇〇〇年)。

57 八尾常光寺山門内石地藏銘 (A六―二三) 二紙

永祿元年(一五五八)

常光寺は八尾市本町にある地藏信仰で有名な寺院である。常光寺の地藏堂の起源は平安時代にまでさかのぼると言われている。戦国時代に南禅寺金地院住職であった靖叔徳林により臨済宗南禅寺派の寺院となった。近世では、徳川家康の外交・行政を担当した人物である以心崇伝の抱え寺となり、徳川方の保護を得た。

拓本は二枚を貼り合わせて一紙としている。寸法は縦八二・六cm、横二五・八cm。

この銘が彫られた石地藏は常光寺庫裏の玄関前にある。高さ一五三cmの花崗岩の舟形光背を背に、蓮台上に立つ地藏菩薩の姿が彫刻されている。地藏菩薩は左手に宝珠、右手に錫杖を持っている。江戸時代に成立した『河内名所図会』によると、常光寺では毎年七月二四日に地藏盆が修されたとある。銘文の日付は地藏盆の日付にあたる。

〔拓本銘文〕

奉法華千部成就首章阿弥妙法蓮華□

永祿元年戊午七月廿四日□□□□□□敬白

〔朱印〕

〔好尚所拓〕

〔添書〕

〔大正三年十二月七日 八尾常光寺山門内石地像 一〕

〔文云 永祿元年戊午七月廿四日□□□□□□敬白 二〕

〔参考文献〕

澤井浩三(文・写真)・八尾市総務部公聴課編『八尾の古文化財 その四 石造美術・古瓦』(八尾市、一九七八年)、『古文書・絵図にみる近世の常光寺』(八尾市立歴史民俗資料館、一九九七年)

58 観心寺阿弥陀像光背銘 (A六―六七) 二紙

齊明四年(六五八年)

大阪府河内長野市寺元にある観心寺の銅造観音菩薩立像に付属していた光背と伝えられる。幅一一・五cm、金銅製で、小さな宝珠形の頭光の裏面中央に上下二本と縦に八本の野を線彫にして七行にわたって六二字を刻む。観心寺旧蔵、現在は根津美術館蔵。

銘文の内容は、妻が阿弥陀仏を造像し、その功德によって亡夫と七世父母が浄土に生まれることを願うというものである。また、銘文中の「戊午年」は、齊明天皇四年(六五八)と推定されている。阿弥陀信仰の史料上の初見は、舒明天皇二年(六四〇)の惠隠による『無量寿経』講説の事例であり、持統三年(六八九)四月に新羅が金銅阿弥陀像を献納し、同六年閏五月には唐の大使郭務儆が故天智天皇のために造った阿弥陀像を上送せよという詔が出ている。これらから、阿弥陀信仰は大化前後から興隆したと思われる、この銘文はその具体的な早い例として注目される。

拓本は、縦三二・七cm、横三三・五cm。拓影は、縦一七・二cm、横一一・五cm。

〔拓本銘文〕

戊午年十二月為命過名

伊之沙古〔註〕其妻名汗麻

尾古敬造弥陀佛像以

此功德願 過往其夫

及以七世父母生々世々恒生

浄土乃至法界衆生

悉同此願〔註〕

〔朱印〕

「好尚所拓」、「好尚所蔵金石」

〔添書〕

「大正二年四月十三日／河内観心寺」

〔裏書〕

「観心寺阿弥陀院造像記」

〔参考文献〕

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』（同朋社、

一九七九年）

【燈籠類】

59 道明寺土師神社石燈（A七―三）一紙

康元二年（一二五七）

大阪府藤井寺市の道明寺天満宮所蔵の石燈籠。本来は東大寺天地院にあったものが、何らかの理由で福岡藩主黒田家の園中に移され、その後大坂の両替商大坂屋大吉により道明寺に奉納され、梅香院の庭に立てられたと伝えられる。現在は藤井寺市の指定文化財となっている。石燈籠の高さは一七六cm、六角型で花崗岩製である。基礎の部分の背が高く、その分竿を短くしている。中台も基礎に対してやや厚くなっている。火袋は六角形になっており、火口の反対側の側面は凹窓、その他の四面は半ば以上を縦連子にしている。笠はやや低めで宝珠を置いている

が請花はない。円柱の竿の中節以上に三字ずつ八行にわたる銘がある。

拓本は縦三四・〇cm、横八三・一cm、拓影は縦二九・〇cm、横七六・五cm。銘文により康元二年（一二五七）に製作されたことが分かり、このことから紀年銘のある石燈籠の完成品として、京都市上京区の元鴻池邸、東大寺法華堂前のものに次ぐ日本で三番目に古い作品であるとされる。

〔拓本銘文〕

奉法入

天地院〔勢〕

御寶殿

康元二

年丁巳

正月十

五日造

立畢

〔朱印〕

「好尚所蔵金石」、「好尚所拓」

〔添書〕

「國寶／壬子十月十三日拓／河内道明寺土師神社／石燈」、「第七號」〔朱書〕

〔参考文献〕

福地謙四郎『日本の石燈籠』（理工学社、一九七八年）、『藤井寺市史』第十卷

史料編八下（藤井寺市、一九九三年）

60 栄山寺石燈（A七―五）一紙

弘安七年（一二七九）

栄山寺石燈は、弘安七年（一二七九）に栄山寺に建てられた。栄山寺は養老三
年（七一九）藤原武智麻呂の創建によるとし、藤原氏南家の氏寺として栄え、南
北朝時代には長慶天皇の行宮ともなった。しかし、室町時代以降、再三の火災に
遭い、しだいに栄山寺は衰微していった。

石燈は現在も本堂前に立つ。本石燈は、高さ二四三cmの花崗岩製の六角円柱形

であり、火袋の周囲や中台には格狭間を置き、竿の上中下の三節は連珠文を施す。火袋には二面の火口があり、二面に「ベイ」、「ウン」の梵字を刻む銘文は、竿の北面・南面に中節をはさんで上下にあるが、本堂が焼失した際の余燼のため、南面の表面は荒れており、判読が難しい。「俊清」については「快清」とする説もある。本拓本には梵字部分はなく、銘文のみ採拓している。法量は縦六九・〇cm、横六〇・〇cm。

〔銘文〕

〔北面〕 栄山寺 勸進良覺

〔南面〕 弘安七甲 俊清

〔朱印〕

「好尚所拓」、「好尚所蔵金石」、円印

〔添書〕

〔朱書〕
「第参百参拾九號」

〔参考文献〕

福地謙四郎『日本の石燈籠』（理工社、一九七八年）、『五條市史』史料（五條市役所、一九八七年）

61 春日神社石燈（A七―六）二紙

延慶二年（一三〇九）、江戸時代追刻

大阪府茨木市春日五丁目の春日神社にある六角形の石燈籠。花崗岩製で総高一八八cm。重要文化財に指定されている。円形の竿の部分、中節の上下に刻まれた銘文を各一紙に採拓している。拓本は上段の一紙が縦四〇・〇cm、横七〇・〇cm、下段の一紙が縦三八・五cm、横七〇・〇cm。上段は楷書で三行、摂州嶋下郡倍加村の春日大明神である旨を刻むが、本拓本では一行が料紙端部にかかり判読困難となっている。上段は江戸時代の追刻とみられる。下段は行書で七行、高良社の石燈籠であり、延慶二年（一三〇九）に願主紀日弘が造立したことを記す。「高良社」は筑後国一宮の高良社かとされるが、石清水八幡宮の境内にも、古くから摂社として高良社が勧請され、信仰を集めていた（『徒然草』第五二段）。茨木市の春日神社がかつて高良社と称されていた可能性を示唆する資料といえる。

〔拓本銘文〕

〔上段〕 倍加村／春日大明神／□□□□□□□□
〔摂州嶋下郡〕

〔下段〕 高良社／石燈籠／延慶二／八月日／願主／紀日弘／敬白

〔参考文献〕

『大阪府史蹟名勝天然記念物』第二冊（大阪府学務部、一九二八年）、天沼俊一『石燈籠總論・年表』（スズカケ出版部、一九三三年）、藤沢一夫『摂北古金石新資料』（『考古学雑誌』二四―一一、一九三四年）、天岸正男・奥村隆彦『大阪金石志―石造美術』（三重県郷土資料刊行会、一九七三年）

62 日部神社石燈（A七―一一）二紙

正平二四年（一二六九）

日部神社は、大阪府堺市西区草部に所在する延喜式内社で、神武天皇・日臣命・彦坐命を祀る。もとは、草部集落内の字輪内にあつたが、明治四四年（一九一一）に、旧八坂神社であつた現在地に遷座された。本殿（旧八坂神社本殿）は、正面切妻造・背面入母屋造・本瓦葺、室町時代初期の建築で、重要文化財に指定されている。本殿脇には二基の石燈籠がある。石燈籠は、和泉砂岩製で、高さ一八八cm、四角型で、ほぼ全面に装飾がなされており、同時代のものとしては類例が少なく、美術史的価値が高いとされる。向かつて右側の竿部には、「正平二二年卯月八日」との銘があり、楠木正儀の寄進と伝えられ、重要文化財に指定されている。保存修理の後、現在は境内の収蔵庫内に移され、本殿脇には複製品が置かれている。

拓本は二紙で、一紙目は火袋部の四面と中台部の片側面の拓本三紙を貼り合わせており、法量は縦三六・八cm、横一一・二cm。二紙目は、竿部の正面と両側面の八紙を貼り合わせており（正面部分は上下逆）、法量は縦八一・五cm、横六四・五cmである。火袋には、四天王立像のほか、宝相華唐草文・唐草文・日月輪・雷文が、火袋を受ける中台側面には唐草文が描かれている。また、竿には正面に昇り龍が描かれ、向かつて右側面には造立の年紀が、左側面にはこの石燈籠が奉納された場所が刻まれており、この石燈籠が、正平二四年四月八日に和泉国大鳥郡草部上条の牛頭天王のために造立されたことがわかる。草部上条は、現在の堺市西区草部・菱木地区にあたり、牛頭天王は八坂神社の祭神であることから、こ

の石燈籠は、現在の日部神社が移る以前の八坂神社に奉納されたもので、造立以来、現在地にあると考えられる。

〔拓本銘文〕

第一紙

銘文なし（四天王立像などの文様）

第二紙

正平二十二年西卯月八日

（昇り籠の文様）

和泉国大島郡草部上条牛頭天王燈籠也

〔朱印〕

第一紙

「好尚所拓」、「好尚所蔵金石」

第二紙

「好尚所拓」、「好尚所蔵金石」

〔添書〕

第一紙

〔二六〕、「泉劔日部神社正平廿四年石燈火袋」、「（朱書）第二百拾七號ノ二」

第二紙

竿右側面拓本右下に「泉州日部神社石燈中央龍誤上下顛倒」

竿正面拓本右下に「此背面鑿降籠」、左下に「大正元年九月朔拓」・「丁」

竿左側面右中央に「和泉國大島郡草部上条牛頭天王燈籠也正平廿二年西卯月八日」

〔参考文献〕

天沼俊一『慶長以前の石燈籠』（スズカケ出版部、一九三七年）、堺市教育委員会編『ハンドブック堺の文化財』（堺市教育委員会、一九九四年）

63 黒田神社石燈（A七―一五）四紙

建徳三年（一三七二）

大阪府藤井寺市北条一丁目の黒田神社に伝わる四角形の石燈籠。花崗岩製で総高二〇cm。方形竿の四面に銘文を刻む。建徳三年（一三七二）三月に星田里の

二〇坪などを「志紀宮」に寄進し、規式を定めたことを述べる。拓本は四紙とも縦八七・〇cm、横三四・〇cm。木崎愛吉の論考によると、大正一〇年（一九二一）四月三日に神武天皇陵を参拝した木崎は、同行の土師神社司南坊城良興と誉田神社社司中幸男からこの石燈のことを聞き、翌四日、南坊城ととも黒田神社を訪ね、実物を手拓したという。木崎は一部字句の判読から、建徳三年に神領が定められ、黒田神社が再興されたことを示すとみたが、斎藤孝氏の解説によって、「志紀宮」への如法経料田の寄進を記録した文書様の銘文であることが判明した。斎藤氏によると、蓮蔵・社僧田觀らが二親と自身の滅罪生善・極樂往生を願って、如法経料田を寄進したことを刻んだもので、本来は黒田神社ではなく志貴県主神社か志疑神社にあった石燈であろうという。

如法経とは法の如く法華経を書写することで、一一世紀前半に比叡山横川を聖地とする円仁流の如法経が成立し、鎌倉時代には洛中貴族社会で如法経信仰が流行した。一三世紀末から一四世紀にかけて、天台系地方寺院や山門領荘園内の村堂・鎮守社において如法経会が開催されるようになる。如法経会とは死者の追善供養や自身の逆修のため、如法経道場に天台僧を聖として招き、如法経料田などを財源として、法華経の書写・奉納を行うもので、地域住民の信仰の中核として一五世紀前半をピークに盛行した。黒田神社の石燈銘文は、如法経道場としての「志紀宮」に如法経料田を寄進し、如法経会に関わる規式を定めたことを記録したもので、この地域に天台系の行事が浸透し、地域住民の信仰の対象となっていたことを物語るものである。

〔拓本銘文〕

〔東面〕 奉造立志紀宮

願主南無太子方

建徳三年三月日

〔南面〕 奉寄進 志紀宮不断如法経料田押

合

星田里廿坪自西御靈為往生極樂蓮蔵宣人者

樋爪里四坪自北為二親御靈往生極樂社僧田觀宣人者

胸方里卅坪自北為二親往生極樂宣人者

(西面) 垂水里七坪^{〔宣人者〕} 為自身滅罪生善往生極樂^{〔聖〕} 〇

澁河郡衣指里十四坪^{〔長〕} 宣人者為二親并自身^{〔入道〕} 〇

惣為有縁無縁法界衆生往生極樂也^{〔敬白〕} 〇

右奉寄進於如法經料田者^〇 為^〇 長^〇

為嚴重如法料田之^〇 親類^〇 爾^〇

(北面) 并甲乙人寄事於左右^〇 為一幅一錢押領^〇

定置規式事

於三年経猶於不可^〇

能々可嚴守此方^〇 事^〇

不行之状如件

〔朱印〕

「好尚所拓」(四紙とも)

〔添書〕

「辛酉四月初四、與南坊城良興君拱手拓／南河内郡道明寺村北条式内黒田神社石燈」、「建徳三年十月／改元文中／北朝應安五年」

〔参考文献〕

木崎愛吉「建徳三年の石燈」(『考古学雑誌』一一一九、一九二二年)、同『大日本金石史』第二卷(歴史図書社、一九七二年)、『藤井寺市史』第一〇卷(藤井寺市、一九九三年)、齋藤孝「大阪府南河内郡道明寺町北条黒田神社石燈籠とその銘文」(『史泉』一三、一九六七年)、林文理「中世如法経信仰の展開と構造」(中世寺院史研究会『中世寺院史の研究』、法蔵館、一九八八年)

64 桜井神社(旧国神社) 石燈(A七―一七) 一紙

応永十九年(一四二二)

桜井神社は、堺市南区片倉に所在する延喜式内社で、誉田別命・足仲彦命・息長帯比売命を祀る。鎌倉時代の割拝殿は国宝に指定されている。拓本の銘文を有する石燈籠は、もとは堺市南区鉢ヶ峰寺に所在した延喜式内社である国神社のものである。明治四三年(一九一〇)に、国神社が桜井神社に合祀されるにもなつて、桜井神社に移され、現在は同社の収蔵庫に保管されている。現在、桜井神社

で毎年一〇月に行われている大阪府指定の無形民俗文化財「こおどり」も、もとは国神社で旧暦八月に行われていた芸能である。

拓本は一紙で、縦六四・四cm、横八七・九cm。七紙(うち一紙は白紙)を貼り合わせている。石燈籠の竿・中台・火袋の一面を採拓している。竿部上段に「鉢峯山五所権現長福寺」とあるが、これは現在の鉢峯山法道寺にあたる。享保元年(一七二六)に將軍徳川吉宗の嫡子が長福(のちの家重)と命名されたことを憚つて、それまでの寺号「長福寺閑谷院」を改めた(享保元年八月長福寺寺号改名につき願書)。また、長福寺に五所権現が勧請されていたことは、永徳三年(一三八三)正月二日付の「平正員田地寄進状」に「寄進鉢峯寺五所権現田事」とあることからわかる。竿部下段にある「勸進良秀」は、応永三年(一四二四)九月二日付「大庭寺曼荼羅供職衆請定状」に「律師良秀」、同三年三月二日付「葉音寺曼荼羅供職衆請定状」に「良秀律師」、同年三月二〇日付「長福寺法具借損料置文」に「法眼和尚位良秀」とみえ、長福寺の寺僧であつたと考えられる。嘉吉元年(一四四一)四月一日付「良秀所持品配分状」には、「良秀遺物等事」とあるので、この頃に没したとみられる。

拓本には、「大正三年四月一日 此日社司井守忠輝邂逅」との木崎の書き込みがある。竿部の拓影は『摂河泉金石文』に収められており、解説の最後に「移轉勿々、未だその組立を了らざりしを、予は同社掌井守忠輝君の助力を得て、これを手拓せり」とあり、明治四三年の合祀後五年を経て、石燈籠の組み立ては完了していなかったことがわかる。

〔拓本銘文〕

(右上) 鉢峯山

五所権現

長福寺

(右下) 應永十九年

勸進良秀

三月十七日

(中央上) 泉州鉢峯寺

(中央下) 長福寺閑谷院

〔朱印〕

「好尚所拓」

〔添書〕

(右下)「第參拾號」、〔朱書〕「大正三年四月一日^{基三}此日社司井守忠輝邂逅／泉州^{ニハクニ}上神谷村片蔵桜井神社 石燈／境内國神社物(一)／此祠鉢峯山法道寺旧鎮守／近移于桜井社内」

(中央下)「長福寺法道寺旧称／國神社物(一)」

(左上)「國神社物(三)」

(左中央)「國神社物(四)」

〔参考文献〕

天沼俊一『石燈籠』第二回分冊(スズカケ出版部、一九三三年)、『堺市史』続編第一卷・第四卷(堺市役所、一九七一年・一九七三年)

65 蓮台寺燈台銘(A七―一八)一紙

正長元年(二四二八)

蓮台寺燈台は、大阪府泉佐野市南中安松の八幡神社の神殿裏に安置されている砂岩でできた六角型の燈籠である。笠には卵形の宝珠を置き、竿は円形で上端に複弁反花、竿受に円座を刻出する。高さは約二mで、保存状態はあまりよくないものの、ほぼ完全な状態である。本銘文は竿の中節の上部に三行に分かつて刻まれている。但し、三行目は後世の追刻であると考えられている。拓本は、全体の寸法が縦三四・〇cm・横一九・〇cm、拓影が縦三〇・五cm・横二六・〇cm。墨付きが薄い部分が多く、特に三行目は一文字目の「夜」以外は不明である。

蓮台寺は、燈籠が安置されている泉佐野市域には存在せず、この燈籠がいつの時代にどのような経緯でこの地に伝来したのかは不明である。八幡神社には、かつては泉佐野市域に蓮台寺が存在し、何らかの事情で数体の仏像が浄蓮寺(泉佐野市南中安松)に移され、燈籠は八幡神社に移されたと伝えられている。また、京都に上品蓮台寺があり、寺伝によると、応仁・文明の乱で寺が廃絶状態に陥った際に豊臣秀吉の援助によって復興されたが、紀州根来寺の僧侶も復興に尽力したとあり、根来寺の介在によって何らかの形で京都の上品蓮台寺から、根来寺の

勢力が及ぼされた泉佐野市域にもたらされたものとも考えられる。

〔拓本銘文〕

蓮臺寺之燈呂

正長元年^戊七月二日

夜^{〔念佛〕}〔縛衆〕

〔参考文献〕

『大阪府史蹟名勝天然記念物』第四卷(大阪府、一九二九年)、天岸正男・奥村隆彦『大阪金石志―石造美術』(三重県郷土資料刊行会、一九七三年)、泉佐野市教育委員会編『泉佐野の歴史と文化財』第四集 泉佐野の史跡(泉佐野市教育委員会、一九九六年)

66 旧川崎東照宮石燈(A七―三四)一紙

元和三年(二六一七)

川崎東照宮は元和三年(二六一七)、当時の大坂藩主で徳川家康の外孫にあたる松平忠明により天満・川崎の地に造営された。拓本に採られた石燈籠は、松平忠明が寄進したものである。

明治六年(一八七三)、川崎東照宮は廢社となるが、神殿再建を願う有志が明治四〇年に葵俱樂部を結成。それまで北野・東光院(寺院は大正期に豊中市へ移転)に預けていた川崎東照宮の鳳輦を神体とし、空心町二丁目に宮造りして祀った。そしてここに、忠明寄進の石燈籠三基も移されたのである。

ところが、昭和九年(一九三四)には、葵俱樂部メンバーの高齡化のため、三基の石燈籠は鳳輦・鳳輦庫とともに大阪天満宮に寄進されることになる。翌一〇年、鳳輦庫が境内北側、龜の池埋立地に移設され、三基の石燈籠はその前に据えられた。

さらにその後、もうひとつたびの移転を経て、現在では大阪天満宮本社、幣殿脇の東唐門・西唐門前にそれぞれ一基ずつ、梅花殿の中庭に一基が設置されている。石燈籠の総高は二・六m余り。三基の形や大きさはほぼ同じであるが、格狭間の模様から、両唐門前の二基が一对の石燈籠であることがわかる。

拓本は縦九二・五cm、横三四・三cm。燈籠竿部の碑文を手拓したものである。碑

文と石灯籠を照らし合わせたところ、文字の位置と字形から、西唐門前に設置されている石灯籠の拓影であることが判明した。ところが、両唐門前の石灯籠には、碑文の「東照大権現宮」にあたる文字が削り取られているのである。大阪天満宮の権宮司稲住祝人氏、権宮司柳野等氏らのお話によると、昭和三〇年代後半に亀の池付近を整地し、さらに、昭和三九年には、東照宮を本社第五殿に奉斎していることから、石灯籠を鳳輦庫前から現在の場所に移し、「東照大権現宮」の文字も削り取ったのではないかとのことであった。拓本は、現在西唐門前にある石灯籠のかつての姿を写した貴重な資料であるといえる。

〔拓本碑文〕

奉寄進

東照大権現宮

元和三丁巳年四月十七日

從四位下行侍從兼下總守源朝臣忠明

〔朱印〕

「好尚手拓金石」

〔端書〕

「天満 葵俱樂部／旧川崎東照宮／石燈」

〔参考文献〕

木崎愛吉編『大日本金石史』第五卷（歴史図書社、一九七二年）、近江晴子「境内散歩―元和三三年松平忠明公寄進の燈籠―」（『てんまてんじん』二四、一九九三年）、高島幸二「社殿探訪③―川崎東照宮の遺産葵の紋の御鳳輦庫―」（『てんまてんじん』四三、二〇〇三年）

67 御津八幡宮大和屋甚兵衛名代一座踊子寄進石燈（A七―五四）四紙

天和二年（一六八二）

御津八幡宮に建てられていた石燈。御津八幡宮は、大阪市中央区西心斎橋、いわゆる「アメリカ村」の中心部にある。応神天皇（一五代）・仲哀天皇（一四代）・神功皇后（仲哀妃）を祭神とし、欽明天皇（三四代）三年の創祀とされている。

石燈は、大坂芝居創業の一人である名代（興行主）大和屋甚兵衛一座が寄進し

たものである。木崎愛吉の『大日本金石史』によると、承応元年（一六五二）に若衆歌舞伎が停止になった後、延宝年間（一六七三―一六八一）には、野郎歌舞伎が興行されるようになり、この石燈に刻まれた連名は、その当時の表方・勘定場などの興行者側と俳優の名であることがわかる。

拓本は石燈の竿四面（方形）をとったもの。寸法は、正面が縦七六・四cm、横三二・〇cm、右側面が縦七六・五cm、横三二・〇cm、背面が縦七六・六cm、横三二・五cm、左側面が七六・四cm、横三二・七cm。

この石燈は、現存していない。昭和二〇年三月一三日の空襲により破損したようである。従ってこの拓本は、野郎歌舞伎草創期の関係者の名前を確認する上で貴重なものである。

〔拓本銘文〕

〔正面〕

大和屋甚兵衛 錢屋市良左門

大和屋兵吉 齋藤幾平次

八幡宮 錢屋勘六 靄川いつき

大和屋牛松 三沢吉三郎

綿屋長之助 松井勘四郎

田中屋万三郎 熊本文左衛門

〔右側面〕

山本宇兵衛 林八左衛門

田宮八郎左衛門 東条源兵衛

壬 勝山八三郎 野川六郎右衛門

天和二年 山本庄九郎 山本九平次

戌 長門七郎右衛門 坂本新右衛門

山本五平次 富川岩右衛門

岩山理平次 和泉三左衛門

〔背面〕

中村数馬 中川金之丞

山本左源太 坂田銀右衛門

願主

池田勝之丞
瀧本門之丞
最上藤八

坂田作弥
尾上源太郎
松本十良左衛門
山本太郎次

(左側面)

伊藤小太夫
松本大五郎
笹岡甚五郎

正月十五日

袖嶋市弥
松永類之助
藤田靄杏
村上市之丞
小野山宇次右衛門
山本源十郎
服部次良右衛門
藤田小平次

(添書)

(正面)

「御津八幡宮石燈」

(背面)

「共四葉 御津八幡宮和泉屋甚兵衛名代一座踊子寄進石燈」

(参考文献)

木崎愛吉編『大日本金石史』第五卷(歴史図書社、一九七二年)、『大阪市史史料第十七輯 御津八幡宮・三津文書(上)』(大阪市史編纂所、一九八六年)

68 興福寺銅燈台銘 (A七―八二) 一紙

弘仁七年(八一六)

興福寺銅燈台は、興福寺南円堂の前にあつた銅製の燈籠である。同燈台は、台・基礎・竿・中台・火袋・笠の六個からなるが、露盤・伏鉢は後補であり、さらに近年宝珠が盗難にあい、失われた。現在、燈台本体は同寺国宝館に安置され、基壇が当初の位置にある。

銘文は銅燈台の火袋の扉(羽目)にあり、現在羽目は四面が伝存する。羽目の上部には襷格子を施し、一面七行、毎行九字を楷書する。火袋は六本の柱によつて六面に分かれることから、銘文は六面にわたるものとし、二面が失われたとき

れてきた。しかし、火袋本体の一面にだけ蝶番とりつけの跡と扉軸穴が残されて

いることから、六面のうち一面は両開きの扉であり、他の五面が羽目であつたこと

とがわかり、扉と羽目五面のうちの一面のみが伝存していないことが判明した。銘文には、弘仁七年(八一六)に伊予権守正四位下藤原朝臣公が亡父の遺志を継

いで造立した旨が記されている。「伊予権守正四位下藤原朝臣公」については、弘仁四年の南円堂造営との関わりから藤原冬嗣をあてる説と冬嗣の兄である藤原

真夏をあてる説があつたが、弘仁七年時に冬嗣は権中納言・従三位であることから、「伊予権守正四位下藤原朝臣公」は兄の藤原真夏と考えられる。

また、銘文の撰者と筆者はともに空海であるとも、撰者は空海とし、筆者は橘逸勢であるともされているが、いずれも確証はない。現在では銘文の撰者や筆者は不明であるが、現存しない扉の部分に撰者名・筆者名が書かれていたのではな

いかと考えられている。
拓本の法量は縦一三〇・三cm、横五五・〇cm。

(拓本銘文)

銅燈臺銘^{并序}

弘仁七載歲次景申伊

豫權守正四位下藤原

朝臣公等追遵

先考之遺敬志造銅燈

臺一聆心不乖麗器期

於撲慧景傳而不窮慈

光燭而無外遺教經云

燈有明明命也燈延命

辟喻經云為佛燃燈後

世得天眼不生冥虜普

廣經云燃燈供養照諸

幽冥苦病衆生蒙此光

明緣此福德皆得休息

然則上天下地匪日不

明向晦入冥匪火不照
是故以斯功德奉翊

先靈七覺如遠一念孔

迹庶幾有心有色並超

於九橫無小無大共鑷

於八苦昔光明菩薩燃

燈說呪善樂如來供油

上佛居今望古豈不美

哉式標良因貽厥來者

云大雄降化應物開神

三乘分轍六度成津百

非洗蕩万善惟新更昇

切利示以崇親其薰修福

〔朱印〕

「好尚所拓」、「好尚所藏金石」

〔添書〕

「大正二年八月十七日 於奈良博物館拓 興福寺藏」、「第五拾六号ノ一」
(本書)

〔参考文献〕

『古京遺文注釈』（桜楓社、一九八九年）、奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観』補訂版第七卷（岩波書店、一九九九年）。

69 豊国神社銅燈籠（A七一九二）一紙

慶長一五年（一六一〇）

豊国神社銅燈籠は、慶長一五年（一六一〇）に京大工頭初代の中井正清（一五六五～一六一九）が京都市東山区の豊国神社に寄進した燈籠である。銅製で鍛造され、慶長期特有の彫金手法を用いて造られている。拓本の寸法は縦一八・二cm、横五〇・五cm。なお、この燈籠は現在も豊国神社の宝物館に収蔵されている。

寄進者である中井正清は、永祿八年（一五六五）大和国に生まれる。中井孫大夫正吉の子で、通称は藤右衛門。関ヶ原の戦い以後に徳川氏との関係ができたが、

それ以前は豊臣家の工匠として仕えていたと思われる。徳川氏との関係ができてからは畿内・近江六カ国の大工と大鋸の支配を仰せ付けられ、慶長一一年（一六〇六）には従五位下大和守に任ぜられた。正清が関与した工事には、伏見城・江戸城・名古屋城・内裏・方広寺など数多くあり、慶長七年（一六〇二）から元和年間（一六一五～一六二四）にかけて幕府の主要な建築工事に関与している。

〔拓本銘文〕

豊國社

奉寄進

金灯籠

慶長十五庚戌年

七月吉曜日

中井大和守

橘朝臣正清

〔朱印〕

「好尚所藏金石」

〔添書〕

「京都豊国神社／銅燈籠」
(本書)

「第百八拾参號」

〔参考文献〕

平井聖編『中井家文書の研究』第一卷 内匠寮本図面篇一（中央公論美術出版、一九七六年）

【銅鉄諸器類】

70 聖武天皇造国分寺勅書銅版（A九一三）一紙

天平勝宝五年（七五三）

聖武天皇造国分寺勅書銅版は、明治五年（一八七二）に東大寺から皇室へ献上され、現在は正倉院宝物となっている。一枚の銅板の表裏に、天平勝宝五年

(七五三)の聖武天皇の願文と、天平勝宝元年の聖武天皇の施入願文が刻されている。表面の天平勝宝五年の願文は、天平一三年(七九四)二月一四日に発布された国分寺建立の詔がもとになっていると考えられる。勅書銅版の作成時期については、奈良時代説と平安時代説の二説があり、いまだ議論が分かれている。

拓本は表裏一紙ずつを台紙に貼り合わせて一紙仕立てとしており、縦四二・一cm、横四八・八cm。拓影は、『大日本金石史』附図に収載されている(四五・四六頁)。そこには、「真拓一部・摸版(以文會舊拓)」とある。明治初年に御物として正倉院に収められた銅板を、いつ、どうして採拓したのかは不明であるが、勅書銅版の研究のみならず、明治時代の正倉院宝物のあり方を知る上でも、この拓本は貴重な資料である。

〔拓本銘文〕

(右) 菩薩戒弟子皇帝沙弥勝滿稽首十方三世諸佛法僧去天平十三年歲次辛巳春二月十四日朕發願稱廣爲蒼生遍求景福天下諸国各合敬造金光明四天王護国之僧寺并寫金光明最勝王經十部住僧廿人施封五十戸水田十町又於其寺造七重塔一區別寫金字金光明最勝王經一部安置塔中又造法華滅罪之屋寺并寫妙法蓮華經十部住尼十人水田十町所冀聖法之盛与天地而永流擁護之恩被幽明而恒滿天地神祇共相和順恒將福慶永護国家開闢已降先帝尊靈長幸珠林同遊寶網又願太上天皇太皇后藤原氏皇太子已下親王及大臣等同資此福俱到彼岸藤原先後大政大臣及皇后先妣從一位橘氏太夫人之靈識恒奉先帝而陪遊淨土長願後代而常衛聖朝乃至自古已來至於今日身爲大臣竭忠奉国者及見在子孫俱曰此福各繼前範堅寄君臣之礼長紹父祖之名廣給群生通該庶品同辭愛網共出塵籠者今以天平勝寶五年正月十五日莊嚴已畢仍置塔中伏願前日之志悉皆成就若有後代聖主賢卿養成此願乾坤致福患者拙臣改替此願神明効訓

(左)

施

封五千戸

水田一万町

以前捧上件物遠限日月窮未來際敬納彼三寶分依此發願太上天

皇沙弥勝滿諸佛擁護法樂薰質万病消除壽命延長一切所願皆使滿足令法人住拔濟群生天下大地人民使樂法界有情共成佛道以代代国王爲我等檀越若我等興復天下興復若我寺衰弊天下衰弊復誓其後代有無道之主邪賊之臣若犯若破障而不行者是人必得破辱十方三世諸佛菩薩一切賢聖之罪終當隨大地獄無數劫中求無出離十方一切諸天梵天護塔大善神王及普天變土有勢威力天神地祇七席尊靈并佐命立功大臣將軍靈共起太禍永滅子孫若不犯觸敬勤行者世世累福終隆子孫共塵城早登覺岸

天平勝寶元年

平城宮御宇太上天皇法名勝滿

〔朱印〕

〔好尚所藏金石〕

〔添書〕

〔御物 正倉院〕、〔^{朱書}第百五拾六號^{朱書}〕_消

〔裏書〕

〔御物聖武天皇造国分寺勅書銅版_{天平勝寶五年}〕

〔参考文献〕

東野治之「聖武天皇勅書銅版」(『日本古代金石文の研究』、岩波書店、二〇〇四年)、
『第五十八回「正倉院展」目録「平成十八年」』(奈良国立博物館、二〇〇六年)

収録拓本一覧

図版番号	名 称	整理番号	年 代
1	宇治橋断碑	A 1 - 1	大化2 (646)、寛政5 (1792) 復元
2	近江超明寺養老元年石柱	A 1 - 6	養老元 (717)
3	上野国下賛郷神亀三年碑	A 1 - 7	神亀3 (726)
4	上毛山名村碑	A 1 - 8	天平13 (741)
5	八幡古碑	A 1 - 13	正安3 (1300)
6	中村歌右衛門 (三世) 墓碑	A 1 - 28	文政7 (1824)
7	高野山慈尊院道 四里石	A 1 - 62	弘安元 (1278)
8	嘉暦三年碑	A 2 - 10	嘉暦3 (1328)
9	陸奥多福院吉野先帝供養碑	A 2 - 11	延元4 (1339)
10	原田法華寺法華経碑	A 2 - 25	永禄10 (1567)
11	島津義弘建立高麗陣敵味方戦没者供養碑	A 2 - 34	慶長4 (1599)
12	船王後墓誌銘	A 3 - 1	天智7 (668)
13	采女竹良卿墓誌銘	A 3 - 3	持統3 (689)
14	伊福吉部徳足比壳墓誌銘	A 3 - 6	文政2 (1819)
15	石川年足墓誌銘	A 3 - 9	天平宝字6 (762)
16	高屋枚人墓誌銘	A 3 - 10	宝亀7 (776)
17	紀氏吉継墓誌銘	A 3 - 11	延暦3 (784)
18	伝聖徳太子墓誌銘	A 3 - 14	天喜年間
19	暁鐘成翁墓碑銘	A 3 - 15	明治44 (1911)
20	池大雅墓碑	A 3 - 19	安永6 (1777)
21	大塩家墓碑 (大塩平八郎建立)	A 3 - 30	文政元 (1818)
22	荻生徂徠墓碑銘	A 3 - 32	江戸時代中期
23	片山北海墓碑銘	A 3 - 34	江戸時代中期
24	木村兼葭堂翁墓碑銘	A 3 - 40	享和2 (1802)
25	契沖墓 付 契沖碑	A 3 - 44	元禄15 (1702)・寛保3 (1743)
26	坂田藤十郎墓碑銘	A 3 - 53	大正8 (1919)
27	坂本剛毅碑	A 3 - 54	文久2 (1862)
28	篠崎小竹墓碑銘	A 3 - 60	安政2 (1855)
29	鉄眼道光茶毘所碑	A 3 - 75	天和2 (1682)
30	中井莞庵墓碑銘	A 3 - 77	宝暦8 (1758)
31	松尾芭蕉碑銘	A 3 - 91	享保19 (1734)
32	安部宗任女墓碑	A 4 - 1	仁平2 (1152)
33	征西大將軍式部卿親王墓碑	A 4 - 4	南北朝時代
34	徳川家康母 (於大の方) 墓碑	A 4 - 8	慶長7 (1602)
35	基督教徒墓碑	A 4 - 11	慶長13 (1608)
36	井原西鶴墓	A 4 - 19	元禄6 (1693)
37	大石内蔵助父墓碑 付 大石良雄・主税墓碑	A 4 - 21	寛文13 (1673)・元禄16 (1703)
38	大塩家墓碑 (大塩政之丞建立) 付 塩田鶴亀助夫妻墓碑	A 4 - 22	明和元 (1762)・享和 (1801)
39	小西来山夫妻墓碑	A 4 - 35	江戸時代中期
40	近藤守重 (重蔵) 墓碑	A 4 - 36	文政12 (1829)
41	椀屋久右衛門墓碑・松山墓碑	A 4 - 45	延宝5・6年 (1677・78)
42	初代竹本義太夫墓碑	A 4 - 48	正徳4 (1714)
43	近松門左衛門夫妻墓碑 (広濟寺・法妙寺)	A 4 - 52	享保9 (1724)
44	十時梅屋母墓碑並墓誌	A 4 - 53	江戸時代中期
46	中井竹山墓碑	A 4 - 57	江戸時代中期
45	富永芳春他墓碑	A 4 - 55	江戸時代中期
47	西山宗因墓碑	A 4 - 61	江戸時代前期
48	本阿弥光悦墓碑	A 4 - 67	寛永14 (1637)
49	品川相模守時頼塔	A 5 - 1	弘長3 (1263)
50	逢坂一心寺元和元年本多忠朝石塔 付 宝永五年家臣五士追悼碑	A 5 - 68	元和元 (1615)・宝永5 (1708)
51	正和四年日岡山宝塔	A 5 - 99	正和4 (1315)
52	山名時氏宝篋印塔	A 5 - 105	応安4 (1371)
53	稲淵龍福寺竹野王塔	A 5 - 118	天平勝宝3 (751)
54	兵庫平相国十三重塔	A 5 - 119	弘安9 (1278)
55	野崎慈眼寺永仁二年塔	A 5 - 121	永仁2 (1294)
56	薬師寺仏足石並銘	A 6 - 1 - 1	天平勝宝5 (753)
(参考)	薬師寺仏足石	A 6 - 1 - 2	
57	八尾常光寺山門内石地藏銘	A 6 - 23	永禄元 (1558)
58	観心寺阿弥陀像光背銘	A 6 - 67	斉明4 (658)
59	道明寺土師神社石燈	A 7 - 3	康元2 (1257)
60	榮山寺石燈	A 7 - 5	弘安7 (1279)
61	春日神社石燈	A 7 - 6	延慶2 (1309)、江戸時代追刻
62	日部神社石燈	A 7 - 11	正平24 (1369)
63	黒田神社石燈	A 7 - 15	建徳3 (1372)
64	桜井神社 (旧国神社) 石燈	A 7 - 17	応永19 (1412)
65	蓮台寺燈台銘	A 7 - 18	正長元 (1428)
66	旧川崎東照宮石燈	A 7 - 34	元和3 (1617)
67	御津八幡宮大和屋甚兵衛名代一座踊子寄進石燈	A 7 - 54	天和2 (1682)
68	興福寺銅燈台銘	A 7 - 82	弘仁7 (816)
69	豊国神社銅燈籠	A 7 - 92	慶長15 (1610)
70	聖武天皇造国分寺勅書銅版	A 9 - 3	天平勝宝5 (753)

協力者（五十音順・敬称略）

近江晴子 小泉雄一 酒井 一 清水喜美子 大岩泰英
廣田浩治

協力機関（五十音順・敬称略）

朝日新聞社 一心寺 大阪天満宮 関西大学図書館 広濟寺
西照寺 正念寺 正法寺 瑞龍寺 誓願寺 大応寺
太子町立竹内街道歴史資料館 大倫寺 天徳寺 御津八幡宮

図録編集

西本昌弘 櫻木 潤 松永友和

拓本解説執筆者

西本昌弘（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所センター研究員）
櫻木 潤（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所センターP.D.）
内海寧子 松本 望 松永友和

（以上、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所センターRA）

佐藤健太郎（関西大学非常勤講師） 猪飼龍太 池尾直洋

今西加奈 岩田季恵 上田友恵 大槻暢子 金本純一

亀田剛広 鴨野有佳梨 カンパナ・マウリツイオ

近藤 翼 清水敦子 鈴木晴美 曾我友良 東儀大樹

研谷昌志 中井裕子 中井陽一 中尾和昇 二星祐哉

福岡麻衣 藤井貴之 藤岡真衣 松岡隆史 三木善文

村山弘太郎 山口哲史 山口卓也 吉川 潤 芳之内圭

（以上、関西大学大学院生）

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業（平成17年度～平成21年度）
なにわ・大阪文化遺産の総合人文学的研究

なにわ・大阪文化遺産学叢書 7

木崎愛吉
旧蔵 本山コレクション金石文拓本選

発行日 2008年3月31日

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
関西大学博物館内

TEL: 06-6368-0095

mail: naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

印刷所 株式会社 NPC コーポレーション
〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19